
真・恋姫?無双 ～二人の天の御遣い～

世紀末敗者寸前

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双 〱二人の天の御遣い〱

【Nコード】

N6282K

【作者名】

世紀末敗者寸前

【あらすじ】

城崎龍司は7年前家族を失い その日から彼の人生は大きく狂ってしまった

日常と非日常の堺で生きていく龍司は偽名を使いながら世界中で反戦活動が続いていた

自分のような人をこれ以上生まないために…

だがどういう訳か龍司の両親の死んだ日 彼は実家へと帰り 墓参りを終えた後、倉庫に入ったのだが…

不思議な空間のゆがみに飲み込まれ…彼が目を覚ました場所は…
異世界！？

この物語は 一人の少年が戦争の最中少しずつ成長していく物語です
一応主人公は少しチートがっていますが 魔法などの非現実的な
力は使えません

プロローグ（前書き）

この小説は完全に不定期気味の更新予定です

もう一方の小説を書いている際にモチベーションが下がったりした時にこっちの小説を書く予定なので

加えて主人公の力 通常の人間よりかなり上なので それが嫌という方は回れ左をお願いします

プロローグ

「父さん!! 母さん!!」

父「…お、俺は…もう駄目だ…に、逃げろ…龍…司…」

「いや…いやだよ!! こんな…こんなのって!!」

母「龍…司…ゴメンナサイ…ね…」

「か、母さん…」

母「強く…生きてね…私達の…自慢の息子なのだから…」

「…う、うん!!」

父「ふ…俺たちは…いつでもお前を見守ってるぞ…」

「う…グスッ…」

父「泣くな!! 龍司!!」

「!!!!」

母「せめて…今だけは…貴方の笑った顔を見せて…」

「……分かり…ました…」

父「……そろそろ…ここも危なくなる…行くんだ、龍司!!」

「うう……」

母「龍司…」

「……クッ…」

そうして少年は走り出した

大粒の涙を流し、唇を強く噛み血を流しながら…

母「…まさか…こんなことになるなんてね…」

父「…これも天命だろ…あいつだけを残していくのは気がかりだが…」

母「大丈夫よ…何せあの子は…私達の…」

——自慢の息子なんですもの…

そして…二人は絶命していった
少なくとも…あの時、俺と俺の家族がいた場所で起こった戦争での
生存者は…数えるほどだった
そのうちの一人が俺だった…
全身血まみれになり、傷を負いながらも何とか安全な区域まで逃げ
ることが出来た

俺はその時思った…
今まで実感はしなかったが…人の命の重みを…大切なものを目の前
で失う苦しさを…
俺は…絶対に…あの日という時間を忘れないだろう…

理由も分からず異世界へ（前書き）

気分次第で更新します

こっちはメインではないので

理由も分らず異世界へ

ガタンゴトン…

電車に揺られながら…向かう先は父方の実家

ゴールデンウィークということもあって都会から電車を使ったときは余りの人の多さに気分が悪くなったが…

この電車には人がほとんどいない

それだけ、この先の駅には人の通りが無いのだろう

「…あれから、もう7年…か」

忘れてはいけない…過去の記憶

両親を失ったあの忌まわしき戦争…

今日は両親の墓参りに向かうために実家に向かっている

「…そろそろ着くかな」

——次は〇×村〓御下りのお客様は〓〓〓

着いた…か

一年たっても変わらない場所だな

寄り道もすることなく、目的地である実家へと着いた

駅からさほど遠くないため、迷く事もなくなつたどりつくことが出来た

「…お邪魔します」

お爺「ん、だれじゃ…って、龍司かいな!？」

「お久しぶりです」

お爺「おうおう♪一年ぶりじゃな♪また大きくなったのう」

「いえ、お爺こそ。相変わらずお元気そうでなによりです」

お爺「はっはっは!! まだまだ若いもんには負けんわい!!…今日
は…墓参りかの？」

「…はい」

お爺「…毎年、ありがとうの」

「…これは俺にとっての義務であり…そして…戒めですから」

お爺「…そうか」

「…では、行ってまいります」

お爺「…泊っていくんじゃろ？」

「ええ、お爺がいいのであれば」

お爺「いいに決まっておろう!! 宴会の準備をしておくから、楽しみにしておくんじゃぞ!!」

「…はい」

墓石を掃除するための道具や、両親の好きだったものを持ち、龍司は墓場へと向かっていった

お爺「…ふう…昔よりは良くなってくれたようじゃの」

昔のあ奴は…世界のすべてを憎み…少々危ないことも平気でやりそうな位荒んでおったからな…

急に変わり始めたのは4年前…何があったのかは知らんが…龍司が明るくなってくれたのは…正直うれしかったのう…

お爺「おっといかんいかん! さっさと準備せねばな♪」

「…久しぶり…父さん、母さん」

掃除を済ませ、雑草を処理しつくしたところには日はすっかり沈んでいた

「…信じられないだろうけど…俺、今はレジスタンスに所属してるんだ。そこで、世界中の戦争行為を停止させて…罪のない人たちを助けて回ってるんだよ…国際的には犯罪者扱いだけど…俺は後悔してないよ。だって…俺のような思いをする人たちを…助けられるんだから…」

墓前には父の好きだった牡丹餅…そして、母の好きだったポ○キー…線香をあげ…祈る…

これは毎年行うことなのだ…

「…これから先、俺がどうなるのかは分からないけど…どうか、見守っていてくれ…」

暫くした後、龍司はその場から立ち去った

その場に自分以外の者がいたことに気付かずに…

??? 「…ふむう、あの者ならば…乱世でも生きて行けるな」

お爺の家に着くと、どうやら村中の人たちを集めたようで…既にどんちゃん騒ぎが始まっていた

龍司は苦笑しながらもその席に加わり、杯を交わしあった
そこで、様々なものを渡された

お金やら家で見つけた古い刀やら秘蔵の酒やら…

どんなチョイスだよ：そう思ったが：：
久しぶりに楽しいと感じた

翌日：お爺に頼み、龍司は古い倉庫の中にいた
この倉庫の中には父の残した歴史的な遺産が残されているため、龍
司は度々この中に足を踏み入れ、いくつかの物を持ち出してはそれ
を研究していた

「ふう：この辺は大体調べ終わったな♪」
この歴史のにおいを感じることは好きだ
ここら辺は親父に似たのだろう

「今回は：何故か500年前に作られたはずなのに刃毀れすること
なく：刀身が綺麗な謎の刀：三国時代に記されたという書物：昔の
王族が残したという髪飾り：」
こうやって親父の残した参考資料を元に、調べては拾い、背のバッ
クに入れていく

すべて詰め終わったので、倉庫から出ようとしたとき：

「……ん？」

とある奥の棚が目に入った
そこは、まだ入ったことのない場所だったのだが：

「：何だろうか：異様に：惹かれるな：」
何かにひかれるように：龍司はその棚の奥へと向かっていく

「…何も…ない？」

その先には何もなかった

いや…何もないはずなのだ

何せその棚の奥は行き止まりなのだから…

「……………（でも何なのだろう…この感覚は…）」

嫌な予感がするため、急いでまわれ右をしようとしたとき…

グニャリ…

「!?!」

視界の先が…捻じれてる!?

まずい…あの捻じれ…何かある…

そう考えているうちに…その捻じれはどんどんこちらに広がって
いく…

「くそっ…何なんだ、これは!？」

やがて…龍司はその捻じれた空間に飲み込まれ…

その倉庫から姿を眩ました

??? 「これが吉と出るか…凶と出るか…見せてもらおうよ」

ヒュウ~~~~

誰もいない倉庫に風が吹き始めた

こうして…歴史は動き始めた

龍司 呉に介入す

黄蓋「ふう…もう春じゃというのに…肌寒いのう…」

孫策「氣候がくるってきてるのかもね…世の中の動きに連動して…」

黄蓋「…確かに最近の世の中の動きは…少々狂ってきてますからな…」

孫策「宦官の悪政やら盗賊の横行やら…飢饉なんかも起こってるって言うし…世も末よ」

黄蓋「…そういえば策殿、こんな噂があるのを知っているか？」

孫策「どんな噂なの？」

黄蓋「…黒天を切り裂き、光り輝く流星に乗り舞い降りし者。光り輝く一刀と謎の道具を持ったもの…乱世を鎮めるであろう…」

孫策「それって…あの管輅の占いでしょ？胡散臭いわね」

黄蓋「そんなものまで信じたくなる世の中なのじゃろうて」

孫策「そうね…さてと、そろそろ偵察も終えて戻らないとね。冥琳に何を言われるか…」

バチツ…

孫策「…何…これ？」

視界が急に白くなったと思えば…

黄蓋「う…策殿！！気をつけなされ！！」

その白さは一瞬で消え、元の風景に戻っていた
一つを除いて…

???「……………」

二人の目の前には大きな荷物を持ち、どうやら気を失っている少年がいた

孫策「この子…いつの間に」

黄蓋「先程までこのような儒子はおらなかった…となると先程の光とともに現れた…ということか」

孫策「…祭、連れて帰るわよ」

黄蓋「アヤカシの類かもしれぬぞ？」

孫策「もしかしたら…あの菅輅の言ってた天の御遣いかもしれないし…本当に妖の類なら私が殺してしまえばいいわ」

黄蓋「了解した」

「……………う、ん…」

ここは…どこだ？

え…つと…倉庫の中にいたと思ったら、いきなり歪みに巻き込まれて…あれ？

その先に記憶がない…

それに…本当にここどこ？

少なくとも…俺の知る場所じゃないな…

ガチャッ…

孫策「あら…気がついたようね」

「！…！！」

いきなり部屋に人が入ってきたために警戒を強くする龍司…

孫策「あらあら、そんなに警戒しなくてもいいわよ」

「……………」

孫策「ふう…どうすればいいかしら」

黄蓋「どうやら我らが敵であるかも知れんと思っているのだろう？
？
？
？
「だろうな。私も彼の立場ならこうなるだろう」

「……………（敵意や殺気は…ないな）」

「…聞いてもいいか？」

孫策「何を？」

「…この場所と…何故俺がここに居るのかを…」

孫策「その前に貴方の名前を聞かせてもらえるかしら？」

「…失礼した。俺は…（偽名のほうがいいかもしれない…政府関係の者かもしれないし…）ノウエルⅡガンランスだ」

孫策「の、のえる？」

「？
？
？
「ノウエルⅡガンランスと言ったんだ、雪蓮」

雪蓮「うう…言いくいよ…冥琳」

冥琳「確かに…しかし変わった名だな。どのように書くのだ？」

「…何か書くものはある……ってそういえば俺のバックはどこだ？」

雪蓮「ばっく？」

「俺が持っていた袋のこと」

黄蓋「おう、それなら部屋の隅に置いてあるぞ」

「ならその中に紙とボールペンがあるから…それで書くか…」

雪蓮「紙は分かるけど…ばーるペン？」

「…このことだけど…見たことないのか？」

雪蓮「ええ…冥琳は？」

冥琳「知らんな…これは何なのだ？」

「何って…物を書くためのものだ…こんな風にな」

バックから出したボールペンで紙に名を書く

黄蓋「何と…このようなもので文字が書けるのか…」

「……ホイっとこれが俺の名だ」

「「「……………」」」

「…どうした？」

冥琳「：馬鹿にしているのか？」

「：は？」

冥琳「このようなものを文字というわけがないだろう」

「何を言っている。これは片仮名という日本では立派な文字だ」

雪蓮「にっぽん？」

「：ここは日本じゃないのか？」

雪蓮「違うわよ。ここは荊州南陽。貴方は私達が偵察に出ている時、いきなり白い光と同時に荒野に現れたの。だから、私達がここまで連れて来たってわけ」

：何だろう：どっかで聞いたような気がするよ：

「：そういえば：俺は自分の名を名乗ったが：君達の名は？」

雪蓮「ああ、そういえば忘れていたわね。私は姓は孫、名は策、字を伯符っていうの」

「：はい？」

冥琳「私は姓を周、名を瑜、字を公瑾だ」

黄蓋「わしは黄蓋じゃ、字を公覆という」

：：：荊州：孫策：周瑜：黄蓋：

そこから割り出せる回答は：一つ：

「もしかして：俺、タイムスリップでもしたのか？：？：？」

非現実的なのだが：それしか思い当たらないというのも現実なのだろう：

さて：これをどういう風に説明したらよいのか：

とりあえず：分かることから説明していくことにした

俺が未来から飛ばされてしまったこと：この世界が俺の世界に伝わ

っていた三国志とは少し異なっているということ（主に性別）…俺自身、なぜここに居るのか…全く分からないということ…

冥琳「ふむう…余りにも突拍子過ぎて…現実性に欠けるな」

「…なら未来から来たという証明をすればいいわけだが…うん…何を説明したらよいか…」そうだ、これがあつたな」

バックから取り出したのは…ポラロイドカメラとお酒
ってなんでお酒が入ってるんだよ!!!?

黄蓋「…これは？」

「…この黒いのはカメラといって写真を取ることが出来る機械なんだ…で、こっちは何故か入っていた俺の時代のお酒」

黄蓋「酒じゃと!!!」

「うお!!!?」

雪蓮「祭、興奮しないの。で…え…と…」

「…名が言いにくいのならノエルでいい」

雪蓮「ノエルが言ってたしやんとかきかいて何？」

「写真は…これだ」

鞆から取り出したのは…バックの底に入っていた生徒手帳

冥琳「これは…絵ではないのか？」

「違う…これは説明するよりも実際にこれで写真を取ったほうが早いのだが？」

雪蓮「あ、私やってみたい♪」

冥琳「駄目だ!! そんな未知の物を!!」

祭（黄蓋）「うむ…その通りじゃ（チラチラ）じゃからまずはわしが毒見をしよう」

「……チラチラと何故酒びんを見るんですか？」

祭「そ、そんなことはないぞ!!! うん!!!」

「：はあ、俺はまだあまり酒は飲めないので：よろしければ後で差し上げますよ」

祭「本当か！！！？」

「ええ：酒瓶が何故かあと10はありますから：（多分、宴の時に誰かが入れたんだろうな：）」

祭「おう♪ノエルはなかなかの器量じゃな♪」

「：（酒あげただけで器量があるって言われても嬉しくないのだが：）では、撮りますね」

祭「よし、こい」

：カシャッ！！

「：終わりましたよ」

祭「何！？もう終わったのか！！？」

「ええ：ちよっと待っていてくださいね：ツと、写真も出来ましたよ」

出来たての写真を祭に渡す

祭「おお：私はこんな顔をしているのか：」

冥琳「これは：術の類なのか？」

「さっき言ったと思うけど：機械だよ。まあ、学問が発展したものと思ってくれていいよ」

雪蓮「安全なのよね？」

「勿論、それは保障するよ」

雪蓮「なら私と冥琳も撮って〜♪」

「了解した」

結局、三人分の写真を撮ることになった

だが…ここで一つ気になることがあった

「…聞いてもいいかな？」

雪蓮「何〜？（写真を見てご機嫌なようで…）」

「さつきから周瑜のことを冥琳と呼んでいるようだが…何故だ？」

雪蓮「何故って…冥琳は真名だからよ」

「真名…とは？」

周瑜の説明によると…真名とは神聖なる名のことです。心を許しあつた者のみに教える特別なものだから…

「…理解した、そして謝罪する」

冥琳「？ 何故だ？」

「俺は先程周瑜の真名を口にしてしまったからだ」

冥琳「ほう…だが、まあ気にしてはいない」

何か含みのある言い方だが…まあいい

雪蓮「それにしても…真名を知らないなんて…」

「…俺の世界では真名なんて物はないんだ」

冥琳「では…ノウエルⅡガンランスという名は…真名に値するのかわかる？」

「…ふむ…孫策たちになら…本当のことを語ってもいいかもな…」

雪蓮「???」

「実はな…ノウエルⅡガンランスというのは…偽名だ」

「…「な!?!」」

「ちょっとした事情があつてね。俺は名を二つ持っているんだよ。で、見ず知らずの者と話すとき、俺はノウエルの名を語るってわけ祭」では…本当の名があるということじゃない？」

「ああ…俺の本当の名は…城崎、字を龍司という」

雪蓮「…どうして偽名を使っているかは…聞いても教えてくれない

わよね？」

「……………ああ」

雪蓮「…分かったわ。でも、いいの？見ず知らずの私達に本当の名前、教えちゃって」

「問題はないだろう。どうやらこの世界で俺の本当の名は真名に該当するようだ。だから、俺は一応孫伯符や周公謹を信用したという証として教えた…それだけだ」

雪蓮「ふうくん…なら、私達も真名を教えないとね。私の真名は雪蓮よ」

冥琳「私は冥琳という」

祭「わしは祭じゃ」

「…雪蓮、冥琳、そして祭さん…これから俺はどうすればいいんだ？」

雪蓮「それはあなたが決めることではなくて？」

「思うに俺には殆ど選択肢はないと思うぞ？」

冥琳「その理由を聞こうか」

「第一に俺が知る限り今のこの時代、野党が溢れ、王朝は衰退し、宦官が政を無視し遊戯に耽るという時代なのだろ？その中、俺が一人この世界で独り歩きするのは余りにも無謀といってもいいだろう。何せ俺は地理や情勢などの情報を一切持っていないのだからな」

冥琳「ほう…」

「第二に金銭的な問題と俺の立場だ。この世界の常識と俺の常識は根底から異なるし…俺自身、一文無しだ。この二つの問題を抱えたまま外に出れば十中八九のたれ死ぬか野党に襲われてハイ終わりつてなるだろうな」

冥琳「成程…」

「それに…雪蓮たちは俺のことを利用したいのだろう？」

祭「なッ!？」

雪蓮「…どうしてそう思ったのかしら？」

「俺自身は自覚ないが…俺は雪蓮たちが言う『天の国』から来たと

いうことになっているのだろうか？天の世界の住人が孫呉に力を貸す。それを噂として世に流せば名を得ることが出来る。ならば、それを利用しない手はない。そう思ったわけだ」

冥琳「…成程、頭のほうは回るといふことか」

「そこまで言うほどのことじゃないと思うが…」

雪蓮「なら…貴方はどうする気かしら？」

「…雪蓮たちがいいのであれば…俺は雪蓮たちと行動を共にしたいと思っっているのだが？」

祭「先程のこともあるのにか？」

「利用できるなら利用し合う…それだけじゃ何か変か？」

雪蓮「…プツ…あはは♪やっぱり貴方気に入ったわ♪」

「なら、行動を共にするということでもいいか？」

雪蓮「ええ、いくつか条件があるけどね」

「…可能な限り受け付けよう」

その一、天の知識を私たちのために使うこと

その二、私達の武将達と積極的に話すこと

「……何だろうか…二つ目のほうは…嫌な予感がするが…どういう意味か教えてくれないか？」

雪蓮「簡単よ♪貴方の胤を呉に入れるのよ」

…わあい…やっぱそうなりますか…

「…二つ目のほうは……考えさせてくれ…」

祭「？　どうしてじゃ？」

途端に龍司の顔は茹でダコのように真っ赤になった

「い、いや／＼／…その…お、俺………そういったことに…慣れてな

くて／＼／

雪蓮「(うわゝ…凄く真っ赤になってるゝ…でも…可愛いかもゝ♪)」

冥琳「まあ、二つ目のほうは気長に考えてくれ」

「そ、それならいいんだ／＼なら、協力させてもらうよ」

こうして、呉の孫策に協力すると約束した龍司は共に行動し始めた

???「ふむ…これからどう歴史が動いていくのか…楽しみだ」

戦闘

それから暫くした後、雪蓮は部屋を訪れた女性に呼ばれ何処かに行った

「どうやら袁術に呼ばれたそうだ」

「…どうやら…既に孫堅は死んでしまったようだな」

「???」「あれ…?この方は…?」

冥琳「穩、彼は天の御遣いの…この場合、どちらの名を言えばよいのだ?」

「彼女は雪蓮の部下なのだろう?ならば、俺の信用に値する。本当の名前のほうでいい」

穩「はじめまして」。私は陸孫、字を伯言といいます。真名は穩です」

「…ああ、よろしく。俺は姓を城崎、名を龍司という。字と真名を持たぬ国から来たため、俺のことは城崎か龍司と呼んでくれ」

穩「はい。♪よろしくです」

「何だろう…俺、この人苦手かも…」

冥琳「ところで龍司よ。お前は何かに優れているとか…そういうのはないのか?」

「武芸や学問といった分野でか?」

冥琳「それ以外にも何かあれば教えてくれ」

「…武芸なら、弓と旋棍、刀が扱える。学問は…そうだな。一般の天の者よりも役に立ちそうな知識は持ち合わせている。例えば、この時代にはない兵器や道具などのな。…あとは料理が得意だ」

冥琳「これは…本当に思わぬ拾いものをしたかもしれんな…」

祭「龍司よ。なら、その弓の腕、見せてもらってもよいか?」

「ん…弓と矢は？」

祭「儂の使うといい」

龍司は徐に空を見上げると、その先には渡り鳥たちが空を飛んでいるのが目に入った

そして…精神統一し…弓を構え…放った

ザクッ！！…ドサッ…

龍司の放った矢は…空を飛んでいた一匹の渡り鳥の急所を貫き…絶命させた

「…久しぶりだから、感覚が掴み難いな」

祭「…これは何とも見事なものじゃ…」

冥琳「…誰か！！」

冥琳がそういうと、兵士であろう男が一人部屋に入ってきた

兵士「は！！お呼びでしょうか！？」

冥琳「彼のための武器を用意してもらいたい」

兵士「は！！それはどの武器でしょうか！？」

冥琳「旋棍を…」

「待ってくれ」

冥琳「どうした？」

「多分、普通の旋棍だとすぐに壊れるから…出来ればかなり頑丈な
そして…」

龍司はペンをとりだすと、何やら書き始め…

「こういった感じの旋棍、作れるのであれば作ってくれるよう手配
してくれないか？」

兵士「はっ！！了解しました！！」

兵士はその紙を受け取ると、部屋から立ち去って行った

冥琳「何を書いていたのだ？」

「俺が昔使っていた武器を出来るだけ細かに記した設計図。可能な作ってもらいたくてね」

冥琳「成程：だが、どうして普通の棍ではだめと？」

「弓を射たとき感じたのだが：どうやらこの世界で俺の身体能力や腕力はかなり高いらしい：その証拠に：」

龍司は壁に立てかけてあった槍を右腕で強く握りしめると：グシャッ！！

折れた：というより粉々になって潰れた

祭「何と：」

「まあ：こうなるわけ：俺自身の力が強すぎて、特別製のじゃないと持たないってわけ」

祭「ふむ：冥琳よ。龍司であれば一軍を任せられるのではないか？」

冥琳「ええ：でも、まだ指揮する力を見せてもらってはいないし：そこを見てから考えてもおかしくないと思うのだが：」

「：一応言っておくが：俺は一軍を率いる力はないからな。誰かの補佐とか：そういったことで十分だ」

冥琳「何故だ？」

「：：：俺自身、誰かに指揮するという経験が全くない半面、独自行動をするということが多かった：だから：」

祭「他者に合わせる事が出来ぬ、そして誰かの命を預かることも出来ぬということか？」

「：：：：そこまではいかないが：まあ後は新参者の俺に一軍を率いる資格はないってこと。多少たりとも信頼されてるのは雪蓮たちのみだろ？兵士はまだ俺のことをよく知らないのだし：」

冥琳「ならば、雪蓮の副将として出陣してもらおうというのはどうだ？」

「…いいのか？総大将の元にこんな身元不明の怪しい奴置いて」

冥琳「何だ？協力してくれるのであろう。ならばこれが信頼の証のつもりなのだが？」

「…食えない人だね、冥琳」

冥琳「それはお互い様だ、龍司」

雪蓮が帰ってくるまで、俺と冥琳は俺の世界の兵器について語っていた

偶然、親父の形見として持ってきたデザートイーグルがバックに入っていたので…

何故持っていたかは聞かないでくれ…

俺の世界とこの世界の異なる戦争について語ると、冥琳は複雑な顔をした

冥琳「…引き金一つで一つの命を簡単に奪えてしまう兵器…か。恐ろしいな…」

穏「そうですね…それに自分で相手を殺めたという感覚がなくなりますし…」

「ああ…だから、俺達の世界の戦争は正直、この世界の何倍も人が死んでいく…それも、その多くは兵士でなく一般の市民なんだ」

冥琳「…恐ろしい時代なのだな」

穏「私達が思っていた世界とは随分と異なるんですね」

「勿論、世界のすべてがそういうわけじゃない…だが、俺がいた場所はその場所が多かった…それだけだ」

冥琳「龍司…この兵器は…」

「…天の御遣いの神聖な武具として扱ってもらえればいい。普段は

俺が持っているが、何かあればこれが天の御遣いだという証拠になるかもしれないからな」

冥琳「分かった」

穩「それにしても……」

穩は机の上に置いてある大量の紙が目に入った

そこには、龍司が書きあげた……

己の知る限りの情報が書き込まれていた

え？漢文じゃないと通じないって？

それくらい、昔親父に徹底的に叩き込まれたから……

読むだけでなく、書くことも可能なんですよ……

冥琳「【連弩】、【地雷】、【木牛木馬】……これらは本当に役に立ちそうだな」

穩「他の都市開発や農村開発案、医療開発の充実化も今まで見たことがないくらいの物ばかりで……はあ……♪生きているうちにこんな素晴らしい案が見れるなんて……♪」

「すべて俺の考えたことではないがな。俺の時代の昔の先人達が残した資料を読み漁ったものを暗記し、それを覚えていた。ただそれだけだ」

冥琳「だが、これだけの資料を覚えていただけでなく、我らの文字を使って分かりやすく書くなど……そうそう出来ないのではないか？」

「……それは……どうなんだろうな」

穩「そうですね……先程龍司さんが書かれた偽名のほうの文字は全く理解できませんでしたし……」

「……漢文と片仮名は使い方が異なりますからね」

冥琳「だから……お前は自信を持ってもいいと思うぞ、龍司」

「……あ、ありがと……」

今までこんなに面と向かって褒められるなんてなかったからな…照れる／／／

「…か話変わるけど…冥琳といい…雪蓮といい…祭さんといい…何でここってこんなに美人ばっかなんだよ…服の露出度高いし…目のやり場に困る／／／」

一抹の不安を抱えながら、龍司は雪蓮が帰ってくるまで話す続けた

暫くして、雪蓮が帰ってきたが…少し不機嫌なようだ

雪蓮「あゝもう。私は袁術の部下じゃないってのに…」

冥琳「また出陣を言い渡されたのか？」

雪蓮「ええ…全く人使いが荒いんだから」

「…袁術、ね」

雪蓮「あら？知ってるの？」

「まあな」

雪蓮「それも天の知識から？」

「ああ…しかし、この世界の袁術ってどういう奴なんだ？」

雪蓮「一言で言う…我儘おチビちゃん」

「…成程ね、それは腹が立つだろうな」

雪蓮「あら、わかってくれるの？」

冥琳「ほら、話はそこまでにして…袁術は何と？」

雪蓮「ここから70里先に居る賊達およそ1万を5000の兵で片付けろって…」

冥琳「…はあ」

「…何だ、それ…滅茶苦茶な命令だな。兵法の基本は相手よりも多くの兵を集めることなのに」

祭「こんなものはまだ良いほうじゃ」

穩「そうですねゝ：以前は1000の兵で1万の賊のいる巢窟を壊滅しろというものでしたし：」

「うわ：それ、良く勝てたな」

冥琳「ああ：全く：今回はどうするか：」

「：なあ、俺に先鋒を任せてくれないか？」

雪蓮「え！？」

「いい機会だと思う。俺に歩兵1000を預けてくれないか？」

冥琳「その兵数で何をする気なのだ？」

「正面から潰す」

冥琳「：策は？」

「相手は唯の賊なのだろう？それなら圧倒的な力を見せつけ、恐怖を与えれば自滅していくと思うが？」

祭「：出来るのか？」

「やってみせる：としか言えんな：後は：」

トントント：

ノックする音が聞こえると、部屋に先程の兵士が入ってきた

兵士「申し上げます！！先程の紙を鍛冶屋に見せたところ、この棍を渡されたのですが：」

兵士の手にあったのは：

銀色に輝く立派過ぎるほどの業物だった

「：ちょっと拝見するな」

龍司はそれを受け取ると、手に取り構えをとると：

「：……ふむ、冥琳」

冥琳「どうした？」

「これを作ってくれた鍛冶屋に御礼って出来ないかな？」

冥琳「それで大丈夫なのか？」

「十分過ぎるほどだ」

冥琳「そうか…では、これをその鍛冶屋に渡してくれ」

冥琳は小さな袋を兵士に渡した

兵士はそれを受け取ると部屋から退出した

「…これで準備万端だ…後は…許可のみ」

冥琳「…ふう、勝てる見込みは？」

「絶対に勝つが？」

冥琳「…分かった。なら、雪蓮を大将とし、龍司は共に歩兵800と騎兵200、弓兵200を率いて敵を迎え撃て」

「了解した」

冥琳「もし、危険だと思ったら直ぐに引け。分かったな？」

「ああ…では、準備しておく」

冥琳「ああ…では待っているぞ」

そう言い残し、冥琳・穏・祭は部屋から出て行った

「…さてと、準備をして…」

まずは服を着替えないとな…

このTシャツとジーパンじゃ恰好がつかないから…

冥琳の用意してくれた御遣いらしい服装と…

後は俺が持っていた漆黒のマントをして…

腰に旋棍、背中に日本刀…そして…足に小型のバックをつけて…そ

こに拳銃を入れておくか…

服を着替え終えた俺は鏡を使い、自分の恰好を確認してみた

黒い…

全体的に見てそう思ってしまうのは着ているものすべてが黒いからなのだろう…

まあ、黒は嫌いじゃないからいいけど…

この赤髪と蒼い眼には合わないのではないかと思えてならない…

「うーん…これで大丈夫かな？　なんだか似合っていないような気がするのだが…」

雪蓮「あら、似合ってると思うけど？」

「そう？　ならいいけど………って………?!?!?!」

何で雪蓮がいるの………?!?!?!」

「チョッ!?!?　何でまだいるの!?!?!」

雪蓮「えー、だって軍を進めるにあたって話したかったことがあったし♪」

「だ、だからって部屋に残ることもないでしょう!?!」

雪蓮「ふふふ♪」

「…はあ…で、話って…」

雪蓮「そ・ん・な・こ・と・よ・り・も♪」

「??.?」

雪蓮「龍司って…いい体してるのね♪無駄な筋肉なんて一切ついてなかったし」

「言うな………!!!!!!　恥ずかしかったんだぞ………!!!!!!」

／／／

雪蓮「キャー……♪龍司が怒った……♪」

はあ…戦う前なのに…こんなんでいいのか？

色々あったが…

出陣した後、賊についての情報を聞くとその相手は黄巾党だという

ことが分かった
分かったのだが…

「…クソ袁術が…」

先程偵察に行かせたところ、俺たちの向かう先には約2万の兵がいるそうだ

しかも陣が張られて兵糧もかなりあるとか…

どうやら袁術の調査が不十分だったのだろう…

雪蓮「あゝ…これはかなり厳しいかな…」

「こっちはおよそ5000の兵…はあゝ」

雪蓮「どうする？」

「…仕方ないか、俺が先に突っ込んで相手を混乱させる。その後に、雪蓮は群を率いて敵を更に混乱させてくれ。敵が陣に戻ったその後、冥琳と穩が左右から火矢を一斉に放ってくれ。それから、俺、雪蓮、祭さんの三人が全軍を率いて敵陣に攻め入り、止めを刺す……これでどうかな？」

冥琳「……………」

穩「……………」

祭「……………」

「あ、あの…何か？」

雪蓮「いえ…予想以上に凄いと思ってね…」

「そうか？」

冥琳「ああ…今の策は私と穩がこれから説明しようとしたものなんだが…」

「…余計な真似だったか？」

穩「いえいえ…♪そんなことはありませんよ」

「ならいいのだが…」

冥琳「だが…本当に一人で大丈夫なのか？」

「問題ない…というよりも理性を失った驕のなっていない獣のよう

な野郎どもの相手なんて楽だろ？」

雪蓮「うゝんゝ冥りゝんゝ」

冥琳「駄目だ」

雪蓮「うっゝまだ何も言っていないのにゝ」

祭「策殿のことじゃ。龍司とともに突撃したいというのじゃろ？」

雪蓮「えゝゝ駄目？」

「ゝ」 「ゝ」 「駄目！！」 「ゝ」 「ゝ」

雪蓮「ぶうゝぶうゝゝ何で冥琳や祭はともかく穩や龍司までそんなこと言うのかなゝ」

「ゝ雪蓮、総大将だって自覚ある？」

雪蓮「うっゝ」

「とにかくゝ行ってくる」

冥琳「ああゝだが、その前にゝ」

「んゝ」

俺と雪蓮、冥琳は全軍が立ち並ぶ前に立った

冥琳「皆の物、これより天の御遣いが檄を与える！！心して聞け！！」

やれやれゝ大役だなゝ

「ふうゝ呉の兵士たちよ！！我は天より舞い降りし、御遣いなり！！此度、我は天より命を受け孫呉に我が力のすべてを捧げることとなった！！皆、我に続け！！新たな呉のために、この大地に存在する悪を打ち滅ぼすために！！汝らには天の加護あり！！共に立ち上がるのではないか！！！！」

うおおおおおおおー！！！！！！！！！！

「…これでいいか？」

雪蓮「うん♪上出来よ、龍司」

雪蓮「勇敢なる呉の兵たちよ！！いいよ我らの戦いを始める時が来た！！我らには御遣いの加護が付いている！！恐れる必要はない！！全軍、剣をとれ！！弓を引け！！我に続け！！！！」

[illegible]

先程よりも強く大きな声がその大地に響き渡った

「じゃあ、まずは俺が行く」

雪蓮「いってらっしゃい…気をつけてね」

「おう♪」

やれやれ……こんな時代に飛ばされて……まだ理解していない部分もあるが……

こういった風に周りに流されて生きるっていうのも……悪くない……のかもな……

「…武具に名前でもつけるか…この棍は…覇天…日本刀は…村正
でいいか…」

まあこんな感じでいいか……

つと……そろそろ見えてきたな……

相手が常識を持ったものであるのなら戦いたくはないが……
賊であるなら問題ない

罪なき人を殺し、奪いつくそうとする者など…
俺は絶対に許したくない…

だから…加減はしない…

↓黄巾軍陣地↓

賊1「おい！！誰か近づいてくるぞ！！」

賊2「何！？…って一人？」

賊3「そんなわけがないだろう！！ここには2万の味方がいるのだから」

賊4「情報によると…袁術の軍の孫策っていうのが来てるらしいぞ」

賊5「だが…たった5千なのだろう…それに目の前に居るのはたったの一人…」

首領「…どうやら俺たちは舐められているようだな。全軍、打って出るぞ！！！」

「「はっ！！」」

「さてと…敵陣の目の前まで来たのはいいけど…敵が出てきてくれないとやりずら…（ガチャ…）…出てきてくれたよ…」

一人というのが分かったのか…誰もが我先にと俺のほうに向かってくる…

賊1「へッ…てめえ、この先に何の用だ？」

「…お前ら、黄巾党か？」

賊2「ああ、そうだが？」

「…一つ聞く、お前らは何故民から力ですべてを奪おうとする？」

賊3「決まっているだろう!! 楽しいからだよ!!」

「……………」

賊4「そういやあ、てめえの持ってるその刀と服、高く売れそうだな!!」

賊5「それを置いていくのなら命だけは助けてやるぜ?」

「成程:雪蓮の言っていた通り:理性を失った獣そのものだな」

賊1「あん? 何いってんのかわかんねえが:とりあえず服を置いて(グシャッ)……………」

ドサッ:

賊2「!?!?!?」

賊3「な、なんだ!」

「…もう…喋るな」

賊4「な、なにをしやが(グシャッ):」

黄巾党のすべての者が驚愕した

瞬く間に二人の人間の首がなくなったのだ

それも…突然に…

「聞け、脳髓まで腐ったウジ虫ども!!! 我が名はノウエル!! ガンランス!!! 天より舞い降りた御遣いなり!!! 我が使命は:この大地より貴様らのような民を脅かし、世を乱すものを粛正することとなり!!! その力、しかとみよ!!!」

賊2「お、お前ら!!! 一斉にかかるぞ!!!」

賊3「相手は一人だ!!! やっちまえ!!!」

うおおおおおおおー!!!

「ふう…やはり群れる獣どもだな…考えもなく唯突っ込んでくるだ

けとは…」

一呼吸つき…

「ふっ！！！」

両手に棍を構え、その大群の中に突っ込んでいった

賊「うおお！！」

「甘い」

ひらりとかわし…

バキッ！！

賊「ギャッ！！」

カウンターの要領で棍で顔を潰し…

気がつけば既に300もの兵が息絶えていた

その死体の山を見た黄巾党の刃にはじわじわと…死への恐怖が出てきた…

「…………あれか」

前に進みながらも探していたのは…頭領の首

頭領「な、なんだ…あいつは…」

バキッ！！グシャッ！！

「…見つけた」

頭領「ひっ！！！」

正体の分からない者に目を付けられた瞬間、頭領は恐怖におびえていた

普段ならば、このようなことはないはずなのだが…

此度は…相手が悪すぎたのだ…

頭領「お、お前ら！！俺をま（バキヤツ！！！！）」
ドサツ：

あまりの恐怖のため、周りに居る仲間に助けを求めようと目を反らした瞬間、頭領の頭は己の体と永遠の別れを告げることとなった

「…敵、黄巾党が大将！！我が討ち取ったり！！！！」

大将を討ち取るまでかかったのは戦闘が始まってからわずか1刻足らず：

名乗りを高々と上げると、それまで混乱状態にあった黄巾党は混乱のピークに陥った

賊「ば、ばばば化け物だー！！！！！！」

一人が逃げ始め、そして…次第にその場にいたすべての黄巾党が陣に傾れ込むように逃げて行った

それを確認した龍司は…ようやく一息つくことが出来た

「ふう…やれやれ…」

雪蓮「お疲れ様」

「あ、ようやく来たか」

雪蓮「仕方ないじゃない。まさかこうも凄いなんて思わなかったから…」

「統率のどの字もない連中なんて…相手にならんだろ」

雪蓮「あはは…さてと、これから敵陣に乗り込むわよ。用意はいい？」

「勿論だ」

その後、陣に火を放ちより一層混乱した黄巾党を攻め立て、壊滅させることに成功した俺たちは居城に戻るようになった

道中：

冥琳「龍司：ありがとう」

「ん、なんのことだ？」

冥琳「先鋒での働き、行動の早さなど祭や雪蓮から詳しく聞いた。そのおかげでこちらはほぼ無傷でこの戦いを終わらせることが出来たんだ」

「：俺だけの手柄じゃないよ、この戦いに勝ったのは」

冥琳「それでも、お前の働きがあったからこそだと皆思っているよ」

雪蓮「そうそう♪冥琳が人を褒めるなんて滅多にないんだから。ありがたくその感謝を受け取っておきなさい♪」

「まあ、褒められたり認められたってのは嬉しいけど／／／

祭「これなら兵どもも龍司を将として認めるじやろうて」

「……………はい？」

穩「そうですね♪これだけの大勝を導いた上に、あれだけの大言を実現させた人物ですから♪」

「あ、あの／＼…」

雪蓮「あら、何？」

「俺は将になるのは嫌だといったような気がするのですけれども？」

雪蓮「却下♪」

「理不尽すぎない!？」

それから何とか抵抗しようと、色々試みてみたが…
結局は断り切れず…

呉の将になることになってしまいました
とほほ…

華琳との接触

将となってからそれはもう忙しい日々が続いた

書類整理やら警邏やらは勿論のこと、黄巾党が近くに居れば袁術から出陣の要請が来て：

その度に出陣というかなり多忙な日々を送らなければならなかった

そして今日も：

「…また出陣か」

冥琳「悪いな、龍司。またなんだ…」

「まあこればかりは仕方ないからな。今は袁術に従って、従順な振りをしないとな」

冥琳「頼んだぞ…私たちはこれからやらなければならないことが出来てしまったから…今回、出陣できるのは龍司のみなんだ」

「気にしないでくれ…情報と今回俺が引き連れていける兵数を教えてくれ」

冥琳「敵は3万5千、たいしてこちらは1万だ」

「…相も変わらず厳しいね」

冥琳「それでも雪蓮が交渉して数を増やすように進言したんだ」

「…まあ仕方ないか…じゃあ、出陣するよ」

兵法では相手よりも多くの兵を集めるべしであるけど…その条件が整ってないと、策で補うしかないんだよね…敵の陣が確認できるところまで到着したけど…どうするか…

兵士「申し上げます!!!」

「何だ？」

兵士「右方より夥しい数の兵が!!!」

「何!?!?どこの旗だ!?!」

兵士「あれは…【魏】それに…【曹】の旗が!!!」

「ということは…曹孟徳か」

…挨拶はすべきだろう

一目見ておきたいしな

「誰か!!!曹軍に使者を。我らは敵にあらずと!!!」

兵士「はっ!!!」

「この間に…策を考えないとな…」

…敵陣は周りを森林に囲まれ要塞となった陣と山の麓にある陣の二つ
一つは楽だろうが…もう一つは…

兵士「申し上げます!!!」

「どうした…?…って君はつい先程使者に行った…」

兵士「はい!!!実は曹操の陣に行った後、御遣い様と話がしたいと
…」

「…分かった。こちらから出向くと伝えてくれ」

???「その必要はないわ」

兵士「なッ!?!」

「…さっきから感じたことのない気配がすると思ったら…もうこ
ちらの陣に来ていたとはな」

「失礼、勝手に陣に入らせてもらったわ」

「…いや、こちらこそ出迎えもせずにこのような状態で失礼した。ああ、下がっていいぞ。あと、皆に食をとり命が出るまで休むよう伝えてもらえるかな？」

兵士「は、は！！了解しました！！！」

「さてと…まずは自己紹介からね」

「そうだな。俺は今回、この軍を率いることになったノウエルⅡガ
ンランスというものだ」

「の、のえる？」

「…言いくいのであればノウエルでも結構だ。曹孟徳」

曹操「！！！！ あら、どうして私が曹操だと？」

「鎌をかけただけだ…それに…他の者と比べ、覇気が強いのでな。
そうではないかと思った…それだけだ」

曹操「…そう」

「それで…我が軍に何の用だ？」

「貴様…！！ 先程から聞いていれば、華琳様に対して何と
いう口を聞か…！！」

「それについては同意するわね！！ やっぱり男って…」

「……誰やねん？」

夏口惇「我が名は夏侯元讓だ！！」

「男になんて教える名なんてないわ」

「やれやれ…来るのは曹孟徳だけだと思っていたのだが…曹孟徳、
貴公の部下は礼儀というものを知らないのか？」

曹操「春蘭、桂花！！ 貴方達は私に恥をかかせるつもりなのかしら
？」

夏侯惇「も、申し訳ありません！！」

荀？「クッ…荀文若よ…」

「…マジか…（なんでこの世界の有名な武将な皆女なんだよ…しかも結構可愛いし…ハア…）」

ノウエルもとい城崎龍司…

女性関係がとても苦手なのであった

「…（出来る限りポーカーフフェイスでいたほうがいいかもしれんな）」

曹操「私が聞きたいのは何故ここに居るのかと、貴方が何者なのか、そしてどこの軍なのかということよ」

「ん…まず、俺は見て分かる通り孫呉の軍に入っているということになっている。そして、第二にこの度の出陣は不本意ながら袁術の命だ。第三に…俺はこの世界ではない別の世界から来た」

曹操「最初の二つは理解したけど…最後のはどういう意味かしら？」

「俺は…この世界で言う【天の御遣いだ】」

荀？「なッ！！？」

曹操「……」

夏侯惇「????？」

「まあ信じられんと思うがな…偶然、孫伯符に倒れているところを拾われ、その恩に報いるために力を貸す約束をしたんだ」

曹操「貴方が天の御遣いだと証明できるものは持っているの？」

「これとこれ…どっちなら信用できる？」

そういつて取り出したのは…拳銃とカメラ

拳銃は分かるが…何故カメラを持ち歩くんだ？

ノウエル
龍司は拳銃とカメラの使用目的を教えた

夏侯惇と荀？はカメラがいいと言い出したのだが…

曹操はどうやら拳銃のほうを選んだ

それにより、拳銃で証明することになった…

目標となるものは曹操が用意した鎧

それに向かって…引き金を引いた

ドキューーン！！

荀？「……………っ、何、今の音!？」

夏侯惇「なッ、鎧に穴が…」

曹操「…随分と恐ろしい武器のようね」

「…証明、出来たか？」

曹操「ええ、十分過ぎるほどにね」

「…なら早めに退出願いたい。俺はこれから目の前の黄巾党を壊滅させる策を実行させる」

曹操「あら、どうやって？」

「…言う必要ないだろ？確かに俺と曹孟徳は敵ではないが…味方でもないのだからな」

曹操「なら、一時協力戦線を組まない？」

「……何故だ？俺と組んでも碌なことにならないと思うぞ？」

曹操「いいじゃない。私、貴方に興味が出てきたわ」

「分かった…ならそちらからも軍師を一人貸してくれ。色々相談したいことがあるのでな」

曹操「分かったわ、でもその前に…」

「……？」

曹操「真名を交換しない？」

「…おいおい…真名は聞けば信頼し合った者同士でないと呼び合うことを禁じられるものなのだろう？今日、初めてあった天の御遣い

なんて言う怪しい奴に教えてもいいのか？」

曹操「ふふふ♪いいのよ。私が貴方を気にいつてしまったのだから」
「…ハア、分かった。我が真名は姓を城崎、名を龍司という。先程のノウエルⅡガンランスというのは俺の偽名だ」

曹操「城崎龍司ね。では、龍司と呼ばせてもらおうかしら。我が真名は華琳よ」

「ああ。では、華琳。今回はよろしく頼む」

華琳「こちらこそ。頼りにさせてもらうわね、龍司」

こうして、黄巾党壊滅戦に曹操と共同して動くことになった龍司…
これからどうなるのやら…

華琳と互いに握手をし終えた後、華琳の部下である夏侯惇と荀？の
ほうを見ると…

夏& amp; 荀「……………（ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…）」

なんだか知らんが…静かに怒ってるな
殺気を感じるが…

華琳「ほら、春蘭に桂花ももう一度しっかりと挨拶しなさい」

夏侯惇「むう…我が真名は春蘭だ…不本意ながらよろしく頼む…城
崎」

「こちらこそよろしく。…春蘭、君は魏最強の武を誇るみたいだね。
その力、頼りにさせてもらおうよ」

春蘭「あ、ああ…！任せておけ…！」

荀？「……………」

「…よろしく」

荀？「触らないでよ！！！！」

「……………はい？」

荀？「男なんて汚らわしくて無粋な生き物なんだから！！触れられただけで妊娠しちゃうわよ！！」

「…あ～…そういうことね（男が極度に嫌いなのか…）…まあ男が汚らわしくて、スケベなことしか考えない奴が多いってのは事実だしな」

荀？「ふん！！だから、男なんて…」

「でも、それはすべての男がそうだということではない。あんたのような固定観念を持つ人間は成長できないぞ？」

荀？「よ、余計なお世話よ！！！！」

「ああ…そうだな。まあ、別に仲好しごっこをしてくれって言うわけじゃない。ただ、勝利するためだけに協力はして欲しい。魏の天才軍師さん♪」

荀？「な、何で私が軍師って…」

「きにするな。まあ、そんなどうでもいいことは置いておいて…早めに作戦行動について話し合わないか？行動は成るべく迅速に行いたいのでな」

荀？「ふん…ならどこまで調べているのか聞かせてもらおうかしら」

「袁術が渡してきた情報はどうでもいいゴミばっかだったから…俺が独自に調べたことでいいか？」

荀？「ええ、むしろあの無能な袁術が調べさせたものなんていらないわ」

「だろうな…俺も少し読んで破り捨てたから。…コホン、じゃあまず敵の総戦力からだ。敵はおよそ4万。当初は3万5千だったのが今は少し増えたようだ。どうやら他方のほうから合流した部隊があったらしい。その部隊によって兵糧や武具も十分なほど整っているようだ。敵陣は二つ、山の麓と森の中に一つずつ…ただ、その陣の出来はかなり悪い。森のほうは火を放てば一気に全滅する位だ。まあ、その陣の近くに水場があったということが陣を組んだ理由なの

だろうがな。山の麓にあるのが本陣のようだな。敵の大将のような奴が昼間から酒を飲んでいたよ」

華琳「：龍司の言うとおりに、森のほうは一気に片がつきそうだけど：山の麓の部隊はどうしようかしら」

「華琳の部隊兵数は？」

華琳「2万と聞いたところかしら」

「こちらは1万：計、3万：本陣には3万の賊：数は互角だが：下手に兵を死なせたくない：」

華琳「それはどう意見ね。何か策があるかしら」

「：一つだけ：」

華琳「あら、では聞かせてもらえるかしら？」

「火計を行った後、敵本陣に黄巾党に変装させた兵を行かせ、森の陣が大群に襲われたという。そうすれば少なからず本陣の兵たちが動揺するだろう。それと同時に、俺と春蘭の1部隊が山を沿った所にあるこの間道を使い、相手の背後に回る：そして：混乱しているのを見計らって：正面と背後から挟撃：っていう策なんだけど：どうだろう？」

荀「：……」

華琳「なかなかの案ね。でも、それでも混乱しなかったら？」

「俺と春蘭の力技で捻じ伏せる」

華琳「そうね：今のところそれが上策のようね：桂花は何かあるかしら？」

荀「：……いえ、ありません」

「ん、なら華琳。春蘭を借りてもいいか？」

華琳「ええ。春蘭！！」

春蘭「は！！」

華琳「あなたは龍司と行動を共にし、私の部隊が正面から攻めると同時に敵の背後から攻撃しなさい！！」

春蘭「分かりました！！」

華琳「桂花は私とともに正面へ」

荀? 「…はい」

華琳 「…どうしたの?」

荀? 「…悔しいですけど…あの男のこと…認めざるを得ないですね」

華琳 「ふふふ…桂花が男を認めるなんて…益々龍司のことを気にいったわ。我が軍に欲しいくらいね」

荀? 「!!!」

それを聞いた瞬間、桂花は何を思ったのか…龍司の元に向かうと…
ゲシッ!!

「イタッ!!?」

思い切り蹴り上げた

「な、何で蹴るの!?!」

荀? 「五月蠅い!!! 変態男!!!!」

「(プツン) ……なあ、荀文若…」

荀? 「な、何よ…」

「…天の世界ではこういう言葉があつてな…」

——仏の顔も3度までっていうな…

龍司の眼が…優しかった暖かな視線がつめてえ——!!
というか怖い!!! 怖いぞ!!!!

ガシッ@桂花の顔をアイアンクロー

「ふふふふふふふふ………」

荀? 「ひっ!!!」

「…華琳?」

華琳「ひっ…な、何かしら？（ガクガク）↑恐怖のため少々震えている」

「…ちよつと荀？借りてもいいかな？かな？」

春蘭「な、何をする気なのだ？（ガクガク）↑同じく」

「…殺しはしないけどねゝあははゝちよつとゝお・し・お・きをしようと思つてねゝいいかなゝ？」

二人「!!!（コクコクコク!!!）」

頷くしかなかった……

先程までそれほど優しくかった龍司がここまで変わったのだ……

草食動物だと思い可愛がっていた動物が実は肉食だったと知ったとき：今まで可愛いと思っていたものに対し恐怖してしまうこと似たようなことなのだろうか：

ただ：二人よりもこれからお仕置きをされるであろう：桂花は二人以上に震えていた

「じゃ、逝こうか♪」

「は、放さない!!! か、華琳様!!! 助けてください」

桂花は龍司のテントに連れて行かれた……

桂花「な、何よこれ!!? って、何すんのよ!! あ、ああああ…あ
」

そのような声が聞こえたような気がした
気がただけだよ？

何せ陣内に居た全員が聞かぬふりをしていたから

30分は経つたであろう時……

テントに入る前にあったであろう凄まじい怒気はすっかりと消え失せ、今までどおりの顔つきに戻っていた

「あそこ」

「け、桂花！？大丈夫なの！？」

「け、桂花！？何があったの！！？」

だと思ってましたけど…龍司様は別だということを確認いたしましたあ／＼／」

! ! ? ? ? ! !

つい先程までそれほど嫌悪していた男であろう……

しかも……顔を赤くして……

「……何をしたの？」

「…耳を貸してくれ…正直、俺も恥ずかしいから…／＼／」
華琳「いいわ、で…何をしたの？」

「……………をして……………をした後、×××しながら○○○をした…
／＼／」

華琳「！……！／／／　そ、それは…確かに恥ずかしいわね／／／」

「ゴメンナサイ…俺、キレるとこういった奇行に出るらしくて…」

華琳「そ、そうなの…」

「…お詫びといっでは何だけど…これ、受け取ってくれないか？」

華琳「見たことのないものね…これは？」

「一応、天の国の物で…使用用途は……………するための物…桂花なら…喜ぶのではと思って…（でも、どうしてこんなものが入っていたのだろうか…）」

華琳「そ、そう…あ、ありがとう…」

「そのスイッチを捻れば振動して、逆にひねると止まるから。もし、動かなくなったらそれを太陽の光に一刻ほど当てれば5刻は使え続けることが出来るから」

華琳「へえ…天の国には面白いものがあるのねえ」

クイクイ

ん？誰かが俺の服を引っ張って……………桂花？

桂花「あ、あの…龍司様／／／この戦いが終わったら…華琳様と共に私を可愛がってくれませんかあ？／／／」

「……………はい？」

桂花「だ、駄目ですかあ？／／／」

「か、勘弁してくれえ…」

こうして一応、曹軍に認められた(?) 龍司は共に黄巾党を壊滅させる作戦を開始した

まあ…結果論で言うとな龍&曹の連合軍の圧倒的勝利に終わった
火計により火の手が上がった森の陣では大半の賊は焼け死に、水場
に逃げ込もうとした奴らはその場所に配置していた伏兵によって全
滅した

その後、一人の変装した兵士が賊の本陣であった山の麓に行き、そ
れを伝えると賊の大半が混乱に陥った

その隙を突き、龍司は背後より敵の大將を討ち取った

それによりさらに陣内の賊は混乱し、陣より逃げようと試みたが既
にその時には華琳と桂花の部隊によって囲まれていたため、残った
賊はすべて降伏した

こうして、両軍大した被害を受けることなく勝利を勝ち取ったのだ

「ふああ…疲れた…」

華琳「お疲れ様。春蘭から聞いたわ。賊の大將の首を旋棍で吹き飛
ばしたって」

「…ん、まあな…」

華琳「さて…降伏してきた賊はどうしようかしら？」

「処理は華琳に任せる。俺が南陽に連れて行っても多分あの無能馬
鹿の軍に吸収されるだろうから」

華琳「分かったわ。それで…貴方はこれからどうするの？」

「一応、陣をまとめて呉に戻るが？」

華琳「…ねえ、龍司…」

「???」

華琳「貴方、私たちの国に来ない？」

「……………はい？」

華琳「私は勿論のこと、桂花や春蘭も貴方を気にいったようだし」
「……悪いけど、それは出来ない。俺は、呉国の兵全軍の前で力を貸すと約束した。その約束を違えることなど、俺に出来ない」
華琳「ふうん…残念ねえ。でも、気が変わったらいつでもいらっしやい。皆、総出で貴方を歓迎するわ」
「ははは♪じゃあ、その時にはよろしく頼むよ」

こうして、華琳たちは他の地へ
龍司達は南陽へと変えることになった
その際、桂花は何やら残念そうな顔をしていたとか…

「やれやれ…予定よりも早く終わったからよかったが…」
華琳…か
俺が孫呉にいる限り、彼女とは敵対するかもしれないな…

何せ彼女はあの曹孟徳なのだから

そんなことを考えていると、一人の斥候が息を切らし、龍司の元に駆け込んできた

斥候「も、申し上げます!!!この先におよそ2万の黄巾党、更に義勇軍らしき部隊が戦っているのが見受けられます!!!!」

「…義勇軍の数は？」
斥候「3000といったところでしよう」

「……それは、かなりやばいな…」
兵士「御遣い様、いかがいたしますか!?!」

暫く考え、そして決断した

「皆、俺はこれからその義勇軍を助けに行きたいと思う。確かに、我ら孫呉には関係のない戦いなのかもしれない……だが、我らと志を同じとするかも知れぬ者達を無視し、見殺しにすることなど俺には出来ない……！」

兵士「御遣い様：我らは皆、貴方の判断に従います！！」

「皆、ありがとう。先の戦闘により疲労もあり、皆厳しい戦いになるかも知れぬ。それでも、俺についてきてくれるか!？」

おおおおお
――！！！！

「ありがとう、呉の勇敢なる戦士たちよ!!!!全軍、突撃——」

龍司の軍は先の戦闘での疲れを見せることなく、義勇軍救出のために走りだした

桃香と一刀との接触

??? 「ハア!!!」

ザシュ!!!

??? 「てやあ!!!」

ドスッ!!!

??? 「せいっ、せいっ、せえい!!!!」

ザクザクザクッ!!!

龍司が最初に目にしたのは義勇軍らしきものの先頭に立つ3人の女
武将…

どうやら彼女たちはかなり出来るらしい
襲いかかる賊を皆討ち取っている
が、やはり数の暴力とは面倒なものだな
切っても切ってもきりが無いとは…

「よし、今は賊軍は義勇軍に意識が行っている。横から突っ切るぞ
!!!」

おおおおおおー!!!

「銅鑼を鳴らせ!!! 旗を揚げよ!!! 剣を取れ!!! 行くぞ!!! 全
軍、我に続けー!!!」

??? 「クッ…このままでは…」

??? 「疲れてきたのだ…」

??? 「どうするべきか…」

うおおおおおおおー！ー！ー！ー！
「？？」 「な、なんだ！？ 敵の増援か！？」
「？？」 「でも、なんだか敵の様子がおかしいのだ」
「？？」 「どうやら敵の増援ではないようだな」
「？？」 「だ、だが一体この声は！？」

ギヤアアアー！ー！ー！ー！ー！

うわあああああー！ー！ー！ー！

3人は悲鳴の聞こえたほうを見ると：

賊が…どんどんと吹き飛ばされているようだ
小石みたいに：

「？？」 「ほ、本当に何なのだ！？」
「？？」 「分からん…分からんが…これは好機なのかもしれぬ」
「？？」 「鈴々もそう思うのだ！！」
「？？」 「だ、だが…現状がいまいち理解出来ん。そんな状態で…」

3人が話し合っている中：

「ふう…大丈夫か？」

龍司が敵の中央を突破し、3人の目の前に立っていた

「？？」 「Σ 何奴！！」

「そんなことは後で話せるだろう！！ともかく今は目の前の賊どもを蹴散らすことが先決だ！！」

「？？」 「うむ、それはもつともだ」

「？？」 「星！！」

鈴々「お兄ちゃん…黄巾党なのか？」

「違う!! なんでそうなる!! この黒い服見て、どうやったら黄巾党だと思えるのだ!! それから旗を見ろ!!!」

??? 「旗…ってあれは…【孫】!!!? …それに…【龍】?」

星「では、貴公はあの小霸王の軍なのか!？」

「ああ、賊討伐の帰りに貴方達が戦っているという報告を聞いて、ここまで来たんだ…ってだから、そんなことは後から話すからいい加減戦いに戻ってくれ!!!」

鈴々「…そんなこと言いながら…お兄ちゃん、もう200以上倒してるのだ…」

??? 「何と…」

星「ふむ…では、我らも参るか!!」

鈴々「おう!!!」

3人が再び、戦線に戻ってからあれだけ劣勢だった義勇軍は勝利を収めることが出来た

一方で、龍司の軍も傷を負うものはいたが、ほとんど死者は出さないという状況で終えることが出来た

そして、軍をまとめ再び呉に戻ろうとしたのだが…

「…あのお…これはどういうことで？」

何故か先程の女性3人に囲まれ、更に武器を突きつけられている始末…

??? 「貴君には確かに救われた…だが、こちらの質問に対して、一切応じて貰っていない!!!」

「…だからって武器をこちらに突きつける意味は？」

鈴々「逃げるかもしれないからって…愛紗が行ってたのだ♪」

愛紗「こ、こら!!! それでは私だけが悪いようではないか!!!」

星「いや…あながち間違いではないであろう」

愛紗「せ、星…」

「…ん、まあなんとなく事情は察した。だから、せめてこの武器をどけてくれ」

龍司がそういうと、三人は武器を引いた

「はあ…全く、俺は不幸の星の下で生まれたのか? ……あ、そういえば自己紹介がまだだったな。我が名はノウエルⅡガンランスだ」
愛紗「の、のえる???」

「……やっぱりこの国では俺のこの名は言いにくいのだな。言いにくいのならノエルでもいい」

愛紗「そ、そうか。我が名は関羽、字を雲長という」

鈴々「鈴々は姓は張、名を飛、字は翼徳なのだ」

星「性は趙、名を雲、字を子龍という」

「……………よろしく」

また女性かよ!!! どうなってんの!!!? この世界、武将のすべてが女性なのか!!! 何なの!!!?!!?!!

「…で、質問とはなんだ?」

愛紗「それは我らが主がこちらに来てからだ」

「…主…っていうと…劉玄德か?」

星「Σ 何故それを知っている!?!」

「…それを教えるのは君達の主が来てからね」

鈴々「お姉ちゃんだけじゃないのだ♪鈴々たちにはお兄ちゃんもいるのだ♪」

「お兄ちゃん?」

それは何だ？と聞こうとしたとき、一つの軍勢が現れた
その旗は…【劉】、【鳳】、【諸葛】、そして…【十】？
??? 「愛紗、鈴々、星！！大丈夫だったか！！？」
??? 「皆！！！！！」

俺達のいるほうに向かってくるのは…一人の男と女性…
あれ？あの男、どこかで見たような……

??? 「はあ…はあ…よ、良かった。三人とも無事で」
星「うむ…危ないところではあったのだが…彼のお陰で我らは助かった」

??? 「彼？」

鈴々「そこでうんうん唸ってるお兄ちゃんなのだ」

「……うん……」

??? 「あ、あの人？」

愛紗「はい。ですが、突然現れたため我らもあの者に聞きたいことがあるため残ってもらったのです」

??? 「そ、そうなんだ。だったら御礼を言わないとね♪」

「……………あ……………！！！！！！」

思い出した！！！！

??? 「な、なんだ！？」

「聖フランチェスカ学院の本郷一刀！！」

一刀「なッ！！！！？」

「あ…やっぱりそうか」

だって、どう考えてもあれ…学校の制服だし…

「まあ：俺は事情があつて殆どのクラスに参加してなかったから余計に気付かなかつたのだらうがな」

一刀「そうなのか……後、二つほど聞いてもいいか？」

「…その前に関雲長や趙子龍、張翼徳以外の人の紹介もしてくれないか？」

一刀「あ、そうだったな。おい、桃香、朱里、雛里……！」

桃香「何？ご主人様？」

一刀「互いに自己紹介しておこう……！」

桃香「は……い。こんにちわ、えーっと……」

「ノウエル」ガランランス……言いにくいのであればノウエルでいい」

桃香「はい♪私は姓を劉、名を備、字を玄德、真名を桃香って言います♪」

「……！！！！　　おいおい……何でいきなり真名を教えるんだよ……」

桃香「え、だってノウエルさんは御主人さまとお知合いなんですよ？」

「……一応はそういうことになるな」

桃香「だったら、私達が信用しても大丈夫だと思ったの♪」

「……………何だろうか……なあ、関雲長」

愛紗「な、なんでしょう……」

「……お前らの主って……天然なのか？」

愛紗「……否定できないのが悔しいです……」

桃香「あ……、酷い……！！私天然じゃないもん……！！」

「……はいは……い……次、いってもらおうか」

桃香「む……う……酷いよ……」

何やら納得のいかない顔をする桃香……

そんな桃香を無視し、紹介は次へ……

朱里「はわわ……わ、私は姓を諸葛、名を亮、字を孔明、真名を朱里
といいましゅ……！！！！」

「……大丈夫か？」

朱里「あうう…舌噛みましゅた…」

「…まあ…よろしくな…」

朱里「はひ…」

雛里「あわわ…わ、私は鳳統、字を士元、真名を雛里といいます…」

「…あの鳳士元に出会えるとは…光栄の極みだ」

雛里「ひう…あ、ありがとうございます」

愛紗「皆が真名を教えたのであれば、我らも教えねばな。我が真名は愛紗。先程は本当に失礼した」

「…ああ…でも、気にしなくてもいいと何度も言っているだろうに」

鈴々「まあ、愛紗はいつもこんななのだ。鈴々の真名は…」

「…鈴々だろ？」

鈴々「にゃ？何でわかったのだ？」

「…さっきから自分で言ってるだろ？」

鈴々「そういえばそうなのだ」

星「ふふふ…我が真名は星。よろしく、我らが主とは異なる天の御

遣いよ」

「ああ…こちらこそ…皆、真名を教えてくれたのだから、俺も教えないとな」

愛紗「はい？確か天の世界では真名はないのでしたよね、ご主人様？」

一刀「ああ」

「まあ、俺は特別だから。何せこのノウエルⅡガンランスというのは偽名なのだからな」

星「偽名…ということは本当の名があるということですか」

「ああ…俺の本当の名は…性を城崎、字を龍司という」

朱里「成程…ですから、貴方の軍の旗は【龍】なのですね」

「そういうこと…それから、俺のことは貴方じゃなく、城崎か龍司

と呼んでくれ」

朱里「はわわ…わ、分かりました」

「……それから、何で一刀は皆にご主人様って呼ばれてるんだ？」

一刀「は、はう！！！」

「……成程ね」

一刀「何！？その納得した顔は！！違う、違うから！！！」

「いやいや…俺は個人の趣味には干渉しないから」

一刀「いや、だから違うって！！！その蔑むような眼はやめてー
ー！！！！！」

暫く、一刀をいじった後再び話し合いを始めることになった
一刀はその隅でいじけていたが…

愛紗「…それにしても…あな「龍司か城崎にしろ」…龍司様はこれ
程の大軍を率いて、どちらに？」

「ここから少し先にあった黄巾党の拠点を潰してきた」

朱里「あ、あの拠点をですか！？報告では結構な数の黄巾党がいた
と聞きますが…」

「まあ、その時は曹孟徳と偶然、共同戦線を張ることになったから
うまく行ったのだから」

一刀「曹孟徳って…あの曹操か！！？」

「その曹操だ。共に策を使って敵軍を全滅させ、今はその帰りだ」

桃香「はあ…その帰り途中に私達が戦ってるのを知ったというわ
けですか」

「ま、まあ…そういうことだな。斥候の話だと、かなりやばそうだ
と思ったのでな…関係はないが…助けに行ったほうがいいと思った
のだ」

星「まあ、実際かなり危なかったからな」

桃香「そうだよね…だってあんなに敵さんがいるなんて思わなか

ったんだもん…」

雛里「はい…最初は私達と同じくらいの兵数だったのが、運悪く敵の本隊が合流してしまい…」

「…成程ね。まあ、でも暫くはこのあたりは大丈夫だろ？」

鈴々「そうなのだ!! 龍のお兄ちゃんが敵の大將を一撃で倒してしまったからなのだ!!」

一刀「た、大將を一撃で!!?」

「…大將って…あの後ろ辺りで踏ん返ってた馬鹿野郎のことか?」

朱里「ば、馬鹿野郎って…ま、まあ鈴々ちゃんの言っている通り、龍司さんが敵の大將を倒してくれたので敵に混乱が生じ、私達も今回生き残ることが出来たのです」

「…そうだったのか」

桃香「うん♪だから、龍司さんは私達の恩人だよ♪」

「…別に恩恵を受けるために俺は助けに来たわけじゃない。俺や孫呉と志を同じくするものであると思ったから助けに来た。それだけだ」

一刀「それでも、ありがとう。おかげで助かったよ」

「……………まあ、その感謝の言葉だけは受けておく／＼／＼」

鈴々「あゝ、龍のお兄ちゃんの顔。真っ赤なのだ♪」

「な!! ま、真っ赤じゃない!!!! / / /」

星「いやいや…初々しい反応はよろしいことで」

「~~~~~!!!! もう行く!!!!」

一刀「ははは!! 又機会があれば会えるといいな!!」

「…近いうちにまた会うと思うがな…」

朱里「え、どういう意味ですか…」

「この黄巾党の戦いの後…この大地は…さらなる混乱が起こる…」

星「それは…天の御遣いとしての予言というわけですか？」

「…違う、今や漢王朝は完全に衰退している…だから、必ず王朝に代わってこの土地を治めたいと思う輩が出てくる…良将、欲深な馬

鹿：問わずにな…」

雛里「それは龍司さんの言った通りだと思います…恐らくは…龍司さんの言ったようなことが現実になるのは…そう遠くない未来だと思います」

「…だから、その時まで絶対に生き残れ!!」

愛紗「勿論です。我らが夢を叶えるため」

「そうか…ではな…」

こうして、本郷一刀や劉玄德と会った龍司…

この出会いが今後、どのような働きをするのか…

それはだれにも分からない…

「城に戻ると…そこはまるでお祭り会場でした」

兵士「御遣い様？何を仰っているのですか？」

「…いや…何でもない」

だってな…これは何だろうってくらいの騒ぎだもん…

雪蓮「お疲れ様」

「あれ、雪蓮？なんでここに？」

雪蓮「何でって…皆貴方の帰還を祝っているのよ」

「…何で？」

雪蓮「貴方が送ってくれた使者の情報だと…被害はかなり軽微なんでしょう？」

「ああ…まあ、その後またすぐ戦いがあったから…それよりも少し上ってくだいだがな…」

雪蓮「戦ったって…黄巾党と？」

「ああ、劉備っていう将率いる義勇軍がいてね。約2万の賊に対し

て3000の兵で戦っていたんだ。で、少しまずいと思って手を貸したんだけど：駄目だったか？」

雪蓮「いいんじゃない？ 貴方がそれがいと思ったのだから」

「：ありがとう。で、話を戻すが：何でこんなお祭り騒ぎなんだよ」

雪蓮「貴方が大勝したって聞いたから♪私が冥琳に：」

「あゝ：分かった：ハア：冥琳も大変だな」

雪蓮「何よゝ：氣を使ったのにゝ：」

「ふふふ：ありがとうな、雪蓮」

雪蓮「ふふ、どういたしまして♪」

その後、軍を解散させ龍司は冥琳へ報告に行った後：

雪蓮や祭の盃に付き合わされたり：穩が作成した新兵器の調書を読まされたり：その後、再び酒を飲まされたりした：

ある意味：戦いよりも疲労を感じた：

「ふう：」

雪蓮「お疲れ様♪」

「ああ：ってまだ飲んでんのか？」

雪蓮「ええ♪今日は気分がいいからね♪」

「：気分悪くても酒は飲むくせに」

雪蓮「ぶーぶー：」

「まあ、そんな雪蓮は可愛いと思うがな」

雪蓮「え！？／＼／」

「：冗談だがな」

雪蓮「：：：：」

「ふふふ：今日は：いい月が見えるな」

雪蓮「：龍司：」

「ん？」

雪蓮「龍司の：馬鹿：：：：！！！」

「うわっ！！！」

雪蓮「乙女心が深く傷ついたわ…」

「はーもう…びっくりしたな…全く、そんなに大声出す必要ないだろう」

雪蓮「…うう（涙）」

「…あー分かった分かった！！何でもしますから、許していただけないですか？」

雪蓮「（ニヤリ）じゃあ、今夜わたしの部屋に来て♪」

「…（何だろう、嫌な予感がするが）分かった」

雪蓮「うんうん♪」

そして…また酒を飲み、飲まされ…俺は少し眠ってしまった…

一刻した後、目覚めた俺は雪蓮の部屋に向かうことにした
何せ辺りはすっかり暗くなっていたからだ

コンコン…

「龍司だけど…入ってもいいか？」

雪蓮「どうぞ…♪」

「失礼……………ゴメン、お邪魔^{ガシツ}」

雪蓮「ふふふ♪に・が・さ・な・い♪」

目の前には殆ど下着同然の雪蓮が…

「…何が目的でしょうか…」

雪蓮「あら♪前に行ったじゃないの。貴方には…呉に天の胤を注いでもらうって♪」

「…それは考えさせてもらおうと言ったはずなのですが？」

雪蓮「駄・目♪」

「ちょ、ちよっと待て!! 雪蓮、落ち着いて!!!!」

雪蓮「私は落ち着いてるわよ」

「な、何でいきなりこんなことを!? / /」

雪蓮「前からやろうとは思ってたのだけれどもね、機会がなかったからね♪」

「や、やめ: / /」

雪蓮「んふふ♪では、いただきま〜す♪」

「きゃあああああああー! ! ! ! ! / / /」

その日、女のような男の声が高く響いた

新たな出会い

一晚を雪蓮と過ごし、次の日俺と雪蓮は袁術に呼ばれ、袁術の城へと向かっていた

雪蓮「……ねえ、龍司？」

「…Σ！！／／（プイッ）」

雪蓮「うう…私が悪かったから…」

馬に乗りながらこのようなやり取りが幾度なく行われている
兵士たちはその様子を見て、クスクスと笑っていた

龍司は昨日のこともあってから雪蓮の顔をまともに見れなくなっているだけなのだが…

そのような態度を取られ続けている雪蓮は龍司に嫌われているのではないかと思ってしまう
故に雪蓮は幾度も謝ろうとしているのだが…龍司は顔を見まいと静かに逃げている

そのようなギクシャクとした態度の中…袁術のいる居城に着いた
そして…

袁術「孫策、此度の出陣。大義なのじゃー♪」

雪蓮「はいはい…ありがとね」

袁術「うむ。よきにはからえ」

雪蓮「で、今度は何なの？」

張勳「あはは♪用件は二つです♪一つは、これから黄巾軍本隊を叩きに行ってもらいます♪」

雪蓮「それは無理よ。何せ私達の軍の数が足りないもの」

袁術「何じゃ？あれだけ英雄と称えられているのか？」

雪蓮「黄巾軍本隊はおよそ20万、今いる私達の部隊だけでは無理だけど…散らされた呉の旧臣達を集めることを許してくれれば何とかなるわ」

袁術「ふむ、なら許すのじゃ」

雪蓮「ありがと。で、袁術ちゃんはどうするの？」

張勳「私達は十分な用意を終えた後、黄巾軍の別部隊を叩くことになっていきます」

雪蓮「はあ…分かったわ。で、後もう一つの要件は？」

張勳「はい、それは…貴方のところに居る天の御遣いさんと呼ばれている方のことです」

雪蓮「…彼がどうかしたのかしら」

張勳「何でも…その方は一騎当千の力を持つ上に知略にも長ける優秀な方だそうじゃないですか♪だから、その方を私達に譲ってもらおうということなんですよ」

雪蓮「な!!?」

袁術「で、そ奴はどこにおるのじゃ？」

「…さっきから目の前に居るが？」

袁術「おお、そなたであったか。で、今日から「断る」我が軍に…
…へ？」

「断ると言っただ」

袁術「な、何じゃと~~~~!!?!?」

「俺は孫呉に忠誠を誓ったものだ。袁家に忠誠を誓うなどした覚えがない」

袁術「そ、孫策は妾の配下なのじゃ!! だから…「しつこいぞ…」
ひっ!!?!?」

龍司は袁術の近くに行くと可能な限り怖い顔で睨みを利かせた

「…俺は失礼ながらこの国の作法なんざ一切知らん…だから…気に

いらん奴…むかつく奴が目の前に居たら…即座に仕置きしたくなるんでねえ…今度、俺を袁家に入れるなんて言ってみろ…」

袁兵士「貴様…！袁術様に何を…！！」

張勳が命令したのだろう…龍司を後ろから斬りかかろうとした…が…

バキッ！！ガシッ！！

袁兵士「なッ！！？」

龍司は剣を素手で叩き割り…兵士の鎧を右腕で鷲掴みにしていたその間、袁術からずっと目を離さずにいた

「…お前の首を…こんなことにしてしまいかもしれんな…」
バキバキバキバキバキ…グシヤッ！！！！

袁兵士「ぎゃあああああ…！！！！！！」

鷲掴みにしていた鎧を…腕力だけで破壊し…鎧を着ていた兵士の命をも奪った

袁術「ガクガクガク……」

張勳「あ、あわわわわ…」

「分かったか？」@超笑顔

二人「ブンブンブン」@青ざめながら首を縦に振る

「…それから…もしこのことで孫呉に危害を加えようものなら……
天の刑罰を与えるぞ？」

二人「ブンブンブンブン」@先程よりも勢いよく首を振る

「話はそれだけか？なら、行こう雪蓮」

雪蓮「え、ええ…」

帰り道…

「…スマン」

雪蓮「いいのよ。あの子たちにはいい葉だわ」

「だが…これが原因で雪蓮や他の皆に危害が及ぶかもしれない…」
雪蓮「それはないでしょうね。貴方の実力は嫌というほど目にしたし…私達に手を出せば本当に天の刑罰が下ると信じているだろうしね」

「…そうか…良かった…」

雪蓮「それよりも…私は…昨日のことが終わってからの貴方の態度が気になるのだけでも…」

「……………!!!!!!（ボツ）」@一瞬で顔が真っ赤っか

雪蓮「…御免なさいね…肝心なところはなかったけど…あんな無理やり…」

「い、いや…別に嫌だったわけじゃないんだ…唐突過ぎてびっくりしたけど…／／／」

雪蓮「ならどうして今日はそんなに私のことを避けるの？」

「…／／／き、昨日の出来事を…雪蓮の顔を見たら…思い出しちゃって…それで…／／／」

雪蓮「じ、じゃあ私のこと嫌ってるわけじゃないのよね!？」

「き、嫌いじゃないよ…」

雪蓮「ふふふ♪」

「しえ、雪蓮？」

雪蓮「なら…今日こそ続きを…」

「か、勘弁してー！ー！ー！／／／」

雪蓮「あ、逃げた。まちなさーい、龍司ー！ー！ー！」

それから、雪蓮と龍司の鬼ごっこが始まった
これから戦前だというのに…緊張感ないな…

雪蓮と龍司は冥琳たちに先程言われたことをすべて伝えたら…

冥琳は呆れ、穏は驚き、祭は笑った

幾らなんでもやり過ぎだと冥琳に怒られました…

だが…そんな空気をいつまでも味わうわけにもいかず…

皆出陣の準備をすることになった

その間、冥琳と龍司は旧臣を集めるための使者を各地に放ち、そして誰を呼ぶのかを話しあった

「…甘興覇、周幼平…そして…孫仲謀か…」

冥琳「おや…その言い方だとどういう人物であるか知っているのだな」

「俺の世界での歴史からだからなく…この世界とはいくつか矛盾もあるし…すべて知っているというわけでないがな。だから、どういった人物なのかは…見てからじゃないと判断できないな」

冥琳「まあお前ならば直ぐに打ち解けると私は思うぞ」

「…それは褒めて貰っていると受け取っておくよ」

冥琳「ああ、そう受け取ってもらっていい…ところで…」

「???」

冥琳「雪蓮と閨を共にしたというのは…本当か？」

「ブッ!!!!!! な、何でそれを!?!?!」

冥琳「雪蓮が自慢げに私に話してきたのだ」

「Σ し、しえええええええー!!!!!!」

真っ赤になりながら神速といえる速度で雪蓮のいるところに移動し…

「な、何で昨日のことを冥琳に話すんだよ!!!!!!／／／／」

雪蓮「え〜、いいじゃないの。そのくらいのこと♪」

「(プツン)……」

雪蓮「あ、キレた…」

「雪蓮? いい加減にしないと俺も怒るよ?」@超笑顔

雪蓮「り、龍司? こ、怖いわよ?」

「ふふふふふふふふ…お・し・お・き・だ」

雪蓮「キャ〜♪龍司が怒った〜♪」

「…ふふふふ…逃がさん!!!!!!」

それから雪蓮と龍司は、黄巾党の部隊を見つけるまで鬼ごっこを続けたという

それを見ていた兵士たちは小さく笑っていたとか…

雪蓮「冥琳、蓮華たちはいつ頃合流できるのかしら」

冥琳「おそらくだが、今我らの目の前に居る部隊を片付けた後といった所だろうな」

雪蓮「了解、なら前線の部隊は私と祭で片付けるから、穏と冥琳と龍司は黄巾党本隊に対する作戦を考えていて」

冥琳「分かったわ」

穏「御意です」

「…俺も前線に出たかったな…ストレスの捌け口として…」

冥琳「まあ、今回は我慢してくれ」

「了解。ハア…」

雪蓮「龍司? 溜息ばかりしてると疲れるだけだよ?」

「……その溜息の原因の大半は雪蓮なんだけれども?」

雪蓮「じゃあ、行ってきま〜す♪」

あ、誤魔化した、誤魔化したよ孫呉の主が!!

…胃がキリキリする……

この世界って、胃に効く薬ってあるのかな

冥琳「…その気持ちは理解出来るぞ、龍司」

「…冥琳もいつも振りまわされてるものね…」

「「はぁ……」」

二刻程した後、雪蓮達が部隊を率いて戻ってきた
どうやら無事に黄巾党を撃退してきたようだ
でも…敵に手ごたえが無さすぎたのか…

雪蓮も祭も不満そう…

「…お疲れ様」

雪蓮「ちつとも疲れてないわよ…全く…」

祭「うむ、まだまだいけるぞ」

「…なら次に戦うであろう本体との闘いに備えてください」

祭「うむ。腕が鳴るのお」

その時…

穩「後方に砂煙有ります」

雪蓮「つと言うことは…着いたようね」

「……（さて…どんな人物なのか…見極めんな）」

孫権「雪蓮姉さま!!!」

雪蓮「久しぶり、蓮華。元気だった？」

孫権「色々聞きましたよ！！姉さまには国主としての自覚が足りません！！！」

雪蓮「うわっ…いきなり説教から？」

孫権「そういうわけではありません！！ただ、考えもなしに前線に出て突撃したり、冥琳や穩を困らせたり、政を蔑ろにして酒を飲むなどの報告を受けたからです！！！」

雪蓮「うわぁ…何でそんなことまで…冥琳が？」

孫権「ええ、しっかりと聞かせていただきます！！！」

それから暫くの間、小言のような説教を受け続けることになった雪蓮…

一方で、龍司達は…

「…あれが孫権か…ふうん…残るは柔軟な考えを持つことと経験を積むって感じかな」

冥琳「うん？何を言っているんだ？」

「…独り言だ、気にしないでくれ」

祭「そんなことを言っていないで、何を思ったのか聞かせんか」

「…孫仲謀の第一印象…堅物」

冥琳「ははは、そうか」

「でも、もう少し王としての経験を積み、発想や思考を柔軟にしていけば…雪蓮以上の王になるかもしれない…って思った」

冥琳「ほう…それは雪蓮が蓮華様に劣ると？」

「そうじゃないよ。ただ、雪蓮はたまに王としての自覚がないんじゃないかって思う時があるから…」

冥琳&穩&祭「「…確かに」」

ちょっとひどいことを言っている時…

孫権「…貴方が天の御遣いって言われている男？」

「ん？あゝ…そういうことになってる」

孫権「…胡散臭いわね」

「だろうね。俺もそう思うぞ」

孫権「はあ？」

「雪蓮と祭曰く、俺は光と共に現れたそうだからねえ…もしかしたら悪鬼かもねえ…」

孫権「…お前は私を馬鹿にしているのか？」

「…馬鹿にしているのは君のほうでは？孫仲謀」

孫権「……………」@睨みを利かせている

「……………」@余裕のある顔で目を反らさないでいる

最初から嫌悪剥き出しの孫権に対し、真っ向から向かっていこうしているのか…

龍司は孫権の眼をずっと見ていた

孫権「…貴様、何故雪蓮姉さまの真名を」

雪蓮「私がいいって言ったからよ♪」

雪蓮「姉さま…」

「（…というか最初は貴方で、次はお前…最終的には貴様ですか…今度は下司野郎とでも呼ばれるのかね…）」

心中軽く傷つき気味の龍司を置いて…話はどんどん進んでいく

雪蓮「私だけじゃなくて、冥琳、祭、穩も真名を許してるわよ」

孫権「なッ！！？」

甘寧「…それ程の人物なのですか？…ただ胡散臭いようにしか見えませんが…」

周泰「胡散臭いかどうかではないのですが…何故、雪蓮様達が真名を許されるのか…理解しかねます」

冥琳「：そういえば、龍司についてのことは全く伝えていなかったな」

雪蓮「あら、そうなの？なら、教えてあげるわね♪龍司は……」

——黒紅の戦神と呼ばれているのよ

孫権「それは：最近、ちらほらと噂で聞いています。何でも、2万の賊に対してわずか1名で戦い、頭領の首を落とし敵を残った賊を困惑させたとか黒き衣をまとった赤髪の戦士のことを……」

甘寧「：それがこの男だと？」

冥琳「ええ。証人は私と雪蓮、祭に穏よ」

孫権「そんな……」

甘寧「：俄かに信じがたいことですね」

雪蓮「なら、これから戦う黄巾党本体との戦で龍司の強さを証明してもらいましょう♪」

冥琳「龍司、分かったな……って龍司はどこに？」

周泰「ふむふむ……成程、その太刀は『にほんとう』といって武器にも芸術品にもなりうるもののですか……」

「太刀というよりも……刀と言ったほうがいいな。これは敵をぶった切るのではなく、切り裂くための武器だからな」

周泰「今度は是非、お手合わせ願いたいのです……!!」

「うん、この戦いが終わったらね」

周泰「では、約束です♪」

似たような武器を所持していたため、どうやら馬があったようで……

先程までの警戒し合った様子もなく、夢中で話を続けていた

雪蓮「あら♪早速明命と仲良くなったようね」

「一対一の時にこの刀を使うって話したら…なんだか馬があった」

明命「はい♪話してみるととても優しい方だということがよく分かります」

雪蓮「あらあら♪」

「…あ、あの…本人がいる前でそういうこと言うの…やめて…／＼」@真っ赤

雪蓮「うふふ♪可愛い♪（ギュウ）」@龍司に抱きつく

「にゃ、にゃあ…!!??／＼や、やめ…あうう…／＼」

明命「な、仲がよろしいのですね？」

「み、見てないで誰か助けて…!!／＼」@これ以上ないくらい真っ赤

雪蓮「うふふ♪ウリウリ♪」

「あ…もう…駄目（プシュ…）」

「「「あっ…」」」

龍司「我慢の限界を超えたのか…気絶して倒れてしまった

雪蓮「あゝ、またなのね」

冥琳「…もしかして、この前もこうだったの？」

雪蓮「龍司って怒りが有頂天(?)に達すると性格が180度変わるみたいけど…普段の龍司は女性に滅法弱いんだって。だからこの前も私の下着姿見ただけで気絶して鼻血まみれになっちゃったの♪」

冥琳「…成程な。道理で以前二つ目の条件を直ぐに飲もうとしなかったわけだ」

孫権「ねえ、何の話をしているのですか？」

雪蓮「ああ、龍司は貴方達三人の夫になるかもしれないということ

雪蓮「龍司く、いい加減に起きなさいよ」

「……うう……はっ!! お、俺は???」

雪蓮「また気絶してたわよ」

「そ、そう……ってそれは雪蓮が原因なのでは?」

雪蓮「……てへ」

「……はあ、もういいから次に行こう……」

龍司は疲れながらも前に進むことを勧めた

これ以上、話しているとこちらの体力が持たないと踏んだのだろう……

そのあと、黄巾党の籠る城まで辿り着くまで、龍司は早速仲の良くなった明命と話をしていた

互いに真名を許し合い、龍司は天について。明命は己のことについて話した

「成程ね。明命は猫が好きなのか」

明命「はい♪……やっぱり……おかしいですか?」

「いや……女の子らしくて可愛いと思うよ」

明命「は、はい♪ありがとうございます。龍司様は……お猫様は好きですか?」

「……正直、苦手なんだ。猫に罪はないのだろうけど……ちよつと昔、猫に酷い目にあわされて……それから猫が苦手なんだよ」

明命「そ、そうですか……」@少ししょんぼり……

「……なあ、明命。俺はずっと前からこの猫が苦手なのを治そうと思っているのだが……一人だとなかなか上手くいかなくてな……今度、手伝ってくれないか?」

明命「は、はい!! 御意です♪」

「ふふふ、ありがとう」

その様子を離れたところで見ている孫権と甘寧

孫権「……」

甘寧「…蓮華様、どう思われますか？」

孫権「…まだ判断しかねるけど…少なくとも明命があそこまで心を許しているのなら…悪い人間ではないようね」

甘寧「…そのようですね……？」

二人でひっそりと話している時、龍司が二人のいるほうに近づいてきた

「…あーつと…」

甘寧「…何か用か？」

「…さっき言い忘れたことがあって…」

孫権「言い忘れたこと？」

「…雪蓮はあんなことを言ってたけど…俺個人としてはあの条件とは関係なしに呉の皆とは友好的関係でありたいと思っている…まあ、最初からそうしてくれなんて無理は言わないが…じっくりと俺を見て判断してくれると助かる……つと話が長くなったが…まあ結論から言くと…これからよろしく頼むな」

甘寧「…よろしくするのは貴様次第だ」

「あゝ、厳しいね」

孫権「…分かったわ。貴方のことは私の気のすむまで見させてもらうわ」

「うん、そうしてくれると助かるよ。……そろそろ敵の居城に着くな。じゃ、俺は元の位置に戻るから」

龍司が戻っていく姿を二人は意味もなく見つめた：

孫権&甘寧「……………」

黄巾党が籠る居城

その周りには数多くの名のある将達の旗が見えた
まだ白に【黄】の旗があるのを見る限り、参加するのに間に合った
ようだ

他にも【曹】の旗やら…【劉】の旗…あれは劉備じゃなく劉謐のよ
うだな…確か、零陵の太守だったか…おお、【劉】がもう一つ…っ
てあれは一刀の軍か…他にも【公孫】に【袁】…いい感じに集まっ
ているようだな

どうやら攻めあぐんでいるようだな

穩が持っていたその城の地図を見たが…厄介なつくりだ
攻めづらく、守りやすい…

突入可能なのは前面だけ、左右は狭く大軍は配置不可…

おまけに背後は断崖絶壁…

これはかなりきつく……………ん？

これは……

冥琳「ふむう、どう攻めたものか…」

雪蓮「メンドくさいから突撃しましょうか」

孫権「何を言っているのですか!!」

祭「儂はその案に成なのじゃが？」

冥琳「…祭殿？」

祭「わ、わかつとる…冗談じゃて…」

雪蓮「え…」

冥琳「ふむ…龍司、お前は思う？」

「ん？俺が意見してもいいのか？」

冥琳「当たり前だろう。お前は既に立派な呉の将なのだからな」

「…まだその将っていうのには納得してないのだけれどね…まあいいか。とりあえず、地図を見せて貰った限り、使える策は一つだけ思いついたよ」

冥琳「…聞かせて貰おうか」

「その前に…甘寧」

甘寧「…何だ？」

「甘寧は隠密行動って得意？明命は話してるときに聞いたのだけども…」

甘寧「…明命ほどではないがな」

「そう…なら策は決まったな」

雪蓮「もったいぶらないで教えてよ♪」

「うん…まず、祭と雪蓮、孫権が城を攻める…ただし、攻めるふりだけでもいい」

孫権「…どういうことだ？」

「ここを見て」

龍司が指し示したのは…城の右側にあるであろう…とある建物…
恐らくは倉庫なのだろうけど…そこは中心部からも城壁からも死角になっているようなのだ

冥琳「確かに…ここはうまく使えるな」

「三人が攻めている隙に、俺と明命、甘寧の三軍がこの場所に侵入し、火を放つ。敵が混乱しているのを見計らって、冥琳と穩の部隊が更に火矢を放つ。そして、侵入した部隊が城壁を開き、一気に攻め立てる。………どうかな？」

雪蓮「…いいわね」

冥琳「ああ、上手くいけばこれ以上に良い策はないだろう」

「ほっ…良かったよ。」

雪蓮「それにしても龍司はやっぱり凄いわね♪武だけでなく智も持ってるのだから。その上、天の御遣いという風評と血を持ってるしね♪」

「俺の知識なんて大したことはないって。これらは俺が幼少のころから父の影響で読んでた本のおかげなんだから」

祭「いやいや、謙遜する必要ないぞ」

穩「そうですね。例えば多くの書物を読み漁っても、それらをうまく生かせなければ何の意味もないんですから」

冥琳「ああ。やはりお前は良い拾いものだったな」

「…そんなに褒めないでくれ／＼／」

雪蓮「ふふふ♪龍司ったら、照れちゃって♪」

「~~~~!!もういいからさっさと行動準備!!!!」

孫権「……………」

その様子をずっと食い入るように見つめる孫権

甘寧「…成程な」

何か納得したような顔をした甘寧

そして作戦を決行することになった

その夜……

龍司・明命・甘寧の三人は部下およそ100を連れ、城壁に向かった

わあああああー！ー！ー！ー！！！！

この声から察するに雪蓮達が城攻めを始めたようだ

さて：俺達も行動するか

場内に侵入した後、三人は各個に割り当てられた位置に移動するこ
とになった

そして：一斉に火を放った

同時に銅鑼を鳴らし、奇襲だ。敵襲だと大きく騒ぎたてた
これにより、場内は混乱に陥った

それと同時に、場内に侵入していた三軍がここぞとばかりに敵を倒
していった

龍司「おらあ！！」

バキッ！！

賊「がっ…」

龍司も20ほど兵を連れて敵を倒していった
その時：

「…ん、あれは…牢か。誰か捕まっているかもしれんな…」

龍司は何となくその牢のある場所に向かった

「…暗いし…烏賊臭い……何やってたんだよ、屑どもは…」

烏賊臭いってことは…大体予想はつくな

??? 「……」

奥のほうまで行くと一つの部屋に鎖で両腕を繋がれていた女性を見つけた

服が所所裂けているところからみると、余程酷いことをされてきたようだ

キィ…

??? 「……誰？」

「…安心してくれ。俺は黄巾党じゃないから」

??? 「……官軍？」

「…になるのかね」

??? 「そう…軍が…入ってきたのね…ようやく…」

「…君は？」

??? 「…太史慈よ」

「…成程、劉謠の部下か…」

太史慈「良く知ってるわね…でももうあいつのもとで働いてるわけじゃないわ。あいつに見捨てられて私は黄巾党に囚われて…」

「…それ以上は言わなくてもいい。とにかく、ここから出よう」

太史慈「…何で？私はまだ…汚されたの…これ以上ないくらいにね…だから…もう死にたいのよ…」

「阿呆」

太史慈「え…」

「命はそんなに軽いもんじゃない。汚れたのなら洗い流せばいい。辛いなら一人でいなければいい。自身を支えられなくなったら誰かに支えて貰えばいい」

太史慈「……」

「確かに、お前は死にたいくらいに辛い経験をしたかもしれない……
だがな、それを理由に死ぬなんて他の奴やお前自身が許しても俺が
許さん」

太史慈「……随分と勝手なのね」

「何とでも。今、この時よりお前の命、俺が預かる。因みに拒否権
はない♪」

太史慈「……ふう、分かったわ。それじゃあさっさとここから出して
くれないかしら」

「了解した」

龍司は太史慈の手錠と足枷を外すと自身が羽織っていたマントを太
史慈に被せた

「……そのままだと歩きづらいだろ？」

太史慈「……ありがとう」

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺は姓を城崎、字を龍司。
これは俺の真名に相当する名だから、城崎か龍司と呼んでくれ」

太史慈「私は姓を太史慈、字を子義。真名は百合よ」

「これからは孫呉のために共に行こう」

百合「……それはまだ判断しかねるけど……私は貴方に付いていくわ。
この先、どんなことがあるうとも」

「了解。なら、俺が連れてきた兵10を預けるから……（サラサラ）
この文を呉の陣まで行って届けてくれ。その後、俺の陣で休むよう
言われたと言っておいてくれ」

百合「うん」

「気をつけてくれよ？一応は敵の本陣の中なんだから」

百合「……うん」

その後、龍司は可能な限り暴れまわり、更に場外から冥琳たちが火
を放ったようで黄巾党は混乱の窮地に陥った

そこへ明命か甘寧の部隊が門を開いたのか…祭と孫権の部隊が突撃した

…雪蓮はどうやら来てないようだが…

そして、龍司達はその部隊に合流し、黄巾党を壊滅させた

黄巾党の本陣を壊滅させ、孫軍は休息をとると同時に、酒盛りをしようということになった
陣内は笑い声が溢れ、兵たちや将達は酒を飲みながら語りあかしていた

だが…龍司は…

「ふう…」

一人、誰もいない陣外の河原の近くで一人酒を飲んでいた

孫権「何をしているの？」

百合「…龍司様？」

「…孫権に…百合か。何か用か？」

孫権「姉さまが貴方にお酌してもらおうとしたら貴方が見当たらないので何人かに探しに行かせたのよ」

百合「私は龍司様にちゃんとしたお礼を言おうとしたのですが…見つからないので探しているうちに孫権様とご一緒することになって」

「…スマン、一言いえばよかったな」

孫権「…次からは気をつけてね。それで…こんなところでどうして？」

「…………考え事があってな」

百合「…失礼でなければお聞かせ願いたいのですが…」

「……二人とも…二人からは俺は…どういう風に見える？」

孫権「…どうして…そんなことを？」

「…いいから…聞かせてくれ」

孫権と百合は不思議に思いながらも龍司に当て嵌まる特徴について考えてみた

といっても二人とも長い時を共に過ごしたわけでないため、簡単なものしか思いつかないのだが

- ・兵に優しく、賊に厳しい
- ・女性関係に疎い
- ・武も智も兼ね揃えた勇将

「…………皆にも…そう見えてるのかな…」

孫権「多分そうだと思うが…何故、こんなことを聞くんだ？」

「……俺ってさ、天の世界でもこういった戦いを経験してたんだよ…まあ、この世界の戦争とはやり方が異なるんだけどね」

百合「やり方…ですか？」

「まあ冥琳たちには話したんだけどね…」

龍司は以前、冥琳たちに話した銃や爆弾を使用した戦争についてを語った

すると…

孫権「…恐ろしいな…」

百合「はい…」

「ああ…今でもそう思うよ…俺はそんな戦争を止めるためにレジスタンス…っていうのは戦争に反対して武器を取り戦争を止めさせよ

うとする部隊なんだけどね、俺が居たのは…他にも色々な形の部隊があるんだけど…まあ詳しい話は置いておいて…その部隊で俺は鬼神って呼ばれていてね…」

百合「鬼神…ですか？どうして…」

「…一般の市民を殺そうとした軍人100人…俺が一人残らず惨殺したからだ…それから俺はそう呼ばれるようになった」

孫権「それはその軍人が悪いのではないのか!？」

「…でも、俺は殺した…殺しに良いも悪いもない……そのことを思い出してな…俺はこの世界に来て…人を殺し続けている……このままで…いいのかと思ってね……」
そう言いながら酒を煽る…

百合「確かに…殺すということは非人道的なことなのかもしれない…でも、その行為のために救われる人だっているんですよ?…私のように…」

「……」

百合「…あの時、もし龍司様が来てくださらなかったら…もし、孫策様の部隊が来てくださらなかったら…私は今頃この世に居なかったでしょう……それに、龍司様だって…本当は気付いているのでしょう? 貴方が行ってきたことで…救われてきた人たちがいるということ…」

「…それは…」

孫権「私も太史慈の言うことに賛同するぞ」

「……孫権」

孫権「確かに殺しというのは憎しみや悲しみの連鎖を作ってしまう…だがな、それを止めることが出来るのも…殺しという行為だけなのかもしれない…」

「…」

孫権「たとえば、何者に憎まれても…私はこの地に安息が訪れるまで…この殺しを止めないだろうな…」

「……そう…か」

もう一度、月を見上げ……
酒を煽った

…一度決めたことを投げ出すな……か。久しく忘れてたよ…親父…

「悪いな二人とも…変なこと言って…そうだな。俺が行っているのは間違ってるかもしれないが…今この時代にとって必要なことなんだ…だから、俺も雪蓮に力を貸すって言ったんだったな…」

百合「龍司様…」

孫権「それにしても…貴方って見かけによらず色々考えてるのね…」

「ああ…毎日が考え事で予定が埋まるくらいにな」

孫権「何よ、それ」

「ハハハ…」

百合「ふふふ…」

なんだか胸のつかえがとれたような気分だ…

他者に相談するっていうことは…こんなにも…いいことなのだな…

孫権「話は変わるけど…私、貴方に謝らないと…」

「?…?…」

孫権「ほら…最初に会ったときに…」

「あ…別…別に気にすることないだろうに…孫権はただ俺という人間を確かめただけだし…何より、俺も孫権のことを馬鹿にするような言い方したし…」

…アレ?俺が悪いんじゃない?

孫権「でも…」

「…ならさ、謝罪代わりに…俺のこと、名前で呼んでくれないか?

いつまでも貴方っていうのは…ちよつとね…」

孫権「…ずるいわね、貴方は。それは私から頼もうとしたのに…」

「…ハハハ、悪いね。これが俺なんでね」

孫権「そう…ならこれからよろしくね、龍司。私のことは蓮華と呼んで。百合もね」

百合「はい。これからよろしくお願いします。蓮華様、龍司様」

「そこまで畏まらなくてもいいのに…まあ、こちらこそよろしく。

蓮華、百合」

最初にあつたころの陰悪なムードが無くなり、仲の良い状態となった龍司と蓮華…

そして新たに孫呉に加わった百合…

だが…この戦いの後、大地は更なる混乱に見舞われる

龍司は無意識のフラグメイカーです

黄巾党の戦いが終わった後、龍司は曹操と劉備の軍にそれぞれ招待されることになり、雪蓮に許可を貰った後、百合を連れて向かうことになった

最初は一人で向かう予定だったのだが：全員が猛反対したため、讓歩して百合を連れていくことになったのだが：

何故に皆は誰が一緒に行くか論議してたのだろうか？

結局、俺が教えたジャンケンで勝敗が決まったけど：

何で負けた皆は若干悔しげだったのだろうか：

分かん：

しかも、百合は百合でご機嫌だし：

分からないことだらけだが：とりあえず：まずは華琳の陣に向かうことにするか

理由？気分だ！！

↓曹軍↓

「：最初に会った時より軍備も兵力も上回ってるな：流石だ」

曹兵「何者だ！！」

「曹軍総大将、曹孟徳から招待を受けた。ノウエルⅡガンランスだ」

曹兵「あっ！！し、失礼しました！！お話は承っております！！ど、どうぞ」

：何故名を聞いた瞬間に態度がこうも変わったのだろうか？

まあいいや：とりあえず：

華琳「あら、もう来たの？」

「ああ、華琳。久しぶりだな」

華琳「そうね。それはそうと、また大活躍したそうね」

「…俺一人の力ではないがな」

華琳「貴方は直ぐにそうやって謙遜するのだから…と、その後ろに居る子は？」

百合「御初目にかかります。私は太史慈と申します」

華琳「あら？太史慈と言えば劉謠の配下と聞いているけど？」

「…コウコウこういうことがあったのでね…」

龍司、百合の事情を説明

華琳「…成程ね」

百合「ですが、今は龍司様のような方と出会うことが出来て…今までは比べ物にならないほど満ちています」

華琳「…ふうん」@龍司をじっと見つめる

「…な、なに？／／／」

華琳「やっぱり貴方、欲しいわ」

「だ、だからそれは…」

華琳「分かっているわよ。でもね、私は一度欲しいと思った物を簡単に諦める様な性格じゃないのよ？」

「……………」

百合「…龍司様は孫呉に忠誠を誓っています。その言葉は…呉から龍司様を奪うということになりますよ」

華琳「今は時期ではないけどね…でも、覚えておきなさい。私は…そういう人間なのよ」

「やれやれ…敵わないな、華琳には…」

華琳「あら、それは褒めているのかしら？」

「そのつもりだけど？」

華琳「ならその言葉、有り難く受け取っておきましょう」

「で、要件っていうのは？」

華琳「一緒に食事でもどうかと思ったのよ。どうかしら？」

「……酒はなしで頼めるか？」

華琳「分かったわ。なら：桂花に案内を頼みましょう」

「……………え？」

華琳「桂花、龍司と太史慈を広間に案内なさい」

桂花「はい、華琳様♪」

「……何で桂花なんだ？」

華琳「あら？龍司は桂花のこと、嫌いの？」

「…前回あんなことしたから：罪の意識が…」

華琳「気にすることはないわ。寧ろこちらが感謝したくらいよ。
貴方からもらったあの道具、とても有効に扱えているしね」

「…ソウデスカ」

そうして…

龍司と百合は食事の席に案内された…

その間、桂花が何やら物欲しそうな顔で龍司の顔を見つめていたことは…龍司は軽く流すことにした

食事の席では…正直に言うとかかなり穏やかで静かなものとなった…
一部を除いて…

春蘭「おい、城崎！！私と真剣勝負しろ！！！！」

「…何で？」

春蘭「五月蠅い！！さっさと…」

華琳「止めなさい、春蘭」

春蘭「か、華琳様。し、しかし…」

華琳「…春蘭？」

春蘭「は、はい…」

華琳に言われ、渋々席に戻る春蘭…
でも何で俺と戦いたがってたんだ？？

「???」「スマンな、姉者が迷惑をかけて」

「…いや、迷惑も何も訳が分からないのだが???」

「???」「黄巾党を殆ど呉にやらせてしまったためにどうやら鬱憤が溜まっているようなのだ」

「…怖いね…ずっと君は…もしかして夏侯淵かな?」

夏侯淵「…良く分かったな」

「さっき春蘭のことを姉って言ったからね」

夏侯淵「そうか…姉者が真名を許しているのなら私も名を教えねばな。我が真名は秋蘭だ」

「俺は姓を城崎、字を龍司。これらはどちらも俺の真名に値するか城崎とでも龍司とでも呼んでくれ」

秋蘭「了解した。城崎」

「???」「ならうちらも挨拶せなあかな」

「…君達は?始めてみる顔だけど…」

楽進「楽進…字を文謙。真名を凧と言います」

李典「うちは李典、字を曼成。真名を真桜やで」

于禁「沙和は。于禁、名を文則。真名は沙和なの」

許緒「ボクはね、許緒だよ。字を仲康。真名を季衣っていうんだよ」

「ああ…よろしく。俺は…」

凧「知っています。のえる様ですね?」

「…言いにくいだろうし、真名を渡してくれたのだから、俺のことも城崎か龍司と呼んでくれ。凧」

凧「…了解しました」

それにしても…本当に美人というか…綺麗な子ばかりなんだな…
どうなってるの、この世界のDNAは…

真桜「なあなあ」

「ん、何か?」

真桜「華琳様から聞いたんやけど…何でも遠くから敵を狙い撃つことのできる兵器を持ってるって聞いたんやけど…どうなんや？」

「…確かに持っているが…これは他者に安々と見せることの出来ないものだから」

真桜「そうなんか…残念やな」

「悪いな…」

真桜「ええって。うちが勝手に見たいと思っただけやし」

「…ん？真桜…でいいんだっけ？…というか気になったんだけど…その紙は？」

真桜「ああ、これはうちが考えた新しいカラクリの設計図や。けどどうも納得のいかん所があってな」

「…ちよつと見せて貰ってもいいか？」

真桜「ええで」

「……………」

真桜「ん？」

「ここをもう少し削って…歯車が回りやすくなるようにして…ここと…この場所を連結させて無駄な空間をなくしてみるのはどうかな？」

真桜「おお…それだと少し小さくなるな…確かにこれはいい考えやで…！」

「…参考になったかな？」

真桜「なったで…！あんがとな…！！」

凧「…城崎様」

「今度は凧か…どうかしたのか？」

凧「…春蘭さまからお聞きしたのですが…城崎様は大層武が御有りだとか…」

「…（あ、嫌な予感）」

凧「是非、お手合わせ願いたいのですが…」

季衣「あゝ、ならボクも」

「…悪いが今日は戦う気になれんし…棍を持ってきていないから」
凧「…その背にある刀で戦うのでは？」

「あゝ、これはある限られたときのみ抜くから」

季衣「えゝゝゝ」

「悪いな…今度、機会があったらな」

会話を楽しみながら、食事をし…
やがて…

「さて…そろそろお暇しないと」

凧「もう…ですか？」

「うん…この後、劉玄德の陣に行かないと」

華琳「あら、そうなの？」

「ああ、誘いを受けてるからね」

華琳「残念ね」

「悪いな。この埋め合わせはいずれ」

華琳「ふふふ…楽しみにさせて貰うわ」

こうして、龍司と百合は曹操の陣から出て行った

百合「……………」@不機嫌

「…あの、百合？どうかしたの？」

百合「…何でもありません」

「?????」

華琳の陣を出た後、龍司と百合は劉の旗のある陣に向かっていった

「…久々だな。アイツに会うのは」

百合「？ どなたかお知り合いでも？」

「ああ…俺と同じ世界から来た奴が劉玄德の元に居るんでね」

百合「そ、そうなんですか！？じ、じゃあ…今この地には天の御遣い様が二人いるということですか！？」

「まあ、そういうことになるね」

百合「ほえ…驚きました」

「まあ、これはまだ雪蓮や冥琳にも言っていないしね」

百合「どうしてですか？」

「聞かれてないし」

百合「あ、あはは…そ、そうなんですか…」

「…と、着いたか」

話しながら歩くとやっぱりそんなに時間がたった感じしないな

劉兵「何者だ！？」

「そちらから招待を受けたノウエルⅡガンランスだ」

劉兵「Σ あ、あの時のお方ですか！？失礼しました！！」

「気にしなくてもいいよ。じゃあ通らせてもらうね」

劉兵「はい！！」

…やっぱりおかしいだろ

何で名前を聞いただけでこうも態度が？

桃香「あ、龍司さん♪」

雛里「あわわ…もういらっしゃったのですか？」

「…早かった？」

桃香「今、皆で龍司さんを招いて何をするか決めて…食事会をしょ

うってことになったんだけど…」

「…悪いが、食事はつい先程済ませてしまったのでな」

桃香「そうなの？あゝ、じゃあどうしよう…」

「…ならお茶会というのはどうだ？茶葉は俺が持っているし…そちらは何か御茶請けの物があれば用意してくれればいいし」

桃香「あ、それいいね♪じゃあ、雛里ちゃん」

雛里「はい、朱里ちゃん達に伝えに行ってきます」

トトトツ…

何やら危ない足つきで走りだし…

カツ…

雛里「あっ…」

何もないところで転びそうになったのを…

トサツ…

「大丈夫か？」

転ぶ前に龍司が気付き、一瞬で動き雛里を抱きとめていた

雛里「は、はひ！！／／だ、大丈夫でしゅ！！／／」

「そうか…よかった」@にっこりと笑顔

雛里「あ、ありがとうございませしゅ！！／／」

「気にしないで。次は気を付けなよ？」

雛里「あわわ…は、はい／／」

雛里は真っ赤になりながらも、先程とは異なり、ゆっくりとした歩みで歩いて行った

百合「……………」@ダークネスオーラ解放

桃香「…こ、怖い」@それを隣でビリビリと感じ取っている

「さてと…ってどうかしたのか?？」

百合「いえ…何でもないです」@オーラ分散

桃香「ほっ…じ、じゃあ案内するね」

龍司は先程まで二人に背を向けていたので…百合が大層機嫌が悪かったということに全く気付かなかった

桃香によって案内され、二人はとある木の下に移動することになった

そこでは既に様々な料理が並べられていた

どうやら既に食事会のために作った料理を作り終えてしまったため急遽、それらを御茶請けとして使うことにしたようだ
まあ…腹は一杯だから俺と百合はそこまで食えんが…

一刀「あ、龍司。久しぶりだな」

「ああ…お前も元気そうで何よりだ」

百合「…この方が龍司様のお知り合いの方ですか?」

「ああ。一刀、俺の新しい仲間で…」

百合「太史慈です。字を子義と申します」

一刀「へえ、俺は姓を本郷、名を一刀っていうんだ」

百合「…龍司様がおっしゃっていましたが…それは真名に値する名なのでは?」

一刀「うん、まあそうだね。でも、俺にはそれ以外に名がないし」

百合「…我が真名は百合と申します。どうぞ、私のことは真名でお呼びください」

一刀「いいの?」

百合「龍司様のお知合いなのですし…それに本郷様は私に真名を教えてくれました。ですからこれは当然のことであると思いますが」
一刀「そうだね…じゃあ、よろしく。百合」
百合「はい」

「うんうん♪仲良きことはいいいことだね」
星「龍司殿。お久しぶりですな」

「あ、星か…って、その右手に持ってるのは？」

星「酒ですが？」

「…何杯目？」

星「さあ？数えようと思いませんので…（グイッ）」
語りながらも酒を煽る星

「…まああんまり飲みすぎないようにね」

星「善処いたしましたし。龍司殿は飲まないのです？」

「昨日かなり飲んだのでね。今日は飲まぬようにしているんだよ」

星「おやおや。ですが、一杯くらいならよろしいのでは？」

「その一杯がどんどん増えていきそうな予感がするから止めとくよ」

愛紗「それがよろしいかと」

星「何だ、二人とも連れんな」

愛紗「星が抜け過ぎなだけではないのか？」

星「そんなことはないぞ？私は楽しむべき時に楽しんでいるだけだからな」

愛紗「ハア…」

何だろうか…愛紗から俺や冥琳のような空気を感ずるな…

鈴々「龍のお兄ちゃん!!」

「ああ、鈴々。どうかしたのか？」

鈴々「今から鈴々と勝負するのだ!!」

「……………」

またですか…

「…悪いけど俺は今日は棍を持ってきてないから」

鈴々「背にある刀を抜けばいいのだ」

「…この刀は決まった条件を満たした時のみ抜くものだから」

鈴々「え〜」

「悪いな、今度又機会があればな」

鈴々「ぶう〜」

春蘭といい、鈴々といい…どうしてこうも勝負を挑まれるのだろうか…
さてと…

「お湯は？」

雛里「あ、こちらにあります」

「なら誰か湯呑を用意してくれ」

雛里「あ、もう用意してあります」

「そう、ありがとう。雛里」

雛里「あわわ…ど、どういたしました呢のです」

一刀「何をするんだ？」

「俺が持ってきた荷の中にあつた茶を入れようと思ってな」

一刀「何茶だ!？」

「秘密だ」

桃香「龍司さんが持ってきたものだから…天の世界のお茶ってこと？」

「まあ、そういうことになるな」

朱里「うわぁ、楽しみですね」

一刀「どんな茶を持って来たんだ？」

「多分、一刀にとってかなり懐かしいものがあるんじゃないのかな？」

そう言いながらも慣れた手つきで茶を入れ始めた
といっても最初は二種類しか入れてないので直ぐに準備が出来たの
だが：

「じゃあ…まずはこれで…」

皆、渡された碗を取り…
コクッ…

桃香「あ、美味しい」

一刀「…懐かしい味だ」

雛里「少し渋いですけど…趣のある味ですね」

百合「龍司様、これは？」

「日本茶っていう俺の母国の茶葉だね。どうかな？」

星「ふむ…なかなかいけますぞ」

「そう…それは良かった」

………

次に用意されたのは：

朱里「…うーん…ちょっと苦い感じがしますね」

一刀「…これって…紅茶か？」

「正解」

愛紗「紅茶…ですか？それは…どういったお茶なのですか？」

「見ての通り、赤い色をしたお茶だ。私的にはこのまま飲むのが好きなのだが…これが苦いと感じるのなら砂糖や牛乳を加えて味を円やかにすることもできる…個人によって味の好みの分かれる茶だ」

鈴々「うえゝゝ苦いのだゝ」

「ハハハ、これは甘党の人には辛いかな」

桃香「あまとう？」

「甘党っていうのは…そうだな、食べ物の中で甘いものが大好きで仕方のないっていう人のことかな」

桃香「へゝ、じゃあ辛い物が好きな人は辛党っていうの？」

「ああ、そんな感じだ…と次は…」

そういった流れで龍司は次々と茶を入れていった

プーアル茶、甜茶、こうじ茶、烏龍茶、カモミールティー、ギヤバロン茶など…

って言うか何でそんなに多くの種類の茶葉持ってるの？

ハーブティーはパックだけど…

「俺がお茶好きだから」

…

「さてと…一通りお茶会が終わった所で…何で俺を読んだか聞かせてもらえるかな？」

茶器を片付け、持っていた荷物を袋にしまうと龍司は話を切り出すことにした

一刀「…なあ、龍司…お前、俺達と一緒に来ないか？」

「…またか」

桃香「またかって？」

「さつきも曹操に誘われたんだよ。一緒に来ないかってな」

愛紗「ということは…その誘いは断ったということですか」

「ああ…俺は一応孫呉に忠を誓ったからね。それを反故にするなん

て出来ないし」

一刀「そうか…」

愛紗「残念です」

「スマンな、まあ俺が出来ることであるなら協力はさせて貰うから。
…まあ君主の命には逆らわんようにしないといかんがな」

星「ふむ…では何時かは頼りにさせていただきますぞ」

「ああ…ツと、そろそろ頃合いかな」

一刀「戻るのか？」

「ああ…そろそろ戻らんと蓮華が怒って来そうだしな」

百合「皆さん、本日はお誘いいただきありがとうございます」

桃香「ううん、私達もすごく楽しかったから♪」

鈴々「また一緒に飲みたいのだ♪」

「ハハハ、今度機会があったらね」

龍司達は最後まで一刀たちとの時間を楽しみ…そして、陣から出て
行った

「ふう、楽しかったがやはり疲れたな」

百合「お疲れ様です」

「全く…何で桃香も華琳も俺のことを欲しがるのかね…」

百合「それは仕方ないのでは？」

「…ふう」

疲れた体に鞭を打ち、龍司と百合は急いで陣に戻り…

蓮華「…随分と遅かったな」

帰ってきて早々、蓮華に睨まれた

「…もしかして結構待ってたのか？」

蓮華「い、いや…そんなことはないが…」

「…待ってたんだな…ゴメン、蓮華。色々と話していたら時間を喰ってしまった…」

蓮華「い、いや…私が自分でしていたことだし…誤られる必要など…」

「なら謝るのは止めて…ありがとうと言っておくよ」

蓮華「~~~~っ！！！！／／は、早く来い！！姉さま達もお前のことを待っていたんだぞ！！」

「ん、了解した。どこに行けばいい？」

甘寧「雪蓮様たちならあそこの陣でお待ちだ」

「うわっ！！」

何でいきなり後ろにいるかな！？

甘寧「…何だ、間抜けな声を出して…」

「…第一声がそれですか…相変わらず甘寧はキツイね…」

甘寧「……」

「ふう、まあいいけどね。じゃあ俺は雪蓮達に会いに行ってくるから」

百合「わ、私も…」

甘寧「百合、呼ばれたのはこいつだけだ。お前が行く必要などない…」

百合「……思春殿…少しお話があるのですが？」

甘寧「…何だ」

百合「…他の方々は龍司様のことを真名で呼んでいるにも拘わらず…何故思春殿はアイツだの…貴様だの…お前だのと呼んでいるのですか？」

…何だろう…傍から見ると…百合、怒ってるように見えるんだけど…

甘寧「理由は簡単だ。私があいつを認めていない。それだけだ」

百合「何故ですか？ 龍司様は孫呉の将として立派に務めていらっしゃると思います」

甘寧「ふん、新参者に言われたくない」

百合「なッ！！？」

うわゝ…それは幾らなんでも言い過ぎでは？

百合「…例え新参者でも…意地になって龍司様を認めようとするなら、い方に言われたくないですね」

甘寧「…何だと？」

…何か收拾が尽きそうにないどころか…余計に悪化してるような気が…

「あゝ、俺そろそろ行かないと…（ガシッ）…何ででしょうか、蓮華」

蓮華「…この状況を見て、用が分からないとでも？」

「……無理です」

蓮華「わ、私にだって無理だ！！百合はお前のことを慕っているのだからお前が何とか説得を…」

「…いや、あれは甘寧の言い方が悪かったのでは？」

蓮華「た、確かにそうかもしれないが…あれは私でも直ぐに止めるのは難しいぞ」

「……どうしようか、これ…」

百合と甘寧は今にも武器を取りだしそうな気配…

…拙いだろ、これ…

蓮華「ど、どうすれば…」

「…仕方ないか…」

蓮華「何か案があるの？」

「…危険だけど、正面から説得してみる」

蓮華「…大丈夫なの？」

「…一応棍だけでも持っておくか…」

部下に棍を急いで持ってこさせることにした

百合「龍司様のことを何一つ知らうともせずになだただ否定するばかりで…そんなことで呉の将が務まるのでしょうか!？」

甘寧「!! 貴様、言うに事欠いて!!!!!!」

百合「何ですか!! 貴方が悪いのでしょうか!!」

甘寧「…… (チャキ)」

百合「…やる気ですか? (チャキ)」

二人が手に武器を掛け、今にも互いに切りかかりそうになった時、

「あゝ、二人ともやめないか?」@根を装備済み

百合「龍司様…」

甘寧「…何だ」

「別に稽古とかで戦い合うって言うのは賛同するけどさ、今みたいな変な動機で喧嘩するのは止めないか?」

百合「変じゃありません!! 思春殿が龍司様のことを少しずつでも見つめなおすというのであれば私は引きますけど!! この意地っ張りな方は!!!!」

甘寧「誰が意地っ張りだ!!!! 貴様はやはり斬る!!!!」

甘寧が百合に斬りかかろうとし、百合も応戦するために太剣を持ち、甘寧に斬りかかろうとした

「…いい加減にしろ」

ガキンッ！！×2

甘寧「なッ！！！！？」

百合「えっ！！！！？」

龍司は二人の間に入り込み、二人の獲物を二つの棍でそれぞれ受け止めていた

「いい加減にしろよ？」

龍司自身もいつもと様子が異なり、声が恐怖を与える様な圧迫感を感じられた

「二人とも…これ以上続けるのであれば…俺の個人特訓（地獄）に付き合ってもらうことになるが？」

にっこりと笑いながら二人にゆっくりと呼びかける龍司なのだが…目の奥が笑ってなどいない…寧ろ相手に恐怖を与える目だ…

ゾクッ…

そして…その目を直接見た甘寧と百合は足が震えるほどの恐怖を味わった

同時に武器を地に落とし、先程までの怒りは何処かへ消えていた

「全く、二人ともここが何処か忘れてないか？そんなに力が有り余ってるのなら今陣を纏めてる祭と穩の手伝いにでも行ってる」

百合「…はい」

甘寧「…ふん」

龍司に指示され、二人は祭と穩のいる場所へと向かっていった

蓮華「…凄いわね。よくあの状態の二人を…」

「ハア：俺の部下に急いで棍を持って来させて正解だったよ…全く：下らないことで喧嘩は止めて欲しいんだけどね…」

蓮華「すまないな…後で思春には私から言っておく」

「…でもどうしてあそこまで俺のことを嫌うかね…それが分からないことには今後どう対処したらいいのか分からないよ」

蓮華「…今度、思春と話をしてみるか？」

「…暇が出来たらぜひおねがいするよ」

雪蓮「あはは♪それは大変だったわね」

「本当だよ…ハア…」

冥琳「…お疲れ様だ」

「…まあこれは個人的な問題だし…それよりも…今回二つの陣を訪れたけど…」

冥琳「うむ…お前から見て、どうだった？」

「…十中八九時代の波に乗っている。劉玄德と曹孟徳…二人とも天を掴むだけの器を持っている。ただ…そのどちらとも、雪蓮とは異なる天下を目指しているかもしれないから…ぶつかり合うことは避けられないと思う」

冥琳「そうか…軍事力や将の質は？」

「まず曹操だけど…軍事力はこちらよりも遥かに上だ。何より、今の雪蓮は立場が悪いままだ。これをどうにかしないと…これより先はかなり厳しくなると思う。将は…かなり力のある者達が集まっているな…武と智、共に抜かりはないようだ」

雪蓮「…流石ね」

「劉備だが…まだ兵力は少なく、名もそれなりといった所だが…領民は彼女のことを慕い、彼女自身も力なきものが力あるものに虐げられる今の世を変えようとしている…それが玄に行動で示されているのだから…恐らく多くの者が彼女の元に集まるだろうな…将も一騎当千の関羽や張飛、超雲などが居て、軍師も伏龍鳳雛の二人が居る」

冥琳「逆を言えば…いま彼女を叩けば、天下人になり得る人物を一人潰せるということか…」

蓮華「な、冥琳!？」

「それは…無理だろう」

雪蓮「あら、どうして？」

「…今まで黙っていたのだがな…俺以外にも…もう一人、天の世界から来た人間が今この大地に存在する」

「「!?!?!」」

「そして…そいつは今、劉備の元に居る」

冥琳「…成程な…そういうことか」

雪蓮「名は？」

「性を本郷、字を一刀。俺の学友だった男だ」

冥琳「…なら龍司はその本郷という男とは戦いづらいか？」

「いや、敵になった時は…容赦はしない」

雪蓮「あら、随分と冷たいのね」

「ふつ、俺は今は孫呉に忠誠を…そして、あいつは劉備に力を貸すと己の意思で決めた。なら、俺は俺のままでアイツに対して向き合っただけだ。（もしかすると雪蓮と桃香…劉備は戦わないで済むかもしれないからな…）」

蓮華「龍司…」

「…話が逸れたな…とにかく、今は早く袁術から独立を目指すべきだ。それから…」

冥琳「それから？」

「皆、この事は内密に願えるか？」

先程よりも険しく、真剣な顔をする龍司を見て、その場に居た三人は静かに頷いた

「…今のところ、この世界は俺が知っている歴史どおりに進行している…ならば…この後、起こることも恐らくは…」

雪蓮「…何が起こるの？」

「…都で今政権を裏で握っているのは十常侍というのは当たり前だが…いずれそれらを董卓が支配するようになる」

冥琳「董卓というと…あの西涼の太守か…」

「ただ、これは俺の世界の歴史であって…いくつか食い違うところもあるかもしれないが…この後、再び大きな動乱が起こるというところだけを知っておいてもらいたくてな」

雪蓮「…分かったわ。龍司を信じましょう」

「いいのか？こんな突飛よしのないことを…」

蓮華「何を言っているんだ。お前がそんなに真剣な顔をして教えてくれたんだ。ならそれは偽りではないということくらい、私でも分かるぞ」

冥琳「それに…今はお前とて立派な呉の将なのだ。仲間を信じずに何を信じると言うんだ」

「…ふふふ…本当にお人よしだな」

雪蓮「龍司には負けるわよ」

？水関の戦い

それから暫くした後…龍司が言った通り…

都で靈帝が死亡した後…董卓が十常侍を殺し、都の実権を握ったという噂が流れ始めた

それと同時に、雪蓮…というよりも袁術の元に反董卓連合の軍への参加を求める手紙が届いた

それが届いた当初は袁術も嫌だ嫌だと言っていたが…

龍司がとあることを教えた瞬間、答えを改めた

雪蓮「…龍司って…本当にあの子の扱い上手いわね」

「……純粹に単純なだけだろ…まさか、『ここで都を救い、名声を上げれば…現皇帝に氣にいられるかもしれません…そして…いずれは皇帝の座も夢ではないのかもしれない』……今更ながらありえん嘘だな…信じる袁術が可笑しいのか……それとも俺がおかしいのか…」

雪蓮「まあ、龍司のその言葉のお陰でこの戦に参加できるようになったんだから、いいんじゃないのかしら？」

龍司「…なら、まずはこれからどう動くかを決めないとな」

雪蓮「ええ」

居城に戻り、冥琳たちに概ねの内容を伝えると…第一声は呆れ（袁術に対して）…第二に龍司への称賛だった

龍司が上手く袁術を乗せたために、時代の流れに乗ることができそうだったためである

冥琳「……連合軍には雪蓮、私、龍司、百合、思春、明命の6人で

十分ね」

雪蓮「そうね…その間に…蓮華たちには…」

蓮華「はい、分かっています」

龍司「……こちらは出来る限り、諸侯の情報及び、袁術の手持ちの兵数を減らせるようにしてみる」

穩「あう…私も龍司さんのお伴をしたかったです」

百合「それは私に任せてください♪」

思春「……蓮華様のこと、よろしく頼む」

穩「はい、分かっていますよ」

やはり穩は有能だな

仕事と私事をしっかりと区別できてる

…でも何で穩は俺のお伴なんかしたかったんだ??

後で雪蓮や冥琳に聞いたのだが…

「鈍感」

と言われただけだった

…何で??????

その後、必要最低限の荷を用意した後、呉の軍は袁術軍と合流し…
連合軍の本陣へと向かっていった

それから幾刻後…

「おお、やはり壮大だな」

見渡す限り、様々な陣や旗が見えた

かなりの数の兵がいるな…

【曹】や【劉】が見えるってことは…華琳や桃香や一刀もいるって
ことか…

龍司は当てられていた仕事に取り掛かろうとしたのだが：

「…何故俺が行かなければならないんだ？総大将同士の会議に…」

冥琳「…スマン、本来なら雪蓮が行くはずなのだが…メンドくさいからと…」

「…ハア、相変わらず身勝手な国主ですこと…」

冥琳「ああ、まったくだ…」

「で、他にも甘寧なんかもいるじゃないか…どうして俺なのか教えてくれないか？」

冥琳「お前は曹操や劉備…そしてもう一人の天の御遣いの知り合いでもある…それ故だ」

「…成程ね」

確かにそれなら円滑に話が進むかもしれないからな

だが…その期待は本陣に着いてすぐに裏切られた…

袁紹「おゝほっほっほ」

桃香「あ、あはは…」

華琳「ハア…」

一刀「……………」

「…何だ？この状況は？」

「「………！龍司^{さん}！………」」

龍司が入ってきた瞬間、三人は驚いたように叫んでしまった

袁紹「な、なんですの！？いきなり」

「あゝ、スイマセン。何でもないので話し続けてください」

袁紹「え、ええ…」

呆氣にとられたのか…袁紹は暫く黙っていたが…

その後は何事もなかったかのように先程のペースを取り戻していた

「よう、久しぶり」

一刀「ああ…でもどうして龍司がここに？」

「…家の主の代理」

桃香「す、凄いなだね、龍司さんって…」

「……いや、そういうわけではないのだがな…」

桃香「?????」

一刀「察するに…苦労してるんだな」

「…分かってくれるか…」

華琳「ふふふ…相変わらず楽しそうね」

桂花「お久しぶりです、龍司様／＼」

「あゝ、うん。お久しぶり…ってどうして桂花は体を摺り寄せているのかな？」

桂花「え／＼と／＼／龍司様…」

「と、とりあえず離してくれないかな？」

華琳「桂花、後になさい」

桂花「はい…」

いや、そんな残念そうな顔をされても…
って言うか後でって何!?

冥琳「……」

こちらをじろりと見ている軍師殿の視線が痛いです…

華琳「…貴方はこの状況を見てどう思った？」

「…会議が進んでない」

華琳「ええ、流石ね」

「…あの偉そうな女性は？」

華琳「性を袁、名を紹、字を本初…貴方達の知ってる袁術の従姉よ」
「あゝ…成程ね。理解した」

つまりバカってことね…

華琳「そう言うことなのよ」

一刀「ずっとあんな状態が続いててな…何だか袁紹さんが総大将をやりたがってるみたいなんだけど…それを自分で言うのは嫌みたいで…」

「…他に候補は幾らでも居るだろ？華琳とか…桃香とか…」

華琳「…こんなバラバラの軍を統率できると思う？」

桃香「私はこんな大軍を統率なんて出来ないよ…」

「…こっちもそれは無理だろうな…雪蓮…孫策はそのようなことを望まんだろうし…なあ、冥琳」

冥琳「ああ…そうだな」

それにしても…この膠着状態、どうにかしないとな…

このままだと董卓軍に無駄な時間を与えて防備を完璧にさせてしま
うからな…

だが…何を思ったのか、桃香は動き始めた

桃香「あの、袁紹さん」

袁紹「あら、どなたかしら？」

桃香「平原の相、劉備です。こんなことをいつまでもやっていたら、
今頃董卓さんの軍は防備を完全に整えてしまうと思うんです」

袁紹「それもそうですわね。でも大將が決まらないことにはどうに
もなりませんわ」

桃香「もう、袁紹さんでいいんじゃないでしょうか」

袁紹「あら、よろしいので？」

華琳「勝手にすればいいわ。でも我が軍は独自に行動をさせてもら

うから」

冥琳「我が軍も同じく、勝手にさせてもらう。龍司、行くぞ」

「ん、俺はもう少しここに残るよ」

冥琳「ならば早めに戻ってくるのだぞ」

「了解した」

そう言い残し、華琳、桂花、冥琳は会議中に使用している陣から出て行った

会議の結果として、総大将は袁紹に決まり…

総大将を決める決定打になった桃香の部隊は先鋒になることになった

「…大丈夫なのか？」

一番兵力が少なく、兵糧などの問題もある劉備軍なのだ

それを先鋒にしようという袁紹はやはり無能ということは理解したが…

一刀「ああ…何とかするしかないよ。まあ、袁紹に兵5000と十分な兵糧を提供してもらえようにしたから」

「……………」

桃香「後は朱里ちゃんや雛里ちゃんの策と…愛紗ちゃん達の武に頼るしかないんだよね…情けないことに…」

「……ふむ、一刀、桃香」

桃香&一刀「「???」」

「もしかしたらそちらに俺からの手紙が来るかもしれないから…んじや」

何やら意味深な言葉を残して、龍司はその場から離れて行った

一刀「「???」」

桃香「どういう意味だろう？」

一刀「さあ…まあ、とにかく俺達は目先のことを解決しないとな…」

陣に戻ると、龍司は早速行動に移った

冥琳「何だと!?!」

雪蓮「……」

「…この頼みを受け入れては貰えないだろうか?」

冥琳「…先鋒に加わって、戦いたいと言われても…この戦いで私の目的は…」

「それも十重理解したうえでの頼みだ。勿論、兵は俺の部下のみだ」

冥琳「何!?!では、たった兵500と共に先鋒に加わると言うのか!?!」

「そのつもり」

雪蓮「どうしてか…理由を聞いてもいいかしら?」

「…先鋒に居れば何かと色々な情報も入ってくるし…何よりも都に入り込む際にアレを手に入れやすくなるからな」

冥琳「あれ?…アレとは何だ?」

「…朝廷が持つ台帳と正確な地図…及び…運が良ければ…『玉璽』が手に入るかもしれないからな」

雪蓮「…成程ね。龍司、貴方って案外悪ね」

「今の朝廷がそんなものを持っていても無駄だしな。それに今後、それらは雪蓮の力になるだろう?」

冥琳「…ばれないか?…そのようなものを持ち出して」

「大丈夫だろ。恐らく、帝やその側近たちは戦に巻き込まれぬように逃げるか宝物を隠すかをするだろう。俺はそういうものを探し出すことは得意だしな」

冥琳「…ならまずは袁術を説得しないと」

「それも任せてくれ。ついでに袁術に兵3000も借りられるようにしてみるから」

雪蓮「ふふふ…龍司なら出来るかもね。分かったわ、でもね龍司私

も劉備には一度会ってみたかったのよ。だから、私や冥琳も少ししたら会いに行くわ」

「分かった。んじゃあ行ってくる。雪蓮達も十分に気をつけてくれよな」

国主と軍師からの許可を貰うと龍司は早速行動を始めた

自分の部下500の兵に今回の行動の簡単な説明を施すと、部下達は皆迅速に行動を始め、その間、龍司は袁術の元に許可を貰いに行動した

案の定、龍司が甘い言葉で袁術を上手く誘導し、兵3000と3カ月分の食料を貰うことも出来た

それらの準備を終えた後、龍司は一人の部下を伝令として呼び、手紙を届けるように命を下した

そして、それと同時に進軍を始め、桃香のいる陣へと向かっていった

↓桃香の陣↓

桃香「ううゝ、私達だけで大丈夫かなゝ」

朱里「現状ではかなり厳しくなると思います。この総大将決めのためだけに使った時間はそれだけ大きく、これ以上相手に時間を与える様な事は出来ませんから」

鈴々「にやあゝ、やっぱり袁紹って馬鹿なのか？」

一刀「鈴々、それ本人の目の前では絶対に言っちゃ駄目だからね」
愛紗「それにしても…これからどう動いたらいいものか」

雛里「敵は私たちよりも兵は多く、更にはとても頑固に出来ている？水関に居ますからね」

皆でこれからの行動を考えている中…

兵「申し上げます！！」

星「何だ、会議中だぞ」

兵「は、はい……それが……呉の孫策の部下である将から文が劉備様と御遣い様宛に……」

愛紗「手紙?…何だ、このような時に…」

一刀「……その手紙は？」

兵「は、はい……こちらです」

一刀は渡させた手紙を開き……
中を見てみると……

———今から援軍としていくから　しろさきより

とだけ書かれていた

しかも日本語で：

桃香 「????????? なんて書かれているの？」

星「『援軍』と書かれているのは分かりますが、他のこの文字は？
？？」

一刀「え……えええええー！！！！？！？！」

鈴々「にゃ？ お兄ちゃん、どうかしたのか？」

「一、龍司が援軍にこの陣に来るって……」

「……えええええええー！！！！！」
「」

？

数刻後、本当に龍司は桃香の陣にきました

「よ」

一刀「よ、じゃねえよ！！何で援軍に！？」

「ん、流石に相手の数に対して、桃香達の兵数じゃ厳しいんじゃないかと思ってな。こっちの主やその上の主に許可を貰ってこっちに來たんだよ」

朱里「…兵数はどれくらい連れて來たんですか？」

「俺の部下500と袁術から借りてきた兵3000、それから3カ月分の食料と武具ってところかな」

雛里「よ、良くそれだけ借りて來られましたね」

「…袁術は唯の馬鹿だからな。袁紹と言いい…袁術といい…袁家ってみんな馬鹿の細胞でも持っているのか？」

一刀「お、お前…かなり直接的に言うな」

「ま、こっちも好きでアイツの下に何かいるわけじゃないからな」
星「何にしる援軍は助かる。しかも、これで我が軍は何とか1万を超える軍にはなった」

「それは良かった。断られたらどうしようかと思っていたよ。ああ、それから他の部隊からも食料は送って貰えるように頼んでみたよ」
朱里「他の部隊というと？」

「まあまずは公孫賛の部隊、それから袁紹、あと華琳…曹操からも手配してもらえようになったから」

雛里「あう…凄いですね。で、でもどうしてそんなに…」

「まあとりあえず公孫賛は桃香達と知り合いだったみたいだからね。袁紹は袁術と同じ手口を使った。華琳は…まあ色々とな…それに桃香の部隊に足りないのは武や智よりも食だからね」

一刀「…ばれてる？」

「少なくとも俺や雪蓮、冥琳や公孫賛、そして華琳にはな」

愛紗「そ、それほどまでに我らは貧乏として知られているのか？」

「…まあ、平原の相になったばかりなのだから仕方ないと思うが？」

民のことを思つて、他軍から食料を分けてもらえるようにしたのだろうか？」

星「ふむ…そこまで分かつてしまうとはな」

「…これくらいなら桃香や一刀の性格を理解している者ならだれでも分かると思うのだが？」

鈴々「にゃ、確かにそうなのだ」

一刀「お、俺達つてそんなに分かりやすいのかな…」

「まあそんなことよりもこれから進軍する先はもう既に決まっているのだろうか？」

朱里「…それは決まつてはいるのですが…」

「…作戦は？」

雛里「え、えと…」

「…その顔で大体分かる…つて言うか、あの袁紹が作戦なんて高度なもの、用意しているわけないか…野生のイノシシよりも馬鹿だし…」

一刀「いや、だからお前言い過ぎだつて…」

「別にかまわんだろ…お前らは半分脅しのようなもので先鋒を任せれたんだし…」

とりあえず…あの馬鹿はもう頭からはずした方がいいだろう…頭にくるし…

「とりあえず、少しでも次の敵のいる位置、？水関に居る敵将と軍規模の情報…もう入ってる？」

朱里「あ、はい。敵将は華雄將軍に張遼將軍が籠っていて、兵数はやく8万〜10万だそうです」

「それほどか…籠城戦に持ち込まれたら厄介だな」

雛里「そうですね…籠城戦には敵より3倍の兵が必要と言われていますから」

「…ふむ…？水関まではまだ時間もあるし…それまで集められるだ

け情報は集めておくか…張穰!!」

張穰「はっ、ここに!!」

張穰字を四季オリジナル

俺が手塩にかけて育てた諜報員だ

俺や明命にはまだ劣るが、情報収集能力はかなり高い

「我らが？水関に到達するまでの間、君には可能な限りの敵将の情報を集めて欲しい。可能であるのなら、？水関の穴になりそうな場所も」

張穰「御意!!」

シュタツ!!!!

そう言うで一瞬で張穰は目の前から消え去った

一刀「い、今のは？」

「俺の部下の一人で張穰だ。彼には俺の受けてきた特訓と同じものを受けさせているからな。かなり情報収集能力が高いから期待してくれてもいいぞ」

愛紗「はぁ、凄いですね」

「それはそうと…俺の部隊は桃香、君が指揮してくれ」

桃香「ええ!!?!いいの!!?!」

元々龍司は、桃香の元でなく、雪蓮…呉のもとで働いているみだそれを他者に指揮させるなんて…普通はありえないことである

「別にかまわんだろ。今、俺は桃香や一刀たちの軍の一員という扱いでも。それに今は孫策軍は目立った行動は控えないといけないのでな」

一刀「それはそうだが…お前はともかく、兵隊さん達はそれで納得するの？」

「俺が話はしておいた。皆、その指揮のもとで動いてくれるそうだ」

桃香「…うん。分かった。じゃあ、よろしくね、龍司さん♪」

「ん、我らの命、君達に預ける」

龍司は桃香達との仲を深め合うために話をし続けている時…

張穰「…申し上げます!!」

張穰がいつから居たのか…龍司のすぐそばに来ていた

「どうした!?!」

張穰「ハッ!! 華雄、及び張遼將軍の情報を得たため、こちらに戻ってまいりました」

一刀「早っ!!?!」

あれからほとんど時間が経ってないのに!?!

「流石、仕事が早くて助かる」

張穰「もったいなきお言葉!! では報告させていただきます」

張穰の話からすると、張遼は智にも武にも長けた将であり、彼女は籠城をして時を稼ぐ策に出ることが明確であるということ
その一方で、華雄は猪武者であり、己の武に高い誇りを持っているが故、籠城には反対しているそうだ

「…成程、向こうの軍師は人選を誤ったな…」

朱里「? どういうことですか?」

「確かに、張遼が居れば俺達は長い間、? 水関で足止めを食らうことになっていただろうな…だが、もう一人の将、華雄は守るに向かぬ将。そこを突く」

雛里「…つまり、華雄將軍を外におびき寄せるということですか?」

「ああ…だが、おそらくはすべての兵がこちらに向かってくるというところでもある。それをどうにかしなければ…」

兵士「申し上げます！！先程、呉の孫策、周瑜が劉備様に会いたいと…」

「ん、じゃあ通して…って俺が命令できる立場じゃないか」

桃香「ううん、いいよ。通して」

兵士「はっ！！！」

愛紗「それにしても…龍司殿といい…何故孫策は我らにこうも味方をしようと？」

雪蓮「それは劉備ちゃんが信賴に値すると思ったからよ」

「あ、雪蓮。早いな」

雪蓮「当然♪と言っても冥琳に言われて動いただけなんだけどね」

「いや、それくらいわかってるよ（笑）」

雪蓮「むう…酷い…」

「はいはい。それよりも、さっさと話を進めてこれからの行動に移らないと」

雛里「そうですね、行動は迅速かつ的確にというのが最適ですから」

雪蓮「じゃあ、率直に言うわ。劉備ちゃん、暫く私たちと同盟を組まない？」

桃香「同盟ですか？それはこちらとしてもありがたいんですけど…でも、どうして私たちなんですか？」

雪蓮「さっきも言ったけど、貴女が信賴に値するからよ。龍司も貴女のことを認めてるし…それに何より、貴女のところにも居るのでしょう？天の御遣いが」

一刀「ん、俺のことか」

雪蓮「あら、貴方がそうなの？」

一刀「…ん、まあ俺が一応、桃香達の御遣いってことになってる本郷一刀だ」

雪蓮「私は孫策、字を伯符よ」

一刀「…孫策さん、正直、俺や多分他の皆も孫策さんのことを信用

することは出来ないけど…でも、一緒に戦ってくれるのであれば俺はその申し出を受けたいと思っています」

愛紗「ご主人様!？」

一刀「愛紗、正直言って今の俺達のこの軍規模で？水関に当たっても勝率はかなり低い。それが原因で愛紗や鈴々、それに他の兵隊さん達を無駄に危険な目に遭わせたくないんだ」

星「主…」

「それはこちらとて同じだ。こっちの本当の目的は袁術からの独立。それ故にこのような戦いで無駄に兵たちを死なせたくはない」

桃香「…分かりました、孫策さんとの同盟を受けたいと思います」

雪蓮「そう、ありがとう劉備ちゃん」

桃香「いえ、こちらこそこれからよろしくお願いしますね」

こうして仮の物ではあるが劉備と孫策の間に同盟が結ばれることになった

？水関の前に到着し、桃香と雪蓮の部隊は直ぐに？水関攻略の策を考えることにした

冥琳「さて…あれだけの部隊のいる城をどう落としたものか…」

「いや、それ自体が間違っているぞ」

雪蓮「？　どういうこと？」

一刀「あれだけ多くの兵と有能な将のいる城にこちらから攻め込むということがそもそも間違っていることか？」

「おお、一刀。その通りだ。やるな」

一刀「そ、そうか？」@テレテレ

朱里「はわわ。ご主人様はやっぱ凄いです」

「なら一刀に問題だ。これから俺達は動くべきだ？」

一刀「うゝん…張穰さんの話からすると…張遼さんは兵法にも長けてるし、常に冷静沈着な人だから心理戦には持っていけないけど…

華雄さんは別なんでしょう？」

「その上、華雄は以前、雪蓮の母、孫文台にやられたことのある過去を持つ人物でもある」

冥琳「よく知っているな」

「それくらいのこととは調べたからね。そこで提案…というよりもこれが最善の策になると思うんだけど…」

雛里「えっと…教えていただけますか？」

「ん、まず桃香の部隊に前に出してもらって華雄を挑発してもらいたい。城にこもって矛を交えぬ愚か者とか言っただけ。だが、多分それでは華雄は出て来ないだろうな。周りの兵や張遼もいるし。その間、俺と雪蓮は袁術のところに行って正式に前線に出てもいいかという許可を貰いに行く。その後、雪蓮が直接華雄に吹っ掛ける。もし、華雄が出てきたとならば張遼も黙ってはいないだろう。そうなった場合、雪蓮の部隊は華雄を、桃香の部隊は張遼を中心に相手をし、敵部隊を二つに分断する」

星「だが、もし孫策殿が華雄に吹っ掛けても出て来なかった場合は？」

「その時は、俺が挑発をしながら兵3000を連れて城壁にその兵たちを寄せてやるよ。で、ちょっとしたことをやらかす♪」

愛紗「あ～、確かにそれは屈辱ですね」

「誇りを一番としている華雄だからこそ取れる策ということだ。どうだ？ 冥琳、朱里、雛里」

朱里「…考えられる策ではそれが最善でしょう」

星「だが、一番危険なのは我らではないのか？」

「言っただろ？ 『敵は守ることを考えてるって』 過激な攻めをしなければ、こちらに被害はほとんど出ないだろう。だから、皆は敵が城から出てきた時のことを考えてくれればいいと思う」

雛里「そうですね…華雄さんともかく、張遼さんは私達の食料が尽きることを狙っているでしょうし…あちらから攻めてくる可能性はそれくらいしかありませんから…」

「納得してくれたか？」

鈴々「鈴々は難しいことはよく分からないけど：敵が城から出てきたらやつつけるってことなのか？」

「そういうことだ。それからもうひとつ、情けないことに俺達は表立った行動はあまり出来ない。それ故に厳しいことはそちらに押し付けるようなことが度々あるかもしれない：それは最初に謝罪しておく」

一刀「いや、こっちもそっちの状況は理解しているつもりだ。気にしないでくれ。その代わり：龍司も：孫策さん達も俺達に力を貸してくれよ？」

孫策「当然よ、約束したからには私達も出来る限りの協力はさせてもらうわ」

桃香「じゃあ、孫策さん。頑張りましょうね」

孫策「ええ、劉備ちゃん。互いに武運を」

その後：劉備は進軍を開始し、龍司と雪蓮は予定通り袁術の元に向かい、前線に加わることを許可してもらい：

作戦通り、雪蓮は華雄を挑発して場外におびき寄せようとした

だが、それでも華雄を釣ることは出来なかったために、龍司が兵を引き連れ城へ兵を近づけさせて行った

龍司が華雄をあざ笑いながら

「どうした！？それでも董卓軍に名を轟かせた華雄將軍なのか！？

この様子では唯周囲の物が大げさに噂を広げただけのようなだ！！

我らのような部隊に対し、怯えているようではニワトリのような臆病な動物にも劣る肝の持ち主のようだな！！おい、皆華雄將軍を笑ってやれ！！」

あはははははは！！！！！！

そして何を思ったのか…

華雄の旗の棒の方に弓を引き…

ドスッ！！！！

的確に当てた

場外で好きかって言われ、更には臆病者扱いされ笑いものにされた華雄もそしてその部下達も我慢の限界を突破し…ついには…

ゴオオオオオオ……

明命「雪蓮様！！城門が開きました！！！！その旗印は…華雄將軍の物です！！！！」

雪蓮「あら、華雄も我慢できなかったのねえ」

冥琳「それはそうだろう。私だってあのようなことを言われれば腹も立つだろう」

雪蓮「そうね…それはそうと…龍司の作戦通り、私達は華雄の部隊を引き受けるわよ」

冥琳「よし、明命、思春、百合の部隊はこのまま龍司の部隊と合流し華雄の部隊を殲滅せよ！！！！」

明命&思春&百合「ハッ！！！！」

雪蓮「私は…」

冥琳「勿論ここで待機だ」

雪蓮「うぐ…め、冥琳…？」

冥琳「駄目だ」

雪蓮「え…私も華雄か張遼と戦いたい…」

冥琳「駄目だと言っているだろう。全く、龍司が居ないと全負担が私に来るのだから…」

「どうした華雄！！私の武雄に恐れをなし、姿すら見せられぬか！？」

華雄「私ならここに居るぞ！！！」

「ほう、貴様が華雄か…」

華雄「先程から黙って聞いていれば私のことを好きに言ってくれたな…」

「ふん…そんなのは貴様を？水関から出すための策にすぎん。そんなことも理解できぬのか？やはり貴様は唯の猪武者だな」

華雄「な！！くう、その口を二度と開かぬようにしてやる！！！」

「…御託はいいから…さっさと来いよ」

華雄「うおおおおお！！！」
ブンッ！！

華雄は己の武器を大きく振りかぶり、龍司に向かって振り下ろしたその速さは先程まで龍司が戦っていた雑兵達とは異なり、スピードとパワーを持った強力なものであった

「…ほう、流石に将として名のあるものだ…だがな…」
ガキッ！！！！

華雄「なッ！！！？」

華雄は目の前にある状況に驚かざるを得なかった
自分は今、ある限りの力で武器を振りおろした
そのはずが…

「…俺には通用せん」

目の前に居る男はそれを右手の棍のみで受け止めていたのだ

華雄「ば、馬鹿な！！？」

「…次は俺か…一つ言っておく…」
———死ぬなよ？

ゾクッ…

華雄はかつて感じたことのないほどの寒気を感じた
そして次の瞬間…

シュッ！！！！

ガキッ！！！！バキッ！！！！！！

華雄「がはっ！！！！」

反射的なのか…己の武器で龍司の攻撃を防いだのだが…

己の武器が壊れ…龍司の攻撃は華雄の腹部を直撃していた

華雄もあまりの衝撃と受け入れがたい現実のために立てずにいた

華雄「が…は…」

「…こんなものか…」

龍司は棍を華雄の目の前で振りかぶろうとしたが…

張遼「うりゃあ！！！！」

ガキッ！！

その攻撃は張遼の一撃によって防がれた

張遼「ちっ、華雄、つかまりーや！！！！」

華雄「す、すまない……」

華雄は張遼の馬に乗り、その場から逃げ去っていった

それを確認した張遼と華雄の部隊は混乱し…？水関へと我先に逃げ
て行った

「…逃がしたか（まあ殺さずに捕えようとしたただだから逃げられてもいいんだけどな）今が好機だ！！！！甘寧、明命、百合！！！！全軍に突撃命令！！！！それから張穰はこの事を雪蓮に連絡！！！！俺はこれから劉備の軍に行く！！！！」

「「「ハッ（了解）！！！！」」」」

そして数刻後…、

桃香と雪蓮の部隊は？水関の制圧に成功した

虎牢関の戦い

？水関を落としたことによって次の目的地は最大の難関であろう、
虎牢関

そこには先程敗退した張遼と華雄に加え、飛將軍呂布奉千や命軍師
として名高い陳宮もいるという情報が入ったが故、先程よりも苦戦
することが必然とされていた

だが…そこに伝令が入った

孫策、及び劉備の部隊は後局に引き、先鋒を袁紹、曹操と交代せよ
というものだった

恐らくは袁紹が？水関の戦いの際に全く活躍できなかったことを気
にして、活躍していた劉備や孫策の軍に手を出させないようにした
のだろう

…随分と子どもらしいやつなんだな

それに巻き込まれている華琳も大変だろうに…
それにしても…

「…俺達はどうして少しは休めるからいいが…」

雪蓮「ええ、袁術ね。あの子、袁紹をいのように操って自分は無傷
で手柄を得ようとしてるわね」

冥琳「正直、それは困ったことなのだがな…」

「確かに雪蓮達が独立する際にあれだけの軍勢が居るとなると…正
直、きついな…どうにかして袁術の兵数を減らさないと…」

そんなことを話しているのだが…実際は…

桃香「あの…こんなことを本当にしていて大丈夫なんでしょうか
…」

「平気だろ？だって俺達はこんな後方に配置されてるんだから…」
龍司達は桃香達を自分達の陣に誘ってお茶会を…

兵士たちにも少量だがお茶を振るまっていた

雪蓮「はぁ〜♪龍司の入れるお茶は格別においしいわね〜♪」
冥琳「確かに：どうやったらこれだけの味が出せるのだ？」

「昔からいろいろなお茶を試してみてたからね。今では大半のお茶を良い状態で淹れられる様になったよ」

一刀「：美味しいな」

朱里「本当ですね」

愛紗「しかし：桃香様のおっしゃる通り、我らはここでこのようにのんびりとしていいのでしょうか：」

「：とりあえず、ずっと気張っていても体も心もボロボロに疲れるだけだ。適度な休息も時には必要なことだぞ？」

鈴々「そうなのだ♪愛紗は少し気張りすぎなのだ♪」

愛紗「しかし！！」

「まあこれでも飲んで落ち着け。今、張穰に頼んで前線の状況と虎牢関について調べてもらっているところだ」

雪蓮「あら、流石ね。仕事がいとも早くて助かるわ」

一刀「：張穰さんって大変なんじゃないのか？いつも危険な任務ばかりさせてるんじゃない？」

「張穰は完全に諜報員として鍛えているし、何より他の兵よりも給金はかなり高めにしているからな。それだけ俺は張穰に期待しているんだよ。そして彼は常に其れに答えてくれる。俺達は信頼という名の関係で成り立っているんだよ」

桃香「へえ、いい上司さんと部下さんですね♪」

「そういう関係は好きではないのでな。俺は張穰は大切な仲間であり、家族のような存在であると思っているよ。勿論、雪蓮や冥琳、明命や百合、甘寧や祭、穩や蓮華は勿論、呉の兵すべては俺の大切な人たちだ」

そうきっぱりと言い切った龍司に対し：

雪蓮「うわ／＼／＼流石にそうはつきり言われると／＼／
冥琳「ふふふ、それだけ龍司は頼もしくなったということだ」
思春「……何故私まで含まれているのだ」

百合「…嬉しいです／＼／」

明命「た、たたたたた大切って／＼／」

こちらは混乱もしくは照れているようで…

一刀「……よくもまああんなことをすらすらと言えるな…」

「？何故だ？大切だと思う人たちにそう言うのは間違っているのか？」

桃香「あ、あはは…間違っではないんだけどね…」

鈴々「龍のお兄ちゃんとは別の意味でお姉ちゃんやお兄ちゃんと同じ天然さんなのだ」

桃香「むう～、私天然じゃないもん」

「????????」

一方…蓮華たちの居る建業では…

蓮華& a m p; 祭& a m p; 穩「クシユン」

蓮華「グスッ…風邪かしら」

祭「いや…誰かが噂しているのかもしれないな」

穩「案外龍司さんだったりして」

蓮華「いや、それはないだろ」

「???」「お姉さま？大丈夫？」

蓮華「ん、ああ大丈夫だ」

場所に戻って…

暫くした後、張穰が戻ってきたためにその報告を聞くことにした

「ん、御苦労さま。はい、これお茶ね」

張穰「ありがたき幸せ。んぐ」

「じゃあ教えてもらえるかな」

張穰「はい。此度の戦いでは袁紹軍が曹操軍よりも前に出て城を落そうと奮闘するも、張遼及び呂布奉先や陳宮の指揮する虎牢関はびくともせず。袁紹軍はただただ兵を失うのみといった所です」

雪蓮「あら？華雄はどうしたのかしら？」

張穰「どうやら？水関の戦いの際に龍司様から受けた怪我が思ったより酷く、今は療養に」

「…やり過ぎたかな？」

張穰「いえ…常に華雄らしき叫び声が聞こえましたので…」

くそ～！～！とかまだ私はやれるぞー！～！～！などと言っていたらしい…

「……華雄は不死身なのか？手加減したとはいえ人の体の急所に当たるところを突いたのだが…」

一刀「そ、そうだったのか？」

「ああ…普通の人間なら丸一日は動けなくなるはずなんだがな」

明命「龍司様は本当に凄かったです！～！だって、あの華雄將軍の武器を叩き割ってしまったのですから！～！」

「「「……へ！？」」「」」

桃香や一刀は思わずそんな声を出してしまった

雪蓮「あらあら♪相変わらずの力ねえ」

冥琳「だが、どうして手加減などしたのだ？」

「ああ…それは」

一刀「…ちよっといいか？」

「？」

一刀「…敵将の武器叩き割ったって…マジで言ってるの？」

「？ ああ、そうだが？」

さも当然のことのように言っただけ

龍司、恐ろしい子…

冥琳「おほん！！…話が途切れたが続いてもいいか？ 龍司…どうしてお前は華雄に対して手加減をしたのだ？」

「…ふむ、あれほどの武を持った者ならば捕えてこちらに引き込むのも有りかとおもったというのもあるが…何よりも現在の洛陽の様子も知りたかったのだな。虎牢関を破っていない今はそういった所から情報を得ることも可能だしな」

雪蓮「…一つ目はどうかと思うけど…確かに二つ目は私達にとって重要なことね」

「…そもそもこの戦い、発起人が袁紹という時点でどう考えても都を支配下に置いている董卓に代わって自分が打って変りたいという魂胆があるように見えてしまうし…何よりもこの戦い以前の情報では洛陽の情勢は董卓が治めるようになってからは治安が良くなっていると言われていたんだ。だが、その董卓が十常侍を殺したという噂が流れてからは今の状況。明らかに後ろで何か企んでいる奴らが居る様な気がしないか？」

愛紗「…龍司様、それは確かな情報なんですか？」

「…張穰が調べてくれたものだからな」

星「ふむ…では董卓は唯政権争いに利用され、巻き込まれたただけだと言うのか？」

「…俺の予測だと、董卓が都を収めるようになってから十常侍が裏で動きにくくなってしまった。何故なら、董卓の政治は民に優しく

というものであり、それに対して十常侍は金や権力さえあれば民の生活などどうでもよいというものだったそう。だから、十常侍は恐らく董卓を殺そうとしたのだろう。だが、それは失敗に終わってしまった。だが、それを知った他の者がその状況を利用し、十常侍が董卓によって殺されたということを袁紹に伝えた。勿論、誇張ありでな。恐らくそれを伝えた奴は権力が欲しかったのだろうな」

一刀「：そんな、じゃあこの戦いは」

「：皆考えていることは同じということだ。漢王朝に力なき今、群雄割拠の時代の幕開けに備え、力を示すための戦い。これはその前哨戦ということだろう」

雪蓮「：龍司の言うとおりでしようね。でも、もうこの戦いは止めることは出来ないわね」

冥琳「そうだな。元々この反董卓連合は都を不条理に支配している董卓から解放するという名目で集った連合軍だ」

雛里「もし、先程の龍司さんの推測が正しかったとしても：今更間違いでしたでは収まりませんからね：」

「：酷い言い方かもしれないけど：これが政治というものでもあるんだよ」

……

「被害からすると：そろそろ相手はこちらの戦力を更に減らすために城から出てくる可能性もあるな：何せ、相手は華雄と呂奉先なのだからな」

雪蓮「だけど、今私達が介入すれば戦場が更に混乱するだけなのよね：」

「：（混乱：敵の突撃……袁術の陣……）あっ！！！！」

冥琳「な、なんだ」

「：賭けの部分が大きいけど：袁術の兵を減らす且つ虎牢関を落と

せるかもしれない策があった!!!」

思春「何!？」

明命「ほ、本当ですか!？」

一刀「…龍司、まさかと思うけど…（ゴニョゴニョ）…って言う策じゃないよね？」

「…お前何気に凄いな、一刀。その通りだ」

一刀「…マジですか」

雪蓮「何々!?? 早く教えてよ」

桃香「ご主人様も教えて下さいよ」

「…一刀、そっちへの説明は任せた」

一刀「…上手く説明できるかどうか分からんぞ?」

「…さっきの通りに伝えてくれれば大丈夫だ」

龍司が考え出した案は…まず雪蓮、龍司、冥琳の部隊が虎牢関に向かって攻める。だが、それはあくまで攻めるふりである。恐らく、敵はこちらに攻撃を仕掛けてくるだろう。敵が城から出てきたら、それを合図に一斉に後退させる。袁術の陣まで…

冥琳「成程な…無理やりにでも戦場に赴かせるということか…」

「元々今回の戦いで俺達が役者とするのなら袁術は脚本家のようなものだ。実際に戦場という部隊に参加しない役割であるというのであれば無理矢理にでも参加させてしまう。これが俺の考え出した策だ」

明命「ならば、我らはその間何をすれば…」

「…俺達が引きつけることが出来るのは恐らく呂布と陳宮、そして華雄…運が良ければ張遼も虎牢関外に引き寄せることが出来る…ならば、その間に虎牢関はどうなる?」

思春「…成程、がら空きになった虎牢関を我らの部隊と劉備の部隊で占領してしまうということか…」

「そう言うこと。流石は甘寧だね」

思春「……思春」

「え……」

思春「私の真名は思春だ。……今度からそう言え」

「……あはは、少しは認めてもらえたってことかい？」

思春「……ふん」

百合「では、その間の部隊を率いるのは？」

「……明命が部隊を率いてもらえるか？」

明命「ええ！？わ、私ですか！？でもどうして……」

「……思春と百合の仲が未だに良くないから……」

明命「あ……」

雪蓮「あはは♪確かにそう考えると明命しかいないわね♪」

思春「……仲が良くないわけではありません」

百合「そうです、ただ馬が合わないだけです」

「まあ喧嘩するほど仲がいいって言うし……」

思春＆百合「「仲がいいわけがないだろう（ないでしょう）！！！！」

」

「……まあいいや、とにかく明命。頑張って」

明命「は、はい！！頑張ります！！！！」

龍司が説明を終えたと同時に、一刀の方も説明を終えたようだ

朱里「……本当に龍司様は凄い策を考えるんですね」

雛里「（コクツコクツ）……さ、参考になります」

星「いやはや……しかしよいので？我らが虎牢関攻めに加わっても？」

「構わないだろう……こっちの目的はあくまでも袁術なのだからな」

愛紗「では、お言葉に甘えさせてもらう」

雪蓮「じゃあ、今から一刻後に出陣ということでもいいかしら？」

冥琳「それが妥当だろう」

朱里「ではこちらに進軍の準備を進めておきますね」

桃香「じゃあまた後で、雪蓮さん」

雪蓮「ええ、桃香。そちらも頑張ってね」

桃香達は出陣の準備のため、自分達の陣へと戻っていった

冥琳「：しかし、この戦いでは劉備達に手柄を与える様なことになってしまふな。同盟を結んでいるとはいえ：大抵の手柄はあちらの物になってしまふのは：少々痛いな」

「それについても対策は打っているよ」

明命「え、そうなのですか？」

「勝手に決めて悪いとは思ったんだけどね、でもこれは迅速な行動が命だから」

雪蓮「教えてくれる？」

「各地に民に扮した俺の部下数名に此度の戦いで最も活躍したのは呉の孫策軍であるということを広めさせているだけだよ。こうすることで孫策伯符の名をこの大陸に広め、呉軍の屈強さを民に広めさせているんだよ。もし玉璽を手に入れることができれば、その後にこれと同じ方法を使うつもりだけどね」

冥琳「成程：良い手だ」

「：まあこれは俺の知識じゃなくて、俺の世界の先人たちの知恵なんだけだね。俺はそれが今回は役に立つと思って利用させてもらった。ただそれだけだよ」

雪蓮「でも、今回はその知識を龍司が持っていたから実用出来たんでしょ？ だったら、龍司だってその先人と同じくらいすごいんじゃないのかな？」

「はは：まさか。それは買いかぶり過ぎだよ」

明命「龍司様は色々と自分の力を低く見過ぎではないでしょうか？」
雪蓮「あゝ、それ私も思った」

「：そんなことは」

百合「謙遜のしすぎです」

冥琳「ああ、お前はもっと自分に自信を持ってもいいと思うぞ。そういう部分ではお前は雪蓮を見習うべきだ」

「……努力しよう」

龍司は雪蓮、冥琳の部隊と共に城攻めを開始した

当初こそ、味方の部隊は突然の攻撃参加によって混乱し、戦局は更に激化した

暫くした後、深紅の呂、陳、そして華雄の部隊の旗が見えたため、それを機に雪蓮、龍司、冥琳の部隊は後退した

だが、その三部隊だけでなく、魏の旗

つまり華琳の部隊も呉の部隊に合わせるように後退していったのだ

「…流石は華琳だな。こちらの策を完全に読んでくれている」

雪蓮「うわー、この先あの子と当たるのが怖いわね」

冥琳「確かに…あれだけの洞察力は恐ろしいものだ。だが、今の我らの目的はあくまで袁術だ」

雪蓮「そうね…じゃあ、私達はこれより袁紹軍を囲にして、さらに後退…!! 袁術軍のいる陣まで退くわよ!!」

「皆!! これが釣りであることを悟られぬように後退せよ!! ただし、誰一人死ぬことは我が許さん!! いいな!! 生き残ることを前提として戦え!!」

おおおお~~~~~!!!!!!

龍司、雪蓮、冥琳、華琳の軍は袁紹軍を殿に（無理矢理）後退を始め、袁術のいる陣まで引きさがつた

↓明命の部隊&桃香軍↓

伝令「伝令！！我が主の部隊は作戦に成功し、今袁術軍のいる本陣に敵を引きつけ今なお呂布、陳宮、華雄率いる部隊と交戦中！！」

桃香「張遼さんは！？」

伝令「ハッ！！先程、虎牢関を出て出陣した模様！！」

明命「ご苦勞様です!! ではこれより虎牢関を制圧します!! 皆、私の旗に続いてください!!」

星「こちらにも呉軍の続き、虎牢関へ突撃を開始する!! 皆、我に続
け~~~~~!!!!」

oooooooooooo!!!

明命、百合、思春、そして桃香の軍が一斉に虎牢関へと向かった

伝令「張遼様！！一大事です！！！！」

張遼「何や!!!!今あの馬鹿達を連れ戻さなあかんのやで!？」

伝令「そ、それが……凡そ4万の部隊が虎牢関へ……！」

張遼「な、なんやて!?!どこの部隊や!?!」

伝令「旗印は周、甘、太、劉、関、張、趙、諸葛、鳳、曹、夏侯、荀の旗が確認できました。それらが一斉に虎牢関へ向かっております！」

張遼「しもた……罨やったんや……伝令……この事を急いで前線に居る華雄、呂布、陳宮に伝え……」

伝令「はっ!!!」

張遼「うちらは急いで虎牢関に戻るんや……！今虎牢関が落ちたら
うちらは洛陽に戻るんようになる……！！」

陳宮「ふん！！！！呂布殿にかかれればこのような弱小部隊、どうい
うことはないのですよ」

呂布「……変」

陳宮「はい？」

呂布「…最初に退いた部隊…」

陳宮「…そう言えば…戦場に入って間もなく退いていったような…」
伝令「伝令！！！！虎牢関が呉と平原の部隊に攻められております！
！！」

陳宮「な、なんですとー！！！！！！！！？」

呂布「…罨」

華雄「な、何だ！？どうしたのだ！？」

陳宮「どうしたもこうしたもないのですよ！！！！急いで虎牢関に戻
らないと二度と洛陽に戻れません！！！！」

華雄「だ、だが…」

呂布「…戻る」

華雄「…分かった」

呂布、華雄、陳宮の部隊は急いで轉身しようとしたのだが…

「…行かせんよ」

いつの間に回り込んだのか…目の前には龍司の部隊が…

その背後には雪蓮、冥琳の部隊が…

その近くを魏の風、沙和、真桜の部隊が取り囲む形を作り始めていた

「…後少しすれば君達の部隊を包囲する用意が終わる。大人しく降
伏するのであれば武器を捨てよ。…反抗するのであれば…少し、痛
い目にあって貰おうか…」

殺気を体中から溢れさせ、相手を威圧する龍司

陳宮「ひい…りよ、呂布殿くく」

呂布「……下がる」

華雄「ま、待て呂布！！こいつは私が…」

呂布「…（フルフル）」

華雄「わ、私では勝てないということなのか！？」

呂布「…（コクン）…だから、陳宮を連れて先に…」

陳宮「りよ、呂布殿！？」

華雄「わ、分かった…だがすぐに追いつくのだぞ！？」

呂布「…（コクン）」

陳宮「ち、陳宮は呂布殿と一緒に…」

華雄「陳宮！！今は呂布の言葉に従え！！今、お前がいると呂布の邪魔になる！！」

陳宮「う…りよ、呂布殿！！絶対に…絶対に戻ってきてくだされ！！！」

華雄は陳宮を呂布の馬に乗せ…

包囲が完成していない、薄い個所を突破していった

「……………」@武器を構える

呂布「……強い」@武器を構える

「それは光栄だ…天下に名高い呂布奉先にそのような言葉を貰えるとはな」

呂布「……だけど…負けない」

「ふふふ…腕が鳴るな…貴公相手なら…手加減は無用ということだな」

龍司はそう言う…持っていた棍を仕舞い…

背中にある刀の柄に…手を掛けた

すらっと抜かれた刀は…陽の光に当てられ…怪しく不気味に光り輝いていた

呂布「…危ない」

「へえ…この刀が危険な代物って言うことが分かるのか…って分かるのではなく、ただ感じ取ったということか…」

呂布「…お前…」

「俺は姓を城崎、字を龍司という。呂奉先、この刀を抜いたのはお前がこの大陸初めての者だ。我が武、とくと味わってもらおうか！！！」

ヒュッ！！！！

ガキンッ…キンキンッ！！！！

呂布「ッ！！！！」

「ッ…ッ…！！…ってえ！！…流石に力も強いのだな…腕が痺れる」

呂布「…お前も…強い…でも…負けない…」

「ふっ…それは嬉しいことだ！！…行くぞ！！！！」

ガキッ！！ガキッ！！キィ……ン！！！！

それから少しの間…呂布と龍司は互いに剣を交えた…

呂布「…ふう…ふう…」

「……………」

呂布の息が上がり始めた時…

「…呂布よ…君には…守りたいものはあるのか？」

呂布「……（コクン）」

「ふむ…此度の打ち合い…俺はこれで満足だ…それに君はこんなところで死ぬべき器ではないな…」

呂布「？ …何を言っている…」

「…行け…」

龍司は刀を鞘に仕舞った

呂布「…どういうつもり…」

「この通りの意味だ。君にはまだ守る物があるのだろうか？ なら…それを守るために行け。ただし、この包囲を突破出来たらの話だがな…」

呂布「…馬」

「…ふっ…なら一時、この馬を貸すということにしよう」

呂布「…お前…」

「？」

呂布「変な奴」

「…それは心外だな…」

呂布「…でも…ありがとう…」

「…敵に礼は言うな」

呂布「…次は絶対に勝つ」

「…楽しみにしているぞ」

呂布は龍司が乗っていた馬に飛び乗ると、包囲を突破しに向かった

「…ふう…疲れたよ」

龍司はその場に座り込み…休息を取ることにした
やはり天下の武将、呂布奉先との一騎打ちをしたため、体への疲れはいつもより大きかったのだ

雪蓮「龍司!!!!!!」

「…ん、雪蓮か？」

雪蓮「大丈夫なの！？怪我はしてない！？」

「ちょ…大丈夫だから。ちょっと疲れただけだよ」

雪蓮「そう…良かった…龍司ったらいきなり呂布と一騎打ちしたいから手を出さないでくれて言うんだもの」

「だが、結局は逃がしちゃったな…悪い」

雪蓮「龍司が無事ならそれでいいのよ」

その後…呂布が単騎で包囲を突破したという報告を受けた龍司は雪蓮、冥琳の部隊と合流し…虎牢関へと向かった

伝令「伝令!!!!虎牢関、劉備率いる部隊が落としました故!!!!」

「ん…ありがとう」

伝令によると…

当初こそ、城に居た賈馱の軍勢や急いで戻ってきた張遼の軍の奮闘のせいで制圧は遅れたのだが、一刀・桃香を筆頭とした愛紗、鈴々、星の部隊と明命、思春、百合の軍が怒濤の勢いで攻め続け、後に張遼の部隊を華琳が釘づけにしてくれたので…結果、虎牢関は落ちたのだった

虎牢関の戦いの結果は…

袁紹、袁術と共に大打撃を受け、暫くは立ち直ることのできない状態になった

唯一、無事だったのは…公孫賛の部隊だった

公孫賛「あれか！？私は影が薄いから助かったって言うのか！？」
…落ちはこんなもんです…

戦いの終結

反董卓連合はいよいよ洛陽の前まで到着した

先鋒は孫策軍と劉備、曹操軍

中軍は公孫賛軍

その後ろには袁紹、袁術を始めとした損害の激しい部隊が配置された

雪蓮「いよいよここまで来たわね」

「そうだね…今は張穰と明命に密偵に行って貰ってるから…その情報待ちかね」

そんな話をしているうちに張穰と明命が戻ってきた

張穰「報告いたします！！洛陽にて董卓軍の姿は見当たりません！！」

冥琳「見当たらないとは…どういうことだ？」

明命「えーっと…我らも当初は目を疑ったのですが…董卓軍は四散し…城下町の民は普段と変わらぬ生活をしておりました」

「へえ…董卓はやっぱりいい国主だったんだね」

思春「？…お前には董卓の意図が分かるのか？」

「よく考えてみてよ。確かに虎牢関、？水関と共に落城はしたけど洛陽の城は守ることは出来るかもしれない。でも、敵の城攻めにあった場合は兵士以外にも危害が及ぶかもしれない。それを考えて董卓は軍を配置させないようにしたんだよ」

冥琳「そう言えば…報告では呂布は洛陽には戻っていないと聞いているな…」

張穰「陳宮、華雄の部隊も分散したとか…」

明命「あ、でも張遼の部隊は曹操率いる部隊が捕えたと聞いております」

雪蓮「確かに…そこまで将が居なくなった状態だと…この洛陽は守りきれないわね」

「…念のため、悪いけど華琳と桃香の部隊に洛陽に攻め込んでもらおう。勿論一番乗りを競ってもらってね」

冥琳「おや、お前も人が悪いな」

「華琳と桃香の部隊が洛陽に攻めると同時に、俺、張穰、明命、思春の四人で場内に忍び込む」

思春「了解した。目的は地図と台帳でいいのだったな」

「可能であるのなら玉璽もね」

明命「では直ぐに準備いたします」

雪蓮「私は二つの部隊に文を送っておくわ」

「よろしく頼むよ」

数刻した後、桃香、華琳の部隊が洛陽攻めを開始した
と言っても実際に武器を使って攻め込むのではなく門に居るものを説得して城門を開かせることから始まったのだが…

龍司達四人はその隙に城壁をよじ登り…楽々と洛陽城内へと侵入した

「…ここからは二人一組になろう…俺は明命と…思春は張穰と組んでくれ。地図は渡してあるだろ？」

思春「了解した。ではいくぞ」

張穰「はっ!!」

「じゃあ行こうか、明命」

明命「はい!!」

龍司と明命は場内に居るものに見つからぬように進み…

「……こつちだな…」

明命「はい!!」

進み…

「…ふむ…」

明命「龍司様？あの…宝物庫は反対方向では？」

進んで…

「ここだな」

明命「？ここは…」

「軍師、賈馱の部屋のようだな………つとあったぞ」

明命「ええ……！？ど、どうしてこのような場所に!？」

「宝物庫なんて分かりやすい場所に置くわけがないと思ったからな。
となれば董卓軍一番の軍師と謳われる賈馱の部屋になら置いてある
と思ったのだが…まさか本当にあるとはな…」

明命「でも龍司様…どうしてここが賈馱の部屋だと？」

「ああ、そう言えば明命は地図を細かく見ていなかったね、はい」

龍司は持っていた洛陽内部の地図を明命に渡した

当初こそ何かと思っていたっ明命もその地図を見てからは納得のい
った顔をした

何故なら…その地図には誰の部屋がどこにあって距離から高さまで
細かく記されていた

明命「…これどうしたんですか？」

「洛陽に居る腐食した役人を買収してやらせた」

明命「…うわあ」

「こういった連中の使いどころって言ったらかういことしかないしね」

明命「それは…そうかもしれませんね」

「ん…じゃあ次は…明命、先にこの場所に向かっていてくれないかな？その後、雪蓮達にこの場所で何か見つけたら連絡を入れておいてくれ」

明命「はい！！でも…龍司様はどうなさるのですか？」

「俺は少し調べたいことがあるから…」

明命「ハッ！！」

明命は先程まで通ってきたルートを進んでいった

龍司はというと…

「…気配…どうやら一人のようだな…ここは…董卓の部屋か…」
バンッ！！！！

「…ひっ！！」

「……」

「…だ、誰ですか…」

「…孫策軍に属する将の一人だ」

「…わ、私に…何か御用ですか？」

「いや何…特に用というものはないのですが…董卓…」

董卓「ッ…」

「…それにしても…噂で聞いたものとはまるで異なるな…」

董卓「……」

「…ふむ、やはり俺の予測通り、今回の戦いの原因は董卓にはないのかもしれない」

董卓「…私を董卓と知って…貴方は…私をどうするつもりですか…」
「どうもしないけど？」

董卓「…………え…」

「まあ、ただここから逃げ出せるように手立てしてあげるかな」

董卓「え、ええ…ええ?」

「え…つと…何か書くものってある?」

董卓「え、えつと…その戸棚に…」

「ん…じゃあサラサラつと♪」

龍司は一筆…何かを書き始めた

「…ん、これでいいかな♪じゃあ、はい♪」

董卓「…これは…」

「君達がこれから洛陽外に出るのは正直言って無理だ。そのままの状態だとな。本来なら俺が保護してあげたいって言いたいんだけど…ちよつとそれは厳しいんだよ。だから、俺の友のいる部隊に身を寄せてみないか?」

董卓「え、でも…」

「とりあえず、今場内にいるだろう劉備軍の誰かに遭ったらこの文を渡してくれ。そうすれば桃香や一刀たちはきつと君達を保護してくれるから」

董卓「……」

「んじゃ、気を付けてね」

董卓「あ、あの…」

「ん?」

董卓「お、お名前は…」

「ああ、そうだね。俺は姓を城崎、字を龍司。真名に該当する名前だから城崎とも龍司とも呼んでくれ♪」

董卓「わ、私は…性を董、名を卓、字を仲穎。真名を月と申します」

「月か…可愛い名だね♪」

月「へう…あ、ありがとうございます／＼／」

「んじゃ、また機会があれば会おうね♪」

龍司はその場から去っていった

龍司は先程、明命に指示してあった場所へと向かった
その場に着くと、そこには既に明命、雪蓮、冥琳の三人がいた

手には黄金に輝く印：
玉璽が握られていた

「ん：どうやら見つけたようだね」
雪蓮「：龍司、どうしてこの場所にあるって：」

「天の歴史の中では孫堅が見つけたことになっていたんだけど：董卓連合軍に所属していた際に井戸の中から玉璽を見つけたという風に記されていたからね。だからこの世界でもそうなんじゃないかなって思ってたね」

冥琳「何であれ：これはこれから役に立つな。明命が持ってきてくれた台帳に：地図、それからこの玉璽：我らが呉を取り戻すには十分なもの揃ったな」

雪蓮「そうね：後は時期を待つだけね」

「方針が決まったのはいいが：町が少し荒れているな：」
龍司が指し示したのは燃えている家屋や怪我をしている住民のことだった

「確か殆ど戦闘は行っていないはずなんだろう？それなのにどうして：」

冥琳「どうやらドサクサに紛れて賊徒どもが暴れたらしい」
雪蓮「チッ：まだそんな輩がいたのね：」

「……ふう、いずれそいつらには俺達が鉄槌を喰らわせてやる…」
雪蓮「とりあえずここの長に会って、炊き出しや家屋の修理の協力を得ましょう」

「炊き出しは俺と百合、明命の方でやっておく」

雪蓮「なら私と冥琳、思春は家屋の修理を手配するわね」
戦闘を終了した部隊は、まず第一に民の不安の解消、そして賊徒どもによって破壊された家屋の修理と腹をすかしている人たちのために食事を準備することを優先した

雪蓮達以外にも桃香と華琳の部隊も同じようなことを始めていた

「お、桃香や華琳も炊き出しと家屋の修理を手配してるのか」
百合「龍司様、手を止めないでください！！あ、はい次の方」

「つと悪いな…よつと。はい出来あがったぞ」

明命「それにしても…これは何という料理なのですか？」

「カレーライスって言うものなんだ。天の世界の料理では家庭的な料理の一種でな、つい最近ルーを作ったからな」

明命「かれえらいす？ですか…でも皆さんにはとても好評ですね」

「元々は多く作って大勢で食べるのが主流だからな。皆に喜んでもらえて良かったよ」

雪蓮「もふもふ…確かにおいしいわね」

「って雪蓮……！！何やってんの……！！」

雪蓮「手続きや仕事は大体終わったし、龍司のところに行こうって思ったら凄く良い匂いがして…つい…」

「つい、じゃな……い……い……」

雪蓮「え、でも私以外にも食べてる人、いるわよ？」

「へっ!？」

そう言われて龍司は始めて気が付いた

洛陽の民以外にも龍司お手製のカレーを食べている人たちがいた

華琳「へえ…龍司はこんな珍しいものまで作れるのね…はむ…美味しいわ…」

春蘭「ふむ…これは…いい…がつつがつ…」

秋蘭「確かに…今までに食べたことの無い味だ」

一刀「…懐かしい…美味しいよこれ…」

桃香「うーん…ちよつと辛いな」

愛紗「でもこれはとても美味しいですね」

鈴々「がつつがつがつ」

「って…お前らもですか…ハア…仕方ないな…もっと作るしかないな…」

百合「あの…龍司様…」

「ん？」

明命「出来れば…その…私達も…」

「………ハア、分かった。明命と百合も食べてきなよ」

明命「はい！！ありがとうございます！！！」

「…ルーの素材…また手に入れなおさないと…」

新しいカレーを作ろうとした時、龍司はふと目に入った人物がいた

月「あ、はい。皆さん、こちらにもまだありますから」

「………「ちよ、月！！こっちも足りないって！！」

月「あ、詠ちゃん。もう少し待ってもらって」

詠「わ、分かった！！って、ほらそこ！！何やってるのよ！！」

先程、場内であった董卓…と…もう一人は誰だ？

…まあいいか

どうやら朱里や雛里と一緒にいるようだし…

一刀も彼女達を受け入れてくれたようなだ…

本当に…良かった

星「なあ龍司殿、皆がお主の料理をまだ食べたいと申しているのだが？」

「ああ…もう少しで出来るからって…また増えてないか!？」

真桜「仕方ないんちゃうか？龍司はんのこの料理、めっちゃ美味いんやから」

凧「…申し訳ありません…ですが…この味は反則です」

沙和「確かに…、これは美味し過ぎるの♪」

「…はあ…もう少し待ってろ……って思春に冥琳まで待ってるの!？」

思春「な、何だ…私が食べては駄目だと言うのか!？」

「い、いや…そう言うわけじゃないんだけど…」

冥琳「ふふふ…まあ楽しみにさせてもらうぞ、龍司」

「ハア…本当にしょうがないな…よし!!材料が尽きるまで今日はこれを作りまくってやる!!!」

それから龍司は本当に材料が尽きるまでカレーを作り続けた

「…筋肉痛が…ある意味戦よりも厳しい戦いだったよ…」

って言うか本当に誰か手伝って欲しかったよ!!

呉での日常

居城に戻った雪蓮達は暫くの間、袁術の言うことに従いながら着々とその力を強くしていった

龍司の流した噂が人を呼び：質の高い軍の訓練によって強兵が生まれ：文官は龍司が渡した教典によって更なる智を得て行った

それと同時に、内政を良くしていき、呉の孫策は江東の小霸王の名を民の間に知れ渡ることとなった

「…ふう、幾ら仕事にしても…楽にはならんな…って言うか俺の仕事多すぎやしないか…」

「…？　「りゅーうーじゅー」」

「…ふう、そんなところで何やってるんだ、雪蓮」

雪蓮「何ってお酒飲んでるのよ。龍司も飲む？」

「…俺はまだ仕事があるんだよ…それよりも雪蓮だってまだ仕事があつたはずじゃ…」

雪蓮「えへへ、逃げだして来ちゃった♪」

「…ってことはまた冥琳に仕事押し付けたんだな…しかもその酒、良く見れば祭が持っていたものに似ているんだが…」

雪蓮「飲みたいの？」

「飲まんよ。全く…雪蓮はどうしてこうも酒が好きでサボりも好きなかね…」

雪蓮「ぶー、そんなことないわよ。ただ、私は人よりも少しお酒が好きなだけよ」

「…好きだけだという人間がぶっ倒れるまで飲み続けるわけないだろ」

雪蓮「んくっ…プハア♪やっぱり美味しいわね♪あ、ところでさ龍司が以前持ってたお酒あったじゃない？」

「…あゝあれね。でもあれは全部祭にあげちゃってもうないけど…」
雪蓮「そうじゃなくて…龍司の世界にもお酒ってあったんでしょ？」

「まあ…そうだね…」

雪蓮「じゃあさ♪龍司ってそのお酒って作ること…出来る!？」

「…作ったことはないけど…作り方は知ってるから…お酒造ってる人に頼めば…何とかなるかもしれないけど…」

雪蓮「じゃあ直ぐにでも…」

「駄目」

雪蓮「Σ えー！!? どうして!？」

「だって、それは雪蓮だけにしか得はないし…俺だって今日までに終わらせないといけない職務あるんだから」

雪蓮「ぶう…」

「…ハア、なら雪蓮も自分の職務をきっちり終わらせておくこと。直ぐには出来ないから少し待つようだけど…それでもいい？」

雪蓮「Σ うん♪そのお酒が飲めるのなら何でもする!!」

「…ならさっさと仕事に戻ることに。じゃあ俺は行くから」

雪蓮「楽しみにしてるね…♪」

こうして龍司は雪蓮のためにお酒造りの手配をするようになった

「…はあうろ覚えだけど…どうにかなるかな…」

それから龍司が進言したお酒が作られてから…

その酒は大陸全土に知れ渡り…たちまち人気商品の最先端を担ったことは…

また先の未来のこと…

後日…

冥琳「なあ龍司…」

「…何かな、冥琳」

冥琳「…お前の考案した新酒…好評らしいぞ」

「……そう」

冥琳「それと同時に我らが君主が…」

「…それ以上言わないで…原因の俺がいたたまれなくなります…」

冥琳「…いや、お前が直接の原因ではないし…あの新酒は経済発展のために役立ってはいるから…」

「……でもそれと同時に酒好きの人たちが…」

冥琳「……ハア…頭が痛いよ」

「…同感だ…」

「ふう…久々の休暇だな…」

冥琳の配慮で今日一日は休みとなった龍司

今頃、雪蓮は冥琳の監視のもとで仕事をしているころだろう…

「ふふ…あの雪蓮の顔は思い出すだけで笑えてしまうな…」

龍司は町に下り、買い物から始めることにした

饅頭屋「お、御遣いの旦那!! 買い物ですかい!？」

「はは、違うよ。今日は仕事が進みになったから町の様子をチラッと見に来たんだよ」

饅頭屋「おお、そうなんですかい!! お、そう言えば饅頭が出来たてなんだが」

「そうだね…じゃあ……?」

ふと城壁の見張り台に見覚えのある顔が見えた

「…？あれって…明命？」

明命「……」@場外の外を見ている

「…ふむ…オヤジ、桃饅と餡饅を二つずつ」

饅頭屋「へい毎度！！いや、旦那のお陰でうちは繁盛して嬉しい限りだよ」

「そんな、俺はただ新しいものを作ったら売れるんじゃないかと思
って考案したものを渡したただだよ」

饅頭屋「それが結果に繋がったんだ！！嬉しい限りだよ！！お、半
額にさせてもらうぜ」

「あはは、ありがと」

龍司は買ったばかりのものを持ち、明命のいる城壁に向かった

「や、明命」

明命「あ、これは龍司様。どうかなされたのですか？」

「いや、今日は仕事がないから町をフラフラとしていたら明命が見
えたからね」

明命「あ、そうなのですか」

「明命はこんなところで何をやっているの？」

明命「見張りです！！」

「…でも今日何処か攻めて来るって言う連絡、あったっけ？」

明命「いえ！！特には！！」

「…それならここを見張ることはないんじゃないかな？」

明命「ですがこういったことは日々の積み重ねが大事であると思っ
ています！！（ぐうぐう）」

「…そ、そうなの？（…何の音だ？）」

明命「はい！！！！（ぐうぐうぐう）」@お腹の虫の音が鳴っています
「み、明命？」

明命「はい？（ぐうぐうぐうぐう）」@気付いていない

「…お昼食べた？」

明命「え？」

「…お腹の虫」

明命「…………（ぐうぐうぐう）あ！！」

「…気付かないほどの集中力！？」

明命「あうう…」

「ふう、ほら、これでも食べなよ」

明命「え、で、ですが…」

「気にしなくてもいいよ。これは元々明命に差し入れようと思って買った分だから」

明命「あ、はい！！ありがとうございます！！」

先程買ったばかりの桃饅と餡饅を頬張ることにし、二人は暫くの間、食事を楽しんだ

明命「もふもふ♪美味しいです♪」

「ふむ…この餡饅、少しずつ俺の世界の味に近づいてきたかな？…でも俺としてはもう少し甘さを抑えてもいいかもしれないな」

明命「そうですか？私はこれ位の甘さの方がいいと思いますか？」

「はは、まあそこは個人差ってことだね」

明命「そうですね♪」

一節置き…

「なあ明命：今回のように、見張りをして他国の侵攻があるかどうかというのを見るということは大事だけど：お腹がすくのには気付かない位に集中してまでする必要はないと思うよ？」

明命「ですが敵がいつ我が国に攻めてくるかなど分からないのですよ？」

「確かにそうだけど、もし敵が攻めてきたときに明命がお腹がすいて本来の力が出ないなんてことになったらどうするの？」

明命「その時はもっと頑張るのですよ！！」

「何という脳筋根性論……ってそんなことは根拠にならないから」

明命「しかし…」

「しかしデモもないよ。それに：明命だって俺の大切な人の一人なんだから：怪我や無茶は出来るだけして欲しくないんだよ」

明命「え…」

「分かった？」

明命「は、はい！！」

「ふふ、分かったならよろしい♪あ、じゃあ俺はそろそろいくね」

明命「あ、はい。あの：御馳走になりました！！」

「気にしなくてもいいのに。じゃあまたね」

やっぱり明命ってまじめ過ぎるよね…

少し息抜きしてもいいかと思うけど…

その後、龍司は町を見回った後城に戻ったのだが…

冥琳「あ、龍司！！雪蓮見なかった！？」

「……逃げた？」

冥琳「…ええ」

「…ハア、俺が残りの仕事手伝うよ…」

冥琳「…スマン」

「ふう…相変わらず仕事はやっててもやっても変わることはないな…」
龍司は今現在、穏や冥琳の補佐として仕事をこなしているのだが…

「…暇があればあれば…將軍たちと新兵の訓練…加えて警邏って…俺の仕事の量って他の人よりも遥かに多いように思えるのだが…
…ハア…」

正直、パソコンで仕事をしていたころが懐かしく思えてしまう
これだけの情報を紙に纏める仕事はかなり久々なのだから…

文明の発達は本当に凄く有り難いことなのだということが心から理解出来るよ

ん…誰かの心配が…

明命「…準備は出来ました」

思春「…行くぞ」

龍司がふと眼をやった先には…互いに武具を持ち向き合っている
命と思春

それを見ている百合…

龍司も三人に気付かれぬようにその場に近づいて行った

明命「……」
思春「……………」

どうやら二人とも動く様子はないようだ
互いに隙を見つけあい…それが出来た時に攻撃をする…
そう言った戦いをしようとしているのだろうか…

にゃあゝゝゝ

明命「……あ」
思春「……ふん!!」
明命「Σ…クツ!!」

先手を取られ、どんどん追い詰められていく明命
そして…

キーン!! (明命の剣が吹き飛んだ)

思春「…私の勝ちだな」
明命「…あう」

百合「はい、そこまで」
明命「負けてしまいました」
思春「守りの技術は上がってはいるが…どうにかならんのか? その癖のようなものは…戦場でこのようなことがあっては困るのだが?」
明命「…あう」

パチパチ…

「いやあ、二人ともやっぱり強いね」

思春「ん、龍司か：いつから見えていたのだ」

「二人が見つめあって隙を探り始めたころだね。それにしても：二人とも凄いね。あそこまで隙のない状態に持っていけるのは」

思春「それが我らの戦い方だ。我らは幾度なく打ち合い、互いの武を示す戦い方よりも最初の一手、一撃必殺を目的としているからな」
明命「先鋒で祭様や雪蓮様達のように戦うのではなく、静かに敵に忍び寄り気付かれぬように命を絶つ。それが私達の戦い方です」

「それは理解できるな。俺の本質もそのような戦い方だからな」

百合「え、でも龍司様は今までずっと前線で：」

「それでもできるが：実際に一番得意とするのはやはり思春や明命のような戦い方なんだ」

思春「ほう：ならば今から手合わせ願えるか？」

「悪い：直ぐに終わらせないといけないことが山積みなんだ：」

思春「：前々から思っていたのだが：何故貴様はそんなに仕事をしているのだ？ 実質、お前の仕事は冥琳様と穂の補佐なのだろう？」

「：そうなんだけど：：何だかね：俺が気付かないうちに：：ほんと仕事が増えていってね：今では机が埋まるくらいの仕事をこなさなきゃならない状況になってね：」

明命「ち、因みに聞きたいのですが：龍司様は：普段どのくらいの仕事をなさっているのですか？」

「：日によってまちまちだけど：基本的に俺は入ってきた情報を纏め、それを冥琳の元に送り、その後はひたすら竹簡にまとまった報告を読み上げて：問題がなければそれはそのままにして間違いがあれば責任者を呼んで相談しあって：その仕事が終わったら警邏に行つて：：馬の世話と武具を整備した後には：新兵達の訓練を覗いて：：こんな感じで夕方になら全部終わらせてるって感じかな：」

思春&百合&明命「「：：：：：」」

「：：どうかしたの？」

思春「：Σ い、いや：私たち以上のことをやっているのにな：そんなに仕事をして：何時か倒れるぞ：」

「大丈夫、倒れない程度にやってるし：それに：今は一番大事な時だしね。俺に出来ることは全部やっておきたいから」

百合「龍司様：ですが…」

「心配しなくても適度の休みは貰ってるよ」

思春「休みを貰っているのは我らとて理解はしている：だが…」

「気にしない気にしない♪俺がやりたいからやってることなんだから♪」

百合「それで：直ぐにやらなくてはならない仕事とは一体何ですか？」

「ああ、専売制度の確立をするか否かって言うことだよ」

思春「専売：制度？」

「一部の商人のみに特定の品を売ることのできる権利を与える許可ことだよ。つまりその商人達にしか許可された品を売ることができなくなるってこと。その代わり、国には一定の税と許可料を納めてもらうってわけ」

明命「それを許可すると：結果としてどうなるのですか？」

「そうだね：一概には言えないけど：代表的な結果としてまず国の財政が良くなることかな。後、その専売に該当する商品が手に入り易くなるってところかな」

百合「その専売する品は？」

「：まずは塩と：砂糖などといった調味料だね」

思春「成程な：それならば直ぐに許可は下りると思うのだが…」

「こっちはね：問題はもう一つの案の方なんだよ…」

明命「もう一つの：案？」

「新聞制って言う名前を付けたんだけどね：その町や外の情報を大きめの竹簡に書き留め、民に売るというものなんだけど：これは正直、今のこの世には不向きなものだなって思ってたね…」

思春「そのようなものが天の世界にはあったのか？」

「うん、毎日様々な地域で起こった事件や経済状況、天気予測や政

治についてのことなんか書かれてたんだよ」

百合「しかし…それは自国の情報をむやみに流す行為に繋がるのでは？」

「うん…そのことがあるから…この制度が確立するのは多分無理だろうね」

思春「しかし…面白くはあるな」

「うん、だからこの案は冥琳と相談して、すべてが終わったその後に確立したらどうかって思うんだよ」

明命「そうですね…そのために私達は出来るだけ早く戦いを終わらせなければなりませんね」

「ふふ、そうだね。…ところで気にはなってたんだけど…さっきの打ち合いの時、どうして明命は集中を切らしたの？」

明命「そ、それは…」

思春「あれだ」

思春が指差した方には…

「ニャア〜♪」

一匹の猫

明命「はうあ〜♪」

うお、明命の顔がものすごく崩れた

「…そう言えば明命って猫好きなんだっけ…（最近忙しくて忘れてた）」

百合「そう言う龍司様は猫が苦手なんですよね？」

「…ん、まあそうだな…昔のちょっとしたトラウマが原因でな」

思春「とらうま？何だそれは」

「トラウマってのはね…又の名を精神的外傷。恐怖とか異常経験などによって精神に異常をきたす病気の一種だよ」

百合「そ、それでは龍司様はネコに何をされたんですか？」

「…………昔、俺が小さいころ、およそ100匹はいたであろうネコの集団に襲われてな…体中に引っ掻き傷や噛まれた跡が付いてな…それ以来猫を見るだけでも駄目になってしまった…今は少し改善されつつあるが…未だに触れることすらかなわん…」

思春「…幼いころなのだから…その恐怖は並ではなかったのか？」

「…想像してみてください…3歳の子供が大量の…しかも追いかけて来ながら牙をむき出しにし、爪を立てて追いかけてくる猫を……しかも引っ掻かれた跡が化膿して大変な目にあっただ…」

思春「…スマン」

百合「龍司様…でもどうしてそんなことに…」

「知らんよ。俺は何も手を出していないのにいきなり襲いかかってきたんだから」

思春「しかし何の理由もなしに猫が襲ってくるとは思えないのだが…」

「うん…だから余計に怖く感じるんだよ」

三人で話している間…明命は声を掛けられるまで猫をもふりつづけていた…

明命「…本当にスイマセン／＼」

「気にしなくてもいいよ。誰にでも夢中になることってあるしね」

思春「…所で仕事に行かなくてもいいのか？」

「あゝ…!!? ヤバい!! あ、じゃあね…!!」

そう言い残し、龍司はその場から走り去っていった

思春「…全く、慌ただしいやつだな」

百合「でもふだんから龍司様がこうやって頑張ってくれているから

こそ、私達は安心していただけるのかもしれないね」

明命「…今度龍司様がお暇な時、一緒にお猫様をもふりに誘ってみましょう♪」

思春&百合「それはやめてやれ（やめてあげてください）」

呉での日常（後書き）

とりあえず今日の更新はここまでになります
今後は多分一ヶ月後くらいになるでしょうね
こっちは本当に気まぐれでしか書かないので

呉軍独立戦

龍司達は反董卓連合の後、着々と成果を出しつつあった

龍司の策である風評によって、多くの有志が集まりそれを取り込み強化していく

また、袁術からの出陣要請を受け盗賊やら海賊やらの討伐に行く際に龍司達は必ず賊となった理由を聞いていた

賊の多くは元々武器を持たぬ民からなった者が多いためである

その賊達の事情や今現在の状況をしっかりと聞き入れ、雪蓮達はそれを皆で解決するように動いた

それにより、予想以上の兵力が孫家に加わるようになったのだ

だが、その予想外の兵力を馬鹿正直に城に連れていくわけにもいかなかったため、その者達には時期が来るまで今までどおりの生活をしてもらえるように手配してもらった

勿論、食料や医薬は保障してのことだが

そして：ついにその日がやってきた

袁術によって呼び出された雪蓮、龍司、そして冥琳：

袁術「良く来たのじゃ」

「：ふう、それでお話とは何なのですか？」

張勳「はい♪実は私達はこれから平原に攻め入ろうと思うのです
が」

ピクッ：

「…平原？劉玄德が治める土地だな」

雪蓮「それは構わないんだけど…どうして私達を呼んだの？」

袁術「うむ、孫策たちにもその戦に加わって貰うのじゃ」

「それは少し無理だ」

張勲「どうしてですか？」

「…：忘れたのか？先日、俺は張勲將軍自身から南の盗賊の討伐、雪蓮達は東南の盗賊の討伐の命を受けていたのだぞ？」

張勲「…：あ、わ、忘れてました…」

冥琳「ですから我らは早く城に戻り討伐の準備をせねばならないのですが？」

張勲「な、ならせめて南の討伐を中止して、貴方には平原攻略に加わって貰います」

「……………」

雪蓮「あのね、南の賊徒は無視できるほどの数じゃないし…：それに東南だって今は着々と数が集まりつつあるのよ？そんなところを無視すれば後でしっぺ返しを受けると思うのだけれど？」

張勲「…う…：で、ですが…」

どうやら張勲はどうしても俺に参加を受け入れてもらうつもりらしい…

恐らくだが…劉備軍には関羽、張飛、超雲などといった猛将が集っているためだろう

「今すぐには決めることは出来ない。明日にでも返事はする。それでもいいかな？」

袁術「う、うむ。よい返事を期待しておるぞ」

三人は居城に戻り、袁術に言われたことをどう対処するかを決める

ことにした

「…まさかこんな命を受けることになるなんて思ってもいなかったが…」

冥琳「だが、これは好機でもある。もし、袁術が劉備のいる平原に向かってくれるのであれば我らは一気に反旗を翻し、国を奪い返すことが出来る」

雪蓮「でもあの臆病なお子ちゃまがこうも攻めようとするのは気になるわね」

「…それについては「申し上げます!!」ただいま袁術軍の動きを調べてまいりました!!」御苦労さま張穰。じゃあ報告を頼むよ」

張穰「は!!袁術軍はどうやら古城にて身を潜めていた呂布、陳宮、華雄の三名を味方にしたようです」

雪蓮「へえ、呂布ってばそんなところにいたんだ」

冥琳「だが、あの呂布や華雄が袁術の配下になるわけがないだろう?」

張穰「は!!それについてなのですが…どうやら呂布軍は兵糧が大変不足しておるようなのです。それ故に仕方なく袁術軍に協力をすると」

「成程ね…これは運がいい。雪蓮、冥琳。俺はこの袁術の申し入れを受けようと思う」

冥琳「…理由は?」

「…あの無能な袁術なら俺と呂布を先鋒として一気に攻めようとするだろう。何故なら袁術はともかく、張勲が雪蓮達が国を奪おうとしているということに対して警戒を強めるだろうからな」

そのため、袁術は後方の陣を構えいつでも本国に戻れるように動くだろう

そこで…

ひそひそと語りあい：

冥琳「ふむ：確かにそれならば確実に行けるな」

雪蓮「ようやく母様の悲願がなる時が来たわね」

「：まだ、だけどな。その時になったら喜ぼう」

冥琳「：龍司、平原に向かうに当たって誰を副将としていく？」

「：明命にはこちらに残ってもらわないといけない。何せこの策は情報伝達の早さが必要だからな：百合には雪蓮の目付け役として残ってもらわないとな」

雪蓮「ええ：」

冥琳「確かに：この戦で怪我などをされても困るしな」

「：となると：必然的に思春って言うことになるな」

冥琳「分かった、ならば私から伝えておこう。一応、呂範、陳武などの新たに将になった者も連れて行ってくれ。軍師は：諸葛瑾に任せてみるか」

「了解、いい機会だし実践を学ばせてくるよ。それから張穰に後で俺の部屋に来るように伝えておいて。今から呂布軍と劉備軍に充てる手紙を書くから。雪蓮もついてきて」

雪蓮「はいはい♪じゃあ、後は任せるわね、冥琳」

冥琳「ああ」

こうして皆は独立のための行動を開始した

そして：

翌日には袁術に龍司と甘興覇、諸葛瑾などが参加すると連絡を入れそれから5日後に進軍を開始した

↓袁術本陣↓

「で、先陣は誰がやるんだ？」

張勳「あはは、それは貴方の軍と私が呼んだ助っ人の部隊にお任せしますよ。中軍は樂就、田豊、紀靈などに。後軍は美羽様ご自身という編成です」

「……（やっぱりか）了解した。で、その助っ人という部隊の責任者は？」

張勳「既にここから50里先に陣を構えて待っています」

「では直ぐに進軍する」

張勳「あはは、お願いしますね♪」

袁術「では頼んだぞ」

「あ、はい……」

やる気のない返事をし、龍司は自分の部隊を引き連れ、呂布たちのいる陣へと向かった

思春「……それにしても……こうもお前の考えが当たるとは……」

「……思考を袁術基準に考えて、その後はそれに準じて動く。それだけでこれだけのことは誰でもできると思うよ？寧ろ、これが曹孟徳とか雪蓮に対してやらないといけないって言われたら……その方が難しいと思うけど？」

思春「ふっ、そうだな」

そんな話をしながら進軍し……

呂布軍のいる陣へと到着した

所属部隊を見張りに言い渡し、龍司と思春は代表として呂布、陳宮、華雄のいる場所に案内された

「…久しぶりだね」

呂布「……（コクッ）」

「さて、君達は俺のことを信用してくれたと判断してもいいのかな？」

陳宮「それだけの情報を貰ったわけですから信じないとは言えないのですよ」

華雄「…まさかこれから攻め入ろうとする平原に月様と詠がいるとは…」

陳宮「それどころか袁術軍がまともに与えようとしない食料をこちらにまでまわしてくれるなんて…人が良過ぎるのですよ」

「これが俺なりの信頼の得方だよ。といっても今回はもので釣るようなやり方みたいだからね…余りこういったやり方はしたくないんだけど…」

呂布「…でも、恋たち…お腹一杯になる…それだけで…嬉しい。月にも会える…」

陳宮「…確かに…でも、どうしてここまでしてくれるのですか？」

「…まあこちらの目的は袁術からの独立だからね。それに困っている女の子たちを見捨てるようなまねはしたくないんだよ」

華雄「ふっ…貴様は変わった男だな」

「…何かそれよく言われるけど俺は損のあることはしない主義のはずなんです…」

思春「何を馬鹿な…お前は損得関係なく動いている時が多いではないか」

「…そうかな？」

思春「ああ」

「まあいいや、それで作戦のないようだけど…」

呂布「…自己紹介…」

「あ、そう言えばしてなかったね」

呂布「…呂布…字を奉先…恋のこと…恋って呼んで」

陳宮「れ、恋殿!？」

「…あゝ、真名…だよな? いいのか? そんな簡単に教えて」

恋「…いい」

「そうか…なら俺のことは城崎か龍司と呼んでくれ」

恋「…(コクン) 龍司」

「よろしくな、恋」

陳宮「…恋殿が真名を授けたのならねねも真名を授けないといけないのです。性は陳、名を宮、字を公台。真名を音々音なのです」

「ん、ならねねって呼んでもいいかな?」

ねね「いいですよ」

華雄「我が名は華雄だ…真名は…ない…」

「…そうか…なあ、真名って俺から付けることって出来るのか?」

華雄「あ、ああ…」

「…なら臚っていうのはどうだ?」

華雄「おぼろ?」

「ああ、月に龍と書いて臚だ」

華雄「…気にいった、ではこれから我が真名は臚とさせてもらう」

「ふふ、気に入ってもらえて何よりだよ」

臚「…ありがとう、龍司」

互いに自己紹介をし合い…

数刻後…

呉、呂布の連合先陣は平原の城の前まで来た

「…さて、今から城攻めを始めたいと思う…といっても恰好だけだ

がな♪」

陳宮「文に書いてあった通り：打ち合わせした劉備軍の野戦部隊と戦うということですね」

「そう言うこと♪俺は星：超雲將軍と：恋は張飛將軍と、朧は関羽將軍と：部隊指揮はねねと諸葛瑾に任せるね。で、陣の守りは思春、君に任せるよ」

思春「ああ、情報が入り次第そちらに直ぐに駆けつける」

こうして始まった戦

だがこの戦は所謂八百長試合のようなものだった

日に日に戦いは行うものの、前線部隊の龍司と呂布の部隊は常に劉備の野戦部隊と辺り、一刻ほど戦った後に陣に退くというものしか行わなかった

それについて他の将や袁術が文句を言おうものなら

「なら変わってくれるか？こっちは確かに兵数なら勝ってはいるが将の質が圧倒的に負けてるんだぞ？それが分かった上で戦ってるのなら分かってると思うのだが？」

といえは皆は押し黙ってしまった

皆は分かっているのだ

関羽、張飛、超雲などの猛将と渡り合えるのは龍司、呂布、華雄だけなのだ：

それ故に結果がいつもと変わらないと思っていてもそれを引き合いに強く言いだせないでいるのだ

戦が始まって20日後：

事態は動いた

思春「…ん、龍司!!」

「ん、どうしたの？」

思春「明命が来たぞ」

「ってことは…制圧に成功したのか？」

思春「とりあえず明命に会ってみよう」

明命「龍司様、通達です!! 『我、袁術の城落としたり、これより策の最終段階に移る』です!!」

「了解した。張穰!!」

張穰「ハッ!!」

「君にはこの手紙を劉備軍へ。思春は急いで恋たちを呼んで」

張穰「では行ってまいります」

思春「了解した」

張穰は龍司の書いた文を持ち城へと向かった

暫くすると、恋たちが龍司のいる場所へとやってきた

ねね「何ですか？」

「最終段階に移行」

ねね「Σ いよいよなのですよ」

隴「? どういうことだ？」

「つまり…これより劉備軍と共に袁術軍を打ち破る」

恋「…思いつきり…暴れても…いい？」

「勿論、それも遠慮なくやってもらってもいいぞ」

隴「おお、ようやくか!! このところ手加減して戦っていたから体がなまり始めていたんだ!!」

「ふふ、皆、頼りにさせてもらうよ♪」

明命「袁術軍の背後からは雪蓮様達が挟撃を掛ける予定です。ですからもう動かないといけませんね」

「ん、そろそろ張穰が…」

張穰「ただ今戻りました!! 劉玄德からの言伝は…『了解しました♪』だそうです!!」

「よし、全軍を収集してくれ!! 今より、我らは孫呉の独立のための戦いを行う!!! 皆、気を引きしめよ!!!」

「「「「おう（はい）（…うん）（はいです）」「「「「」

袁術は自分の部下を使い、優雅な昼食を楽しんでいた
袁術「うむ、蜂蜜水をもっと持ってくるのじゃ♪」

その中、一人の将は今後のことに対して懸念を抱いていた

張勳「……（孫策軍を見張っていた密偵からの連絡はここしばらくありませんね…先日送った密偵さん、今日辺りに戻ってきてくれると思うのですが…）」

孫策隊の動きが全く分からないでいるため、張勳は出せるだけの密偵を出したのだがそれらも帰ってこない状態だった

その上

張勳「…（まさかここまで戦が長引くなんて予想もしていませんでした…戦神と謳われている呂奉先や華雄、天の御遣いなどがいる先陣なら一カ月もたたないうちに落城すると思っていましたけど…）」

袁術「七乃？どうかしたのか？」

張勳「あ、いえ何でもありませんよ♪（とりあえず密偵さんが帰ってこないと動きようがありませんね）」

兵士「も、申し上げます！……！」

袁術「何じゃ！！妾は今食事中じゃぞ！？」

兵士「そ、それが前線にいる御遣いの部隊を始め、呂布、陳宮、華雄は勿論のこと、劉備軍までもがこちらに攻め入っています！！」

袁術「な、何じゃと！？」

張勳「そ、それって……つまり……」

兵士「な、何でも……これは我々が独立するための戦であると……そう聞いています」

張勳「……ということは……私達は……嵌められたということなの！？」

その混乱の最中、更に混乱をするであろう情報が入ってきた

密偵「も、申し上げます！！孫策軍率いる軍勢が我が本城を攻め落としました！！なお、孫策軍の隊がこちらに向かってきています！！」

袁術「な、何じゃと……！！？」

張勳「こ、これが狙いだったんですか……い、急いでここから逃げないと……」

うおおおおおおお……！！！！

袁術「ひっ！！な、何じゃ！？」

兵士「も、申し上げます！！敵軍は我らの中軍を破り……こちらに向かってきています！！」

張勳「チョッ！？早い！！將軍たちは何をやっていたんですか！？」

兵士「そ、それが…皆、打ちとられたようです…」

張勳「そ、そんな…」

兵士「袁術様!! 急いでここから避難してください!!」

袁術「い、いやじゃ〜!! ！そ、孫策などに負けるなど…そんなの嫌じゃ〜!!」

そんな袁術が我儘を言っている僅か数分前のこと…

中軍では龍司を始めとした猛将達がその武を披露していた…というか…一方的な暴力を…

「ほらほらはいはいー！ー！ー!! ！甘いダサイウザいしょっぱいー！ー！ー!!」

2本の棍を振りまわして鬼のような速度で前進していく龍司…

恋「…お前達…敵…倒す…」

女の子とは思えないほどの力で敵を風払っていく恋

隴「ふ、我が名は華雄也ー！ー!! ！!!」

真名を得たためなのか…いつも以上の力を発揮している隴…

思春「…鈴の音は…黄泉路を誘う道しるべと心えよ…」

静かに…そして正確に相手を殺していく思春…

この四人は他の部隊と比べると遥かに目立っていただが、その様子を見て、本郷軍も影響されてか…

愛紗「我が名は関雲長!! ！！ ！我に続けー！ー!! ！!!」

鈴々「鈴々は張翼徳なのだ――！！！！！！覚悟するのだ――！！！！！！」

星「ふっ…趙子龍…参る！！」

この三人もかなりやる気になっていた…

それを見ていた軍師や一刀たちはというと…

一刀「うわぁ…」

桃香「す、凄いね…皆…」

ねね「…これを見て凄いの一言だけなのはどうかと思うのですが…確かにそれしか口から出ないのですよ…」

朱里「で、ですがこれで敵の中軍の形が崩れ、我が軍に有利になったことは明白です」

雛里「あわわ…で、ですから…ご主人様や桃香様がここで出陣し、

我が軍の指揮を更に高めることになれば後は時間の問題でしょう…」

一刀「…よし！！俺達も出陣するぞ！！」

「「「はい！！（了解なのです！！）」」「」」

この混乱に乗じて、残りの部隊がすべて投入され、袁術軍は混乱の極みに陥り、その最中紀霊將軍は鈴々に、樂就將軍は思春に、田豐將軍は星によって打たれ、他の將軍たちも次々と落ちていった

そんな中、龍司は馬に乗り単騎で袁術のいるであろう本陣へと乗り込んでいた

勿論、他の皆は置いてけぼりなので本当に一人なのだが…

まあ敵本陣も混乱してるため、まさかこちらの将が一人単騎で乗り込んでいるなんて分からだろうに……

「…さてと、どこにいたのかなと…あゝ」

袁術「嫌じゃ嫌じゃ〜〜〜!!!」

張勳「み、美羽様。ここで逃げないと間に合わなくなってしまう」

…何やってるのあの二人は…

普通、ここまできたら逃げるだろう：なのに逃げる準備の途中って：まあ多分袁術の方が駄々をこねたんだろうけど：

張勳「も、もうちよつとでここから逃げる支度が終わります！美羽様は…」

「残念♪少しどころかなり遅かったみたいだね♪」

後ろからいきなり声を掛けられ、びっくりした二人だったが、それ以上に驚いたのは龍司がその場にいたという事実であった。

袁術「いいいいいいいい！！！！？」

張勳「な、何で貴方がここに!？」

「…お前らの行動を予想して俺一人でここに乗り込んできたんだよ。まあ、一刀や恋たちが来るのも時間の問題だけだな」

チヤキ……

袁術「ピッ!? な、何で短剣を手にとっておるのじゃ?」

誠司は懷から短剣を取り出し、ポンポンと手のひらを叩いて……尋常でない位の殺気を出しながらこういった

「…何って…お前らの命を貰うためだよ？」

袁術「ひ、ひいいいいい…」

張勳「み、美羽様には手出しさせませう…（パキッ）…え…」

張勳は袁術を庇う形で龍司と向き合い、剣を抜いて立ち向かうとしたのだが、龍司はその剣の根本を短剣で叩き折っていた

「…甘いよ、そんな信念や理想もない剣で…誰かを守ることなんて…そんなことは不可能だ」

袁術「な、七乃…」@涙目

張勳「み、美羽様…」@涙目

腰が抜けてしまったのか…へろへろとしゃがみこんでしまった張勳を抱きしめる袁術

「…お前らは今までどういう考えで軍を動かしてきた？どういった気持で兵士たちの命を預かってきた？そもそもお前らは何故国を仕る立場であることを選んだのだ？」

短剣を二人に向けながら龍司は質問をし続けた

袁術「わ…妾は…」

「……………」

ギリりと自分が出る限り恐怖を与える目をしているため、幼い袁術は今にもここで大泣きしそうになっていた

だが泣かない

恐らくは残ってる名家の誇りか俺のような男の前で泣かぬように精いっぱいな気持ちでいるだけなのだろう…

袁術「妾が母上から太守の座を引き継いだ時…妾は唯城にいただけでよいと言われたのじゃ…」

「…誰に言われた？」

袁術「母上と…母上の腹心じゃ…今は討ち死にしたのじゃが…」

…成程ね 幼少から甘やかされることばかりで 他者から叱られる
ということをされたことがなかった

だからこんなふうに歪んでしまったのだろうか…

「次に…張勳 貴様は何故こうなるまで袁術に教えを問わなかった」

張勳「そ…それは…先代の御命令で…美羽様には余計なことを教えるなと…」

「…貴様はそのような戯言を真に受けたのか」

張勳「…最初こそは反対しました…ですが旧臣の方々が揃って私に圧力を掛けてきたので…私も逆らうことができなかったんです」

「…だから何もしなかった そう言いたいのか？」

張勳「……………」

ふざけるな!!!!!!!!!!

ビクッ!!

袁術「ぴiiiiiiiiiii」

張勳「ひiiiiiiiiiii」

その声だけで地面が揺れるのではないかという位の声…

怒り…殺意…悲しみ…そんな負の感情が籠った声がある場所を支配した瞬間だった

「お前らは本当に馬鹿だな!! 何でそんな馬鹿な奴らのいいなりになんかった!!! お前らは何だ!!!? 操り人形か!? それとも思考を持たぬ愚者か!? 何でそんな環境を変えていくこうって考えようとしなかった!!!」

袁術「ヒクッ…グスッ…」

「お前らはそれでもよかったのかもしれない!! だけどな…お前らのことを信じ 慕い 付き添ってきた兵たちは 期待を抱きお前を支えてきた民達はどうなる!? いい加減な気持ちや中途半端な気持ちで背負えない物を背負うな!!!」

張勳「……」

「……ふう 全く 袁術がこうなったのは周りの環境のせいだということがよく分かったよ…たく 乱世になろうこの時代でよくこうも育てられたものだな」

——俺がいた部隊でも子供を保護して育ててたけど これほど甘い教育は始めてみるぞ

張勳「あ、あの…それで…私達はこれからどうなるんでしょうか…」

「……普通なら首を断ってハイ終わりというのだろうが…」

袁術「…なら早く」

「たわけ！！！」

袁術「ピッ…」

「お前が死ねばすべてがなかったことになるのか！？ 死んだ兵士達が帰ってくるとも言うのか！！？」 罪が許されると思っているのか！！ 甘いぞ！！！！」

袁術「ヒクッ…な、なら…どうすればよいのじゃ…妾には…分からぬのじゃ…」

「…生きて償うんだ」

袁術「生きて…償う？」

「ああ 袁術、君はその名を捨て 真名のみで生き 孫策や俺の元で働くんだ。勿論、張君も同様だ 敵だった部隊の元で しかも名を捨てて生きなければならぬというのは正直 かなり苦痛である上に今まで名家という名を誇って生きていた君にとってはかなり厳しく感じるだろう でもな、君はそれでも生きなければならぬ 生きて死んでいった兵士や民達の方まで生き この乱世を見守るということが君に出来る償いになるのではないのかと俺は思う」

袁術「……………」

「……袁術 いや 君はこれからどうする？ 軍議に則り死罪を受けて今までの罪から逃げるか それとも名を捨て生き恥をさらしても生きるか…」

袁術「……孫策は……妾を許してくれるか？」

「…君が心から謝罪すれば孫策は許してくれるよ もし許してくれなくても俺が守ってやる 君にこれだけ説教したんだしね」

袁術「妾は…生きたい そして…お主の言うとおり 今まで妾が犯してきた罪を償いたいのじゃ」

「ふむ…なら君の真名を教えてくれるかい？」

袁術「妾は…美羽じゃ」

「そうか美羽 俺は性を城崎 字を龍司 真名を持たぬ世界から来たものだ だけど 龍司という名が真名に近いから俺のことは龍司と呼んでくれ」

美羽「龍司…」

「ああ 美羽 これから君は厳しい環境の中生きていかなければならない そして時に俺も君に厳しく接する時もあると思う でもそれは君が間違った道を往こうとしている場合だけだ だから美羽 君にはこれから俺の指導と勉学に励んでもらう 君が名家としてふさわしい人間になれるように」

美羽「なら…：一つだけ御願があるのじゃ…」

「何だい？」

美羽「妾が一生懸命頑張っていたら…：妾のことを褒めてくれるかの？」

「ふふ それは勿論だよ 叱る時は叱るけど褒める時は褒める それは至極当然のことなんだよ」

美羽「…わ、妾が甘えたいときは…：甘えてもよいのか？」

「ああ 君はまだ甘えてもいいんだよ 今まで心から甘えられる人が張勲だけだったんだよね？ なら…：俺でいいのなら甘えなさい」

美羽「…（ギュッ）…ううう…」

「美羽 これから一緒に皆にゴメンナサイを言いに行こうか」

美羽「う、うむ！！ り、龍司…：一緒に行ってくれるかの？」

「勿論いいよ あ、そうだ 張勲、君はどうする？」

張勲「勿論私は美羽様と一緒にいきます！！ 私の真名は七乃です！！」

「そうか 七乃 君は俺の部下として配属されると思うけど…：いいかな？」

七乃「はい 龍司様とお呼びすればよろしいのでしょうか？」

「好きに呼んでよ まあ七乃も一緒に謝りに行こうか」

七乃「はい！！」

その後未だに戦闘が続いている地域に龍司、美羽、七乃の三人が赴き 停戦を呼びかけた

その後 戦後処理を張穰率いる部下達に任せ、龍司は桃香達や恋達、そして思春達を陣へと呼びよせた

最初こそ全員が龍司の傍に美羽と七乃がいることに酷く警戒していたが 龍司がそのことを説明すると次第にそれが緩んだのだ
それを確認すると龍司は二人に催促し 美羽と七乃はしっかりと頭を下げてその場にいた全員一人一人に謝罪した

そのことに全員が驚きを隠せないようだった
まあ 今まで威張るだけしかしていなかった美羽がちゃんと謝ってるんだもん

それは驚くよね

そんな美羽と七乃の様子を見て 桃香と始めとした殆どが二人のことを許してくれた

でもね…

思春「……………」

思春はやっぱり納得してないようで…

明命はしっかり真剣見を感じ取り 許してくれたんだけどさ

「思春」

思春「…………龍司 お前は何を考えているんだ 今まであれだけのことをしてきた人間を許すなど…」

「ハア…だけどさ 殺してしまえばそれまで 最初こそ気分を晴らすことは出来るかもしれないけど でもそれだけでしょ？」

思春「：それで今まで死んでいった者達が納得すると思うのか？」

「：こう言っちゃ悪いけどさ 死人に口なし 死んでいった人よりも俺は今生きている人たちをどう守るかということの方が大切なんじゃないかと思うんだよ」

思春「：確かにそうかもしれないんだがな、死んでいった者の一族などは納得しないだろう それにこの決定を雪蓮様や蓮華様達は許さないだろう」

「それは俺が説得する もし受け入れられないのであれば：俺にも少し考えがある」

思春「……」

「直ぐには納得できないかもしれない けどさ、美羽は自分の意思で生きて償うという決断をした だからこそ 俺は美羽のことを支えてあげたいと思う それにあの子はまだ子供なんだ 周りの環境次第でまだ成長するよ」

思春「ハア：好きにしろ 私は知らないからな」

「ありがとう 思春」

とりあえずこっちは解決したな

後は事務処理とか 戦後処理の残りを早く終わらせないと

龍司はその後、今後のことを話す為に 雪蓮と蓮華、冥琳に連絡を入れ 桃香達との会談の場を設けることにした

その過程で 美羽と七乃のことを話したら 最初は嫌がってはいったけど 龍司が助けた理由と今後のことを話すとしぶしぶだが納得してくれたようだ

美羽も全員にしっかりと謝ったのが効果的だったのかもしれない

蓮華「…龍司 お前は本当に袁術を「今は美羽だよ」…あの子を教育するつもりなのか？」

「…あの子は周りの環境のせいで今まで学ぶということを知らなかった だからそれを教えてあげればちゃんと出来る子だと俺は思うんだ まあ甘いのかもしいけないけどね」

蓮華「甘いと思うぞ そんな考え方で国を守るなど」

「でもさ こんな甘さも国を守るためには必要なんじゃないかと思うんだ」

蓮華「…どういう意味だ」

「張りつめた糸は何時か強度が衰え、切れてしまう。でも、その糸を時に弛めれば その糸は長く持つ」

蓮華「…意味が分からんぞ」

「はは とりあえずこれは俺の戯言だと思ってくれてもいいよ」

蓮華「ハア…まあとりあえず姉さまが決めたことだから私は反対など出来ないが…納得はしてないからな」

「うん 分かったよ」

蓮華はそういうと雪蓮達の元へ行ってしまった

「時間を掛けて納得してもらおうほかないな」

こうして戦いは幕を閉じた

一時の平和と新たな出会い

袁術軍との戦いを終えた後、龍司達は戦後処理に追われていた降伏した袁術軍の重臣や兵たちの処理や待遇、城壁の修復と税制の改善、町人達の不平などの聞き入れなどやることだけだったかなりの量があった

また、今回の戦は劉備軍及び呂布軍との共同戦線でもあった為、龍司達は両軍への礼も用意する為に仕事が忙しい中、宴会の準備にも追われることになった

龍司は勿論のこと、冥琳や穩を筆頭とした文官（龍司は武官も兼任してる）はもう血反吐吐くのではないかと思ってしまう位の量の仕事を処理することとなり、特に龍司と冥琳は他者の3倍以上の仕事を処理することとなった

武官は新しく入った袁術軍の鍛錬と場内の見回りなど殆どいつもと変わらぬ仕事内容だった為、必然的にこちらは宴会の準備に追われることになった

まあそれでも文官よりも武官たちの方がいささか楽に思えてしまうのはきのせいではないようで…

それから10日後：

「し、死ぬ…」

冥琳「だ、大丈夫か？」

「そういう冥琳こそ：顔色悪いぞ」

冥琳「：お前も人のこと言えないがな」

「「ふふふふふ…」」

雪蓮「あ、あの二人が今普段よりも怖く見えるわ」

蓮華「ね、姉さま：それは言っては駄目な気がします」

傍目から見るとその辺の夜叉よりも濃厚な悪気を放っている為、近寄りがたい二人：

冥琳「おお、雪蓮。仕事は終わったのか？」

雪蓮「まあ：私の仕事は二人に比べたら少ないからね」

冥琳「全くだ。本当に変わって欲しい位だよ」

雪蓮「遠慮させてもらうわ」

「ハア：それで雪蓮、用はなんだ？」

雪蓮「あら、どうしてそう聞くのかしら？」

「前々から冥琳やら穩やら文官が異常なまでに忙しくなったというのは聞いただろう？：何故か武官の俺も手伝ってるんだが：そんな状況で雪蓮がこの部屋に来るのは余程の用があるときのみだと思っただよ」

雪蓮「ふふふ、なら簡潔に言うわね♪ 明日は劉備軍との宴会を開こうっていう話になったのよ」

冥琳「……おい、雪蓮。今の私達にそんな余裕はないはずだが…」
雪蓮「いいのよ、一日くらいはね。それにずっとこんな状態だといずれ体を壊すわ。だから明日くらいは少し休みましょう」

冥琳「しかしだな…」

「…冥琳、俺は賛成だ。確かにこの10日間ずっと事務仕事に集中し過ぎて、俺たち自身の体のことを省みなさ過ぎてると思うしな。

今は一番大事な時期だ、だからこそ定期的な休息はいると思う」

冥琳「…龍司の意見にも一理あるな。だが明日丸一日を休みにするわけにもいかんぞ」

「うゝん…雪蓮、明日のその宴会っていつから？」

雪蓮「夜よ」

「ならそれまでに俺達は重要な仕事のみを優先して、後でも出来る仕事は後日に回そう」

冥琳「…まあそういうことなら大丈夫だろう」

雪蓮「よし、そういうことなら早速それを劉備ちゃん達に…（ガシッ）え、えゝと龍司？ どうして私の肩を掴んでるの？」

冥琳「宴会したいのだろう？ なら雪蓮にもしっかりと働いてもらおう」

雪蓮「わ、私はこれから劉備ちゃんに事を伝えに…」

「今しばし張穰に連絡してもらってる」

雪蓮「え、えっと武官の仕事を手伝いに」

「思春、祭さん、明命、百合を中心にして仕事をやってもらっているので人員は十分です。むしろ文官が圧倒的に足りないんですよ」

雪蓮「えゝ…」

冥琳「じゃあ明日は宴会はなしということだ…」

雪蓮「ぶゝゝゝ！！ 分かったわよ、やればいいんでしょうやれば」
「「ふう…やれやれ」」

本当に雪蓮の仕事に対する熱意というか……やる気が全く感じられないのはどうなのかと日ごろ思う龍司なのであった

蓮華「ハァ：姉さまはもう」

「蓮華、君は何か用があつて来たのか？」

蓮華「あ、そうね。龍司にはまだ紹介してなかったから私の妹と新しく入った文官の子を紹介しようと思ったのよ」

「あゝ、そういえば以前そんな話を聞いたけど……ゴメン、仕事が忙しくて忘れてて」

蓮華「気にしなくてもいいわ、それより時間作れるかしら？」

「んゝ、冥琳？」

冥琳「大丈夫だろう、今日龍司の仕事は殆ど終わっている」

「よし、なら行こうか。ただ、その後は俺は美羽ちゃんの勉強会の為の時間があるから」

蓮華「……あの袁術が「今はその名ではないよ、蓮華」……美羽が素直に勉強するとは思ってなかったけど……」

龍司は美羽を保護した後、美羽には文官として働いてもらえるように勉学に励んでもらうことにした

最初こそ、少し嫌がっていた美羽だったが龍司が真剣に話すと少しずつでよいのならという条件で勉強を始めることとなった

教師は、主に龍司と明命、百合が担当することとなった

冥琳だと少し厳しくし過ぎて、穏だとか色々不安だからという理由で龍司が志願したのだ

七乃には文官として既に働いてもらい、それ以外は美羽の勉学の補

助を担当してもらっている

龍司は美羽が勉強に興味を持ってもらえるように色々と工夫をし、勉強を始めてから3日で美羽は勉強が楽しいと感じられるようになってくれた

冥琳「それにしてもどうやったんだ？　あの美羽が自主的に勉強しているとは」

「飴と鞭だよ。あの子は今まで心から誰かに甘えるという言葉を履き違えてたし、周りがそれを正そうとしなかった。だからそれを教えたなら美羽は変わっていったんだよ。あの子は元々やれば出来る子だからね」

冥琳「ふむ…」

「人って言うのは変化していく生き物だからね。周りの環境や状況で幾らでも変わることが出来る。俺は今回美羽が良く変わっていきるように手助けしただけだよ」

蓮華「いや、あの子を変えたという時点で私は凄いと思うわ」

「…そう？」

蓮華「ええ」

龍司は基本的に自分のことに対してはかなり無頓着で無自覚です

話を終え、龍司は蓮華と共に紹介したいという人物の居る部屋を訪れた

???「違いますよ、尚香様…ここは」

「……「ぶう……」難しいなあ」

蓮華「小蓮、亞莎。龍司を連れてきたわよ」

「……」「え、お姉ちゃん。噂の御遣い様連れてきたの!？」

「……」「れ、蓮華様!! その方はどちらに……」

蓮華「私の後ろに居るわ」

「……どうも」

その部屋にいたのは片眼鏡をかけた目つきの鋭いキョンシーのような格好をした子と雪蓮が小さい頃を思い出させるような雰囲気を持ち、長い髪を輪に結んでいる子だった

「……」「へえ、貴方が天の御遣い？」

「はい、性を城崎、名を龍司。偽名としてノウエルⅡガンランスという名を名乗っています」

「……」「の、ノエル？」

「……そちらは偽名ですからどうか俺のことは城崎、もしくは龍司と呼んでください。私は真名を持たぬ世界から来たものですから名は真名に該当するものと思って下さって構いません」

「……」「そう、じゃあ龍司って呼ばせてもらうわね。私は孫尚香。真名は小蓮だよ。シャオって呼んでね♪あ、それからそんなに畏まった喋り方はしなくてもいいよ」

「……そうか？ それはありがたい、この喋り方は聊か窮屈でな」

小蓮「やっぱりね。ねえねえ、御使ってことは何か不思議な力が使えたりするの？」

「いや、俺は基本的に普通の人と変わらないよ。ただ、色々な知識を持っていたり少しだけ武に覚えがある位だ。刀が刺されば血は出るし、食事を取らなければ弱っていく。シャオや蓮華たちと何も変わらない人間だ」

蓮華「何を言っている。お前は我が呉に過ぎたる将と言って過言で

はないだろう。文武両道に加え、義と徳も持ち合せ、民にも兵にも慕われている。一部では呉にいる天の御使いに声をかけられた家はその日幸せな日を過ごすことが出来ると言われている位だぞ？」

「…何それ、怖い」

蓮華「其れほど頼りにされているということだ」

「因みに聞くけど：一刀と俺を比較するとどういわれてるんだ？」

蓮華「？ それは劉備の元にいる御使いのことか？ 確か：劉備の元にいる御使いは徳と愛の使者、龍司は義と勇の使者だったかな」

「……………」

噂って本当に尾ひれがついて広まる物なのだということを実感した龍司であった

小蓮「ねえねえ、龍司？」

「ん、何だシヤオ」

小蓮は一息入れ：

———少しばかり信じられない言葉を発した

小蓮「呉に天の血を入れる為にもう雪蓮姉さまと契りを交わしたって本当？」

「ぶう————！！！！」

蓮華「しゃ、しゃしゃしゃ小蓮！？ いきなり何を！！？」

小蓮「えー、だって気になるもん。あの姉さまが体を許したって言うってたから本当なのか知りたくて」

「……それは誰から聞いたんだ？（大方予想は付くが……）」

小蓮「え、雪蓮姉さま本人からだけど」

「しえ、雪蓮……こんな小さい子に何話してるんだよ……」

後で厳しく雪蓮に問い詰めることを決意する龍司だった
色々と手遅れだが……

小蓮「ということは……蓮華姉さまや私にも手を出すってこと？」

「んな！？」

蓮華「小蓮！？ お前はさっきから何を……」

小蓮「え、だってそうなるじゃないの。私たちだって孫家の娘なんだし」

「……ハァ……、シャオ。盛り上がってるところ悪いが俺はそんなつもりは一切ない」

小蓮「え、どうして？」

蓮華「そ、そうだ。何故だ龍司」

「……何故そこで蓮華も会話に加わってくるのかわからないが……俺は一方的な理由で女性と一線を越えた関係なぞ作りたくない。勿論、雪蓮は例外中の例外だったがな（いきなり俺の寝室に侵入してたし……まあそういうことだ。それに今は呉にとって一番大事な時期だろう。そんなことに時間を使うのはどうかと思うしな」

小蓮「へえ」

「はい、じゃあこの話はもうおしまい！！ 次は……えっと、さっきから黙ってる君は……」

「……？」「あ、はい！！ 私 は 性 を 呂、名 を 蒙、字 を 子 明。真 名 を 亞 莎 と 申 し ま す ！ ！ お、お 会 い で き て 光 栄 で す、御 遣 い 様 ！ ！ 」

「あーうん。じゃあ君のことは亞莎と呼ばせてもらうね？ それか

ら俺のことは龍司でいいから」

亞莎「は、はい！！　龍司様」

「そういえば…呂子明って俺が知ってる知識だと武官のはずだけど。亞莎はみた感じは文官だよね？」

亞莎「え、えと…私は元武官なのですが…その軍略の才があると言われてから文官になったんです。でも、初対面の龍司様がどうしてもそのことを…」

龍司は自分の事情を説明した

天の世界ではこの世界、三国志を題材とした書物や過去の歴史を記した記録所があること

この世界と自分の三国志に対する知は少々異なりがあること

亞莎「な、成程…」

小蓮「ねえねえ！　じゃあ、龍司の世界の私はどんな人だったの？」

「孫尚香。こっちの世界でも女性で弓腰姫と謳われるほどの武芸の達人だった。けど、天の世界では女性は戦場に赴くのを許されなかった為、女性は政略結婚で他家に嫁ぐというのが多かったみたいだね。そんな中、孫尚香は劉備玄德に嫁ぎ呉と劉備の同盟を締結させたんだ。でもそれは呉の参謀、周公瑾の策略で荊州を取る為の策だった。けど、劉備を気にいった孫尚香はそれを知らずに劉備との新婚を楽しんだ。でも歳の差が凄くてね…当時の劉備が50歳、孫尚香は17歳だったと言われてるんだよ」

小蓮「へえ、面白いね」

蓮華「世界が異なると、その人物の歴史も異なるということか」

「そういうこと。だから俺の知識が必ずしもこの世界で通用するということじゃないってことだね」

亞莎「でも興味深いです…龍司様！！　今度機会がありましたら是非私にも教えてください！！」

「ん、いいよ。俺が知ってる限りのことを話すよ」

亞莎「あ、ありがとうございます!!」

「じゃあ俺はそろそろ行くな」

小蓮「え〜!!」

「悪いなシャオ。この後、美羽の勉強の時間があるんだ。それにシヤオだって今まで勉強してたんだろう？」

小蓮「ううう〜…」

「じゃあ行こうか、蓮華」

蓮華「ええ、じゃあねシャオ。しっかりやるのよ？ 亞莎、後はよろしくね」

亞莎「は、はははい!!」

龍司と蓮華は小蓮と亞莎の居る部屋を退出し、美羽が待っているであろう勉強部屋へと赴くことにした
当初は龍司一人で向かう予定だったが、蓮華が付いていきたいということで行くことになった

「美羽〜、待たせたな」

美羽「うむ、龍司。待ったのじゃ……って孫権!? な、なななな何故孫権が龍司と一緒にいるのじゃ!？」

「ん？ 別にかまわないだろう。それよりもさっさと勉強に入ろうか」

美羽「う、うむ…」

美羽と龍司は徐に勉強する為の道具を用意し椅子を二つ用意した後…

ちょこん…
ポスッ…

蓮華「…ねえ、龍司」

「何だ蓮華」

蓮華「どうして…美羽があなたの太腿に座っているのかしら？」

「どうしてって…いつもこうしてるからだよ」

蓮華「いつも!？」

「ん、勉強を見る時俺はいつもこうだけど? こうした方が教える

側も勉強する側の進行を確認しやすいしね」

蓮華「そ、それは…他の子たちにも?」

「? まあ子供たちの勉強を見るときはいつもこうだね。なんて言うか…こう、俺は今この子たちの糧になってるんだ。そんなことを直接感じられるからね」

蓮華「……」

「どうかしたのか?」

蓮華「ふえ?! い、いいいい!! 何でもないわ!!!!」

「そ、そうか」

美羽「龍司く、ここはどうなるのじゃ?」

「ん? あ、ここはね…」

蓮華は龍司と美羽の勉強する光景を暫く見ていたが…正直驚きを隠せないでいた

あの袁術がこれほどまでに素直に…しかも本当に分からないところのみを龍司に尋ね、用意されている問題を解いていく

龍司の方も答えを導く為の鍵は教えるが決して、答えは教えずにいた何でも勉強は答えを見つけた結果よりもどうやって見つけたかとい

う過程が大事なんだそうだ

加えて龍司の教え方は不思議と耳に入ってくる

どうやらかなり教え慣れているそうだ

後日、そのことを尋ねたら…

「んゝ、俺は以前から様々な地域に行ったり来たりしてたからなく。その中で小さな子供達に勉強を教えたりもしたからかな？」

蓮華「…（本当に龍司が呉に来てくれてよかった。龍司が居てくれたから私達はこうして独立することが出来て…そして、皆気付いていないかもしれないが少しずつ変わっていった。無論、私も…）」

「…よし、今日はこれ位かな？」

美羽「うゝ、疲れたのじゃゝ」

「ふふ、じゃあ最後に小試験をしようか」

美羽「うむ！」

こうして龍司と共にいる美羽を見ると、最近まで自分達を苦しめていた袁術を見ているとは思えないでいる蓮華

我儘ばかりで自分達を振りまわし、こき使われていた時のことを忘れるというのは無理だが…こうしてみると美羽も他の小さな子たちと変わらない、普通の女の子のようだった

蓮華「（美羽も…結局はこの戦乱の時代によって歪んでしまったのだろうな。だからこそ…私達はこの悲しき時代を一刻でも早く終わらせなければ…）」

「よし、採点するぞ」

美羽「う、うむ…（ドキドキ）」

「……へえ」

美羽「ど、どうじゃったのじゃ？」

「ふふ、合格だよ。10問中9問正解。頑張ったね、美羽」
ナデナデ

美羽「うむ！これが妾の実力じゃ」

「でも一つだけ間違っちゃったね。これは次の勉強の時間の時に復習するからね」

美羽「分かったのじゃ！だから、龍司」

「ふふ、はいはい。じゃあこれがお金だから、お店の人に言って貰って来なさい」

美羽「分かったのじゃ！」

美羽は元気に部屋を出て行った

蓮華「龍司、あれは？」

「ああ、実は定期的に試験を美羽に課して高得点を取ったのなら美羽に蜂蜜水を買う為のお金をあげると約束したんだよ。で、今日の試験は良かったからその後褒美ってわけ」

蓮華「それが貴方の言ってた飴なの？」

「そういうこと。お店の人にはもう話はつけてあるんだよ」

蓮華「用意周到ってわけね」

それから龍司と蓮華は再び政務に戻っていったのだが…

雪蓮「（プシュウ）　うう、もう仕事したくない」
冥琳「何を言ってる。まだまだこれだけあるぞ」

そう言って指を指した先には仕事の山

雪蓮「ううううう……」

冥琳「唸っていても仕事は終わらん。さっさと次に取り掛かるぞ、雪蓮」

雪蓮「冥琳の鬼……！！」

「……………」

そんな光景を見て哑然とする蓮華と龍司

「クスッ」

「やれやれ…雪蓮は本当にしょうがないな」
蓮華「私達も手伝いましょう」

「そうするか」

宴にて

…何故こうなったんだ

星「龍司殿、ここは一曲景気づけにお願いいたすぞー」

雛里「朱里ちゃん朱里ちゃん。天の歌ってどんなの何だろうね」

朱里「うん、すぐく楽しみだね雛里ちゃん」

雪蓮「龍司、期待されてるんだから良い歌よろしくね」

一刀「…龍司、乙」

とりあえず素数を数えて落ち着こう…

そしてどうして今の状況になったのか冷静に分析しよう

ほんの数十分前（龍司視点）のこと…

雪蓮「龍司、そろそろ宴会始めるそうだけど用意は良い？」

「ん、後これだけやれば終わりだから…ハア！！！！（ブウン）

やあ！！！！（シュッ）せえい！！（ごおん）」

雪蓮「……………」

いつも定期的に自主訓練を行っている時間の為、今現在棍を持ち、頭の中に敵の姿を描きその敵と向き合っていると想像し、棍を振るう因みに今の相手は少し前に手合わせをした呂布奉先こと恋だ

数分の間、龍司は棍を振るい続けたがやがて動きが止まった

「…ぷはあ！！ あゝ、くそお。負けたあ」

雪蓮「ねえ龍司？ 結局何をやってたの？」

「ん、簡単に説明すると俺が今まで戦ってきた相手の動きを頭の中で思い返し、それに合わせて体を動かしてただけだよ。天の世界だと【イメージトレーニング】って言うんだ。イメージが想像、トレーニングが訓練って言う意味だよ」

雪蓮「へえゝ、で今日は誰が相手だったの？」

「恋だよ。今まで俺が戦ってきた中では一・二を争う位に強いからね」

雪蓮「その言い方からすると呂布以外の強い人っていたの？」

「……あゝ、まあ俺の世界では居たねえ。通称、鬼の副官って言われてた俺の上司が…」

何処か遠くを見ている龍司

しかも目には涙

何か嫌な思い出でもあるのだろうか

雪蓮は問いただそうとしたが…

雪蓮「ねえ龍司？」

「…何雪蓮」 ↑暗い雰囲気

雪蓮「うっ…な、何でもないわ」

「……ハア」

今まで見たことのない龍司の反応に付いていけず…
結局何も聞くことが出来なかった

雪蓮「じ、じゃあそろそろ行きましようか！ 皆もう宴会会場で待
ってる頃よ」

「ん、ふう…よし、行くか」

龍司は先程までの暗い気分を入れ替え、雪蓮と共に宴会を行う場所
に向かうことにした
と言っても龍司はその場所を知らない為、雪蓮の後を付いていった
だけなのだが…

会場に着くとそこは既に盛り上がりMAX状態だった
…何これ

雪蓮「もう盛り上がったの？」

祭「おう策殿。こちらに参れ、久しぶりに飲み比べようではないか」

雪蓮「お、いいわね。負けないわよ？」

祭「望むところじゃわい」

ポツンとひとり置いていきぼりを喰らう龍司だった
ここで立ち尽くしていても仕方がないので、とりあえず辺りをぶら

ついてみることにした

どうやらこの辺りは将が中心となって集まっている場所のようで兵士達は別のところで飲んでいるということが分かった

恐らくだが、冥琳辺りが配慮した結果だろう

今日は恐らく、皆潰れるまで飲み明かすだろうからなあ

そんな将の情けない姿を兵士達に曝さないようにしたかったんだろ
うな

そんなことを考えながらフラフラしていると一刀に声をかけられた

一刀「おゝい龍司」

「…あ、一刀か」

一刀「せっかくの祝いの宴なのに…なんだか元気がないな」

「それは仕方ないだろう。昨日から色々と政務が忙しかったんだから」

一刀「因みに聞くけど…龍司って普段どんな仕事してるんだ？」

「…朝方は日の出と共に重要な案件を片付けながら朝食をとって其れが終わったら美羽の為の勉強の用意と趣味を少々…昼になったら昼食を取りながら警邏。それが終わったら兵たちの訓練の手伝いもしくは文官の手の足りないところの補助に。夕暮れになったら美羽の勉強会をしてその後一緒に夕食。寝る前に人仕事して…で、寝るって感じかな」

一刀「…え、マジで？ それを毎日？」

「ああ、とりあえず俺も一応呉の将だからな。それくらいはこなさないとならないんだよ」

一刀「…俺、呉に落ちなくて良かったかも…」

「？ そういう一刀は仕事は？」

一刀「え、え〜と…基本的に俺は手の足りてない人の補助とか警邏

だけ」

「…仕事ないのか？」

一刀「…文字覚えるのが精一杯で。って言うか龍司はどうしてそんなに仕事を？」

「一応、俺の親が考古学者だったし、俺自身も幼少のころから古い文献を読み漁ってたりしてたからな。そのお陰でこの世界でもやれることが多かったわけ」

一刀「へえ、じゃあその背にある刀も歴史物ってことか？」

「さすが剣道部だな。その通りだが…これは歴史有りというよりも曰く憑き有りって言ったほうがいいかもしれんな」

一刀「え…呪いの刀か何かなの？」

「呪いかどうかはわからんが…この刀が作られたのは恐らく500年前というのは確定しているのだが…見てくれ、この刀。古い刀なのに全く刃毀れてないし…何より刀全体から何かまがましいものを感じるんだよ。多分、素人が抜くと危ないねこれは」

一刀「だ、大丈夫なのか？」

「ああ、俺は平気だよ。何でも親父曰く家の家系は呪いとかには滅法強いらしい」

一刀「…何か龍司って不思議な奴だよな。今一掴み所がないって言うか」

「それが龍司クオリティ」

一刀「いや訳わかんないから」

何故かノリ突っ込みの形が気付かぬうちに出来あがってる二人組やはりもと同じ世界の出身だからなのか、普段は見せないような顔を出しあっていた

その様子をこっそりと見ていた物が居たとも気付かず…

話は盛り上がりいつの間にか話題はお気に入り曲になっていた

「なあ一刀、俺って最近の流行の曲は知らないんだけどさ。お前って歌だったらどんなのが好き？」

一刀「ん？ 歌は結構色んなジャンルが好きだけど…レゲエだったりロックだったり、ポップも良いよな」

「俺は全部日本にいる時に適当に聞いた曲で気に言ったのをiPodに入れてたくらいだったからジャンルとかは詳しくないけど…」

そういうながら龍司が口にした歌は某有名なアニソンだが龍司はそれがアニメの歌だとは知る由もなかった

一刀「へえ、俺もその曲は聞いたことないけど良い曲だな」

「だろう？」

一刀「って言うかそれ以上に驚いたのは龍司の歌声だよ。お前歌上手いんだな」

「そうかな？ 時折氣に言った曲があればそれを幾度か口ずさんでたから慣れたっていうのもあるからな」

一刀「なあ、せっかくの宴会なんだし皆の前で一曲歌ったらどうだ？」

「断る。何が嬉しくて大勢の前で歌わねばならん」

「???」「いいではないか、せっかくの無礼講。ここで歌わねば男が廃るのではないか？」

「いやいやいや、男とかそんなの関係なく…って星!？」

一刀「うわっ!! い、いつからそこに!？」

星「ふむ、先程まで百合や鈴々たちと杯を交わしていたのだが、どこを探しても主が見当たらず故に探しまわっていたら」

「ここで俺と一刀が話している光景を見た…」

星「その通り。で、龍司殿、いかがかな？」

「だからさっきも言ったが嫌だと言っている。大勢の前で歌うなど
：は、恥ずかしいだけだ！！ そんな生き恥などさらしたくない！
！」

星「ふむ：だがそれは無理なようだ」

「は？」

そう言ってチラッと自身の後ろを見る星

そこには酒が入っているのか少々妖美な雰囲気を放つ呉王、孫伯符
の姿が：

それだけなら何ら問題もないのだが：
問題なのはその雪蓮がニコニコと何か面白いものを見つけたような
顔をしていることだった

りゅうじはきけんをさっちしにげだした
しかしまわりこまれてしまった
どうやら逃げ場がない様だ

「：あ、あのー雪蓮さん？」

雪蓮「ん、な～に？ 龍司^{ニコニコ}」

「い、いつからそこにいらっしやいましたか？」

雪蓮「龍司が歌い始めてから♪」

「OTZ」

雪蓮「さて、行きましようか」

「は？ 行くなってどこに：」

雪蓮「決まってるでしょう♪龍司には皆の前で歌ってもらおうわよ」

先程よりも良い顔をする雪蓮

その顔を見るだけで龍司の危険探知センサーはビンビンだった

「嫌だ〜〜〜〜!!!! 何が嬉しくて皆の前で歌わないとならないんだーーーー!!!!」

雪蓮「え〜〜、だって龍司の歌って凄く上手かったんだもん♪ これは皆に聞かせないともったいないと思って」

「嘘だ!!!! 雪蓮のその顔は俺が困ってるのを見て楽しもうとしてる顔だもん!!!!」

雪蓮「あら、それだけじゃないわ」

「??」

雪蓮「だって半分は歌って欲しいからでもう半分は私が楽しいからよ」

「あんた最悪だーーーー!!!!」

そんな会話をしながら龍司は雪蓮にズルズルと引きずられていった

そんな光景を黙って見つめていた一刀と星

星「主、どうして龍司殿が連れて行かれるのを黙って見ていたので？」

一刀「…あの状況でどうやって助けろと？ それに…運が悪ければ俺もまきぞいになりそうだったから…」

星「おや、私としては主の歌もお聞きしたいところなのですが」

一刀「頼むから勘弁してくれ」

こうして一刀にも見捨てられた龍司は：

今現在、劉備軍と呉軍の将全員の目の前に立っていた

回想終了

「…（あゝ、何か少しの間現実逃避してたみたいだな…とりあえず後で元凶の雪蓮と俺を見捨てた一刀…死刑だ）」

雪蓮&一刀「（ブルッ）（ゾクッ） あれ…何か寒気が…。」

「ハア…とりあえず覚悟を決めるか」

鈴々「龍のにっちゃーん！ まだ歌わないのかー？ 鈴々待ちくたびれたのだー」

「ああ、今から歌うが…選曲は適当でもいいか皆」

百合「勿論です♪ 天の歌がどういうのか凄く気になります」

「…じゃあとりあえず手始めに…」

ひとりが辛いから ふたつの手をつないだ

ふたりじゃ寂しいから 輪になって手をつないだ

きつとそれが幾千の力にもなり

どんな夢も断てる気がするんだ

高く飛べ 高く空へ 高く蹴れ
高く声を上げ いつか挫けた
その日の向こうまで
君の声忘れない 涙も忘れない
これから始まる 希望という名の未来を
その足は歩き出す やがて来る過酷も

皆で作った輪は 大きくなり過ぎて
時にはきみがどこにいるのかも わからなくなって
そっと誰かがくれた 優しい言葉が
きみのものだ と教えてくれたんだ

腕をかき 風を切れ 前を向き
涙が滲むほど真っ直ぐ この空を駆け抜けろ
君もひとり僕もひとりみんなが孤独でいるんだ
この輪の中で もう気付かないうちに
その足は震えだす 小さな過酷にも

僕ら皆同じ夢を見てた 過ぎ去る一ページの
ここからは一冊しか持っていけないよ
それでよかったのかい？

胸には強さを 気高き強さを 頬には涙を 一滴の涙を
高く飛べ 高く空へ 高く蹴れ
高く声を上げ いつか挫けた
その日の向こうまで

君の声忘れない 涙も忘れない
これから始まる 希望という名の未来を
その足は歩き出す やがて来る過酷も
乗り越えてくれるよ 信じさせてくれるよ

「……ふう」

自分が今まで聞いた中で最も気に入る分野にある曲を歌い終え、龍司は一息入れ周りを見回してみた
全員が何故か呆然としていたのだが…

「あ、あの〜」

桃香「Σ す、凄い…」

蓮華「上手いわね…何だか聞きいつてしまったわ」

「そ、そうか…この曲を歌ったのは久しぶり何だが…気にいつてもらえてよかったよ」

冥琳「私としては歌詞の方が気に入ったがな」

穩「そうですね〜、龍司さん。天にはそういった歌がもっと沢山あるんですか？」

「そうだな…恐らくだが数えきれないほどあるだろう。歌にもかなり長い歴史があるからな」

明命「ふわぁ〜、私もこの歌を凄く気に入ってしまいました!!
龍司様、よろしければこの歌、私にも教えていただけませんか？」

「良いよ、後で一緒に練習しようか」

明命「はい!!」

雛里「あ、あの…」

「ん？　どうかしたの雛里」

雛里「よ、よろしければ…わ、私にも…そ、その…この歌を教えてもらいたいのですが…」

「ふふ、良いよ（ナデナデ）」

雛里「あわわ…あ、ありがとうございましゅ」

小蓮「ねえねえ！！　私に勿論教えてくれるよね！！」

「あ、ああ。　知りたいのなら別にかまわないよ」

いつの間にか大勢に囲まれている龍司

その多さに戸惑いを感じながらも笑顔を絶やさずにいるのが凄く良
く分かった

その微笑ましい光景を遠くから見ている幾つかの視線

思春「……………」

百合「どうかしたんですか？」

思春「いや、ただあの男にはやはり平和が良く似合うと思ってな」

百合「…そうですね、龍司様はやはり戦場よりもこういった平和な
場所で皆と笑っていて欲しい…あの笑顔を見るとそう思ってしまったい
ます。それはそうと思春殿、先程の龍司様の歌はいかがでしたか？」

思春「……悪くはないな」

百合「私は凄く気に入りましたよ♪ですから私もあの歌を教わりに行
きますね」

思春「……………そうか」

桃香「はー、凄いね龍司さん。本当に何でも出来るんだね」

蓮華「ふふ、龍司は本当に凄いわよ。武力も呂布並みと言われてるくらいだしね」

桃香「うー、うちに来て欲しいな」

蓮華「駄目よ」↑無茶苦茶本気&少し怖い顔

桃香「じよ、冗談ですから。そんな怖い顔しないでください」

雪蓮「へえー、本当に上手いわね」

冥琳「そうね、心にしみわたる歌だったわ」

星「先程聞いた歌とはまったく異なる歌でしたな」

雪蓮「そうね…もっと聞きたくなるわね、龍司の歌って」

星「そうですね…ならば我が主も共に歌わせてみますかな」

雪蓮「あ、面白そうね」

朱里「せ、星さん！？ それはご主人様が可哀想ですよ」

冥琳「おや、こちらの御使いは無茶ぶりにも拘らずしっかり歌い終えたぞ？ ならばそちらの御遣いも歌うのが筋ではないのか？」

朱里「はわわ…そ、そう言われてしまうと…」

冥琳「ふふ、冗談だ。本気にしないでもらいたい。私も今日は少し酔っているようなのでな」

朱里「そ、そうですか」

穏「でもー、一度くらいは見てみたいかもしれませんね」

愛紗「う、うむ…だがご主人様は嫌がるかもしれぬし…無理強いはさせたくはないな」

星「愛紗よ、こういうときは素直に自分の気持ちをさらけ出すのも良いのでは？ せっかくの祝いの席なのだからな」

愛紗「…ふむ、確かに星の言うことにも一理あるな。よし、そうと

決まれば…」

星「主を捕まえて龍司殿と共に歌って貰いましょうぞ」

こうして生まれた龍司&一刀の合唱案

だがその存在を当人達は全く気付くことはなかった

…舞台上に連れて行かれるその時まで…

「…で、またここに立ってるという訳か」

一刀「何で俺まで…」

一刀は愛紗と星に直ぐ捕まり、龍司は全速力で一刀を置き去りにしてその場を立ち去ろうとしたのだが、何故か龍司捕獲隊に雪蓮、祭、穂、小蓮はともかくとして明命、思春、蓮華、百合、亞莎、美羽、七乃に加え、一番ありえなさそうな冥琳に何故か知らないが雛里も加わっていた為、程なくして龍司は捕えられた

「…卑怯だろう。幾ら俺でも頭脳役の冥琳、穂、亞莎、雛里…行動役の雪蓮、祭、百合…隠密行動役の明命、思春…罠の七乃と美羽…で締めは蓮華の待ち伏せで捕えられたからな」

一刀「って言うか追いこんだ方も凄いが、そこまで逃げ切った龍司にも驚きだよ」

「正直な話途中何度か諦めかけたよ。部下に助けを求めようとしたらあいつら誰が捕まえるか賭けしてやがったからなあ…」

忠臣の張穰すら逃げる龍司に対して

張穰「頑張ってください。あ、それから出来れば孫権様につかまってください」

だもの…

「良い意味であいつ等は宴会を楽しんでやがった…俺にとっては悪い意味だったがな」

一刀「…何というか、お疲れ様」

「ハア…過ぎたことはもういい。それよりどうする？ 結局俺と一刀でデュエットする羽目になったが…」

一刀「…不本意だけど一曲だけ歌って終わりにしよう」

「曲は？」

一刀「じゃあ…仮面ラ○ダーWのOPは？」

「…俺もそれは聞いたことがあるがああ曲はこっちの人には理解できない外来語や英語が多く使われてるから却下」

一刀「…じゃあ、我等詠ウハ兵ノ道標…」

「ダウトー！！ な、何かよく分からないけどそれは歌ったら駄目な気がするー！！！」

一刀「う、うゝん…じゃあ、ナイスな心意気」

「…微妙なチョイスだね。って言うか少し…いや結構古い気が」

一刀「うう…な、なら龍司は何が良いんだよ」

「……ここはちよつと妥当なところを選ぼう」

果たして龍司が選んだ曲というのは？

ほんの少しの間、龍司は一刀と打ち合せをし、そして再び全員が見ている前で歌うことにした

その曲は：

“ どうしてきみをすきになってしまったんだろう ”

この曲には英語や外来語は一切使われていない上に、ゆっくり目のテンポの為、初めて聞く人にも分かりやすい曲の為選んだのだ

どうして君を好きになってしまったんだろう？

どうして君を好きになってしまったんだろう

どんなに時が流れても君はずっとここにいると思っていたのに
でも君が選んだのは違う道

どうして君に何も伝えられなかったんだろう

毎日毎晩募ってく思い

あふれ出す言葉

わかってたのに

もう届かない

はじめて出会ったその日から
君を知っていた気がしたんだ
あまりに自然に溶け込んでしまった二人

どこに行く乗りも一緒に君がいることが当然で
僕らは二人で大人になってきた
でも君が選んだのは違う道

どうして君を好きになってしまったんだろう
どんなに時が流れても君はずっと
ここにいて思ってたのに
もう帰れない

特別な意味を持つ今日を
幸せ顔で立つ今日を
きれいな姿で神様に願ってる君を

僕じゃない人の隣で
祝福されてる姿を
僕はどうやって見送ればいいのかだろう

どうして君を好きになってしまったんだろう

あの頃の僕らのこと
もう戻れない（考えた考えた）

どうして君の手をつかみ奪えなかったんだろう
どんなに時が流れても君はずっと
僕の横にいるはずだった（そのままに）

それでも君が僕のそば離れていても
永遠に君が幸せでいること
ただ願ってる
たとえばそれがどんなに寂しくても（寂しくても）

この曲を歌い終えた龍司はとりあえず一緒に歌うはめになった一刀
に向き合い

「「…（ガシッ！ガシッ！グッ！）」」
固い握手を交わした

二人の間に固い友情が生まれた瞬間だった
そして二人は周りを見渡した…
その途端に驚く羽目になった

何故なら…

朱里「グシュ…」

雛里「ひいひいん…」

桃香「い、良い歌だね…グスッ」

愛紗「愛しているが道を違え…隣にすることが出来ずとも…己の愛は変わらない…」

穂「歌詞も確かに良かったですが…お二人の歌声が非常に良く合っていたので」

冥琳「うむ…これは凄いな」

…何これ？ ×2

冷静に分析してるのもどうかと思うけど…一部の人号泣してるんですけど!?

本当に何これ!?

祭「ゴキュ…ゴキュ…ぷはあ!! 良いぞ、龍司」

雪蓮「ゴクゴク♪ ふう…もう一曲歌いなさい」

星「そうですね、まだまだ宴は続くのですからな」

ええいこの酔っ払い共め!! ×2

一刀「…(龍司)」↑キラッとアイコンタクト

「(らじゃ)」

シュバツ!!! ×2

龍司と一刀は逃げ出した

雪蓮「あ、もう！ ふふふ、逃がさないわよ！」

蓮華「姉さま！ お酒もそこまでにしてください！！！」

雪蓮「ぶうー、何よ！ 良いじゃない今日くらい、それに今はそれどころじゃ…」

蓮華「そ・れ・か・ら！！ 龍司を振りまわすのもいい加減にしてください！！！」

雪蓮「何より、蓮華は龍司の歌もつと聞きたくないの？」

蓮華「そ、それは…き、聞きたいですけど…でも、姉さまは龍司を振りまわし過ぎです！！！」

雪蓮「もう、分かったわ。じゃあ、蓮華♪ 龍司の代わりに私にお酌して」

蓮華「ふう、姉さまったら。分かりました、でもあまり飲みすぎないでくださいね」

雪蓮「分かってるわよ、それくらい」

こうして龍司は蓮華の気遣いのお陰で事なきを得ることが出来た

「ふう…ふう…な、何とか逃げ切った」

龍司が逃げ延びた先は一般兵たちが酒盛りをしている場所
天幕の裏に位置した場所に來た為、誰にも気づかれないでいた

??? 「や、やめてください」

兵士「ひつく…いいじゃんかよ」。俺達は命掛けて戦ったんだからよー」

どうやら給仕の女性に泥酔した兵士が絡んでいるようだ

「おいこら、酔うのは良いが他人に迷惑かけるな」

兵士「んだところあ。俺が誰だが…知っての…物…いい？」

「ああ、確か新入りの部隊の一人だよな」

兵士「み、みみみみみみみみみ御遣い様!？」

「ああ、とりあえずお前は少し頭冷やせ」

兵士「は、はいいいい!! 申し訳ありませんでしたー!ー!ー!!」

その泥酔した兵士はすっかり酔いが冷めたのか、先程まで真っ赤だった顔を真っ青にしてその場を走り去ってしまった

「やれやれ…まだ俺達は独立の一步を踏み出したただけだというのに…皆、羽目外し過ぎだ」

??? 「あ、あの…ありがとうございます」

「ああ…ってあれ? 君は…」

??? 「あっ…お、お久しぶりです」

「月ちゃんだっけ? 洛陽以来だね」

月「へう、御遣い様あの時は本当にありがとうございました」

「城崎か龍司って呼んでくれ。その御遣い様って呼ばれるのはあま

り好きじゃないんでな」

月「は、はい。では龍司様と呼ばせてもらいます」
「ああ、ところで何でその服装なんだ？」

原作同様、月は現在メイド服着用

月「は、はい：実は龍司様の手紙を桃香様に渡した後、朱里さんが私達の身分を隠す為に名を捨てご主人様の給仕となるように手配してくれたんです。その際に、ご主人様にこの服を」

「……成程ね（一刀：あいつやっぱり変態か？ 普通、女の子にメイド服着るように仕向けんだろう）」

龍司の中で再び一刀に対する評価が下がった

月「あ、あの！！」

「ん？ どうかしたのか」

月「さ、先程恋ちゃん達から聞いたんですけど：龍司様が恋ちゃん達の部隊に十分過ぎるほどの兵糧を手配してくれていたとか」

「ああ、そのことか。いやだってなあ、桃香と一刀の元には月ちゃん達が居るって知ってたしね。だから、元月ちゃんの軍に居た恋達を戦わせたくなかったし、何より今回は恋達を助けることで利があったからね。個人的にも国のことを考慮したうえでもその方が色々と都合が良かったんだよ」

月「でも、皆感謝してましたよ？ 特に華雄さん、隴さんは龍司様から真名を頂いたことから」

「あゝ、だってなあ。朧って一人だけ真名がなくて凄くさみしそうにしてたからな。だからせめて俺がつけてやることは出来ないかなって思ってた。まあ俺がつけてもいいかって聞いた時、直ぐにいいと言われたことには驚いたけど」

月「？　どうしてですか？」

「いや：？　水関の際に俺、朧のこと挑発した上に怪我させたから」

月「くすっ、朧さんはそんな小さなことは気にしないと言っていたよ？　それどころか龍司様は人としても将としてもとても信頼できる人だとずっと褒めていましたし」

「そ、そうか：／／　そう言われると、なんだか照れるな」

月「けど、どうして朧という真名を？」

「華雄は元々月ちゃんの武将だっただろう？　だから、月ちゃん関連の字を加えたいと思ってたらその字が頭に浮かんできたってわけ。」

【月】に【龍】：だから【朧】になったんだよ。駄目だったかな？

勝手に真名を使ってしまったんだけど」

月「構いませんよ」

「ふふ、ありがとう（ナデナデ）」

月「へう／／／」

先程までの騒がしい時とは打って変わって静かな時：

ああ、やっぱり俺はこういう時間が好きだなあ

なんて思っている矢先：

？？？「月から：離れなさ——い！！！！」

「殺気！！！」

何者かが龍司の背後を取った
けりをはなった

龍司は超反応で回避しつつ、月を庇った

??? 「ちっ!!」

犯人は舌打ちした

更に蹴りを放ちそうな気配

月「詠ちゃん？」

詠「月!! 大丈夫?!」

月「平気だけど…どうしたの詠ちゃん？」

詠「大丈夫よ、もう安心して。後はこの男を始末するから」

いや、始末とか…

何この子？

確か、洛陽の街の復興作業の際に月ちゃんと一緒にいたのを見たけど…

などと思っている矢先…

詠「覚悟——!!!!」

「……（ガシッ）」

詠「なッ!？」

再び蹴りを放とうとしていた詠を何ともないかのように掴んだ後、両手を片手で拘束し右足を使って相手の両足を拘束した龍司

「…ハア、女性にこういう拘束術は使いたくないんだけどね、いきなりけりを繰り出す女性は仕方ないか」

詠「ちよっ、ちよっと！！ 何するのよ！！」

「いや、それはこっちの言いたいことだから。君がいきなり攻撃してきたんだろう？」

詠「それはあんたが月を襲っていたから！！」

「……あゝ、そういうことね。悪いがそれはそちらの身勝手な解釈だ。月ちゃんとは洛陽で会っていたからその時の話をしていたんだよ」

詠「え…月、本当なの？」

月「う、うん。それに…私達に桃香様の部隊に身を寄せられる様に手紙を書いてくれたのも龍司様だよ？」

詠「……」

ようやく落ち着いてくれた詠を解放する龍司

その後はスーパ―説得タイム…

詠「な、成程ね…そういうことか。ならさっさと説明すればいいじゃないの！！」

「（えゝ、理不尽だなあ）いや、説明するも何も容赦無用って感じでいきなり蹴りだったじゃないか。俺だったから避けられたから良かったものの、他の奴だとあれ首に喰らってたぞ」

詠「う…」

月「詠ちゃん、ちゃんと龍司様に謝ろう？」

詠「うゝ…わ、悪かったわよ」

「まあもう気にしてないからね。それよりも君の名前教えてくれな
いかな？ 俺は性を城崎、名を龍司。真名を持たない国から来たか

ら城崎か龍司と呼んでもらいたい」

詠「いいの？ あの馬鹿ち○こと同じように性も名も真名と同じ価値があるんでしょ？」

「ま、まあそうだな。って言うか、女の子がそんなはしたない言葉使うんじゃないですね」

詠「別にいいじゃない。じゃあ、龍司って呼ばせてもらうわ。私は性を賈、名を駆、字を文和よ。でも今はその名を捨てて真名だけを名乗っているわ。だから詠って呼んで頂戴」

「分かった、それにしても…あの賈駆とはな。正直驚いたよ…」
詠「だからその名は呼ばないでって」

「悪いな…驚いただけだよ、詠」

詠「う…な、なら良いけど…でももう呼ばないでよ？」

「ああ、でも外に伝わってそちらが困るのは恐らく袁紹のみだと思うがな。殆どいいとこなしだったしな、あの高飛車馬鹿は」

詠「え、でも…そっちでは袁術を保護しているんでしょう？」

「あ、そっちに関しては問題ないよ。美羽も今、二人と同じように名を捨てて真名だけで生活し、立派な将になる為に勉学に励んでるところだから」

詠「ハア！？ あの袁術が勉強！！？」

「ああ、俺が教師をやってるよ」

詠「あ、ありえない…あの袁家の袁術が…」

「そうかな？ 結構いい子だよ、飲み込みも悪くないしね」

詠「…それは龍司が教師してるからじゃないの？」

「？ いや、俺以外にもたまに兵法教えてる人もいるよ？ 七乃…

張勳も美羽の我儘を助長せずに真面目に働いてくれるし」

詠「…驚いたわ」

月「へう、龍司様って本当に凄いですね」

「そうかな？」

詠&月「「そうよ（そうです）」」

「……／／／」

やはり褒められることに慣れていない龍司は顔が真っ赤になるほど照れてしまった

と、ふとに気になったことがあったので龍司は二人に尋ねることにした

「そういえばさ、さっきから恋、ねね、朧の姿が見えなかったんだけど…」

詠「ああ、恋達は今まで籠っていた古城に一度戻って持ちこんでいた物資や待機していた兵たちを引き連れに行ってたわ。だから今は少し休んでるの」

「…そんな状態でよく宴会しようなんて言い出したなあ」

詠「ああ、大丈夫よ。そろそろ起きてくる頃だし」

月「私達が起こしに行っただんです。今は多分身支度をしてるのではないかと」

詠「…と噂をすれば影ってね。来たみたいね」

詠が言った通り、龍司は詠が見て居た先をじっと目を凝らして見るとこちらに向かってくる3つの影

恋、ねね、朧がこちらに向かってきていた

恋「…おなか、すいた」

ねね「恋殿、もう少しでつくので我慢してください」

朧「全く…と、月様に詠…り、りりりりりゅうしゃま!？」

…だれがりゅうしゃまだよ

「あゝ、朧。落ち着け」

朧「はははっはい!!?」

わ、わわたしは落ち着いてましゅ!

「…一体どうしたんだよ」

何だかあわわ軍師とはわわ軍師を思い出しそうな口調をしてる華雄
こと朧

「まあいいや」

詠「良いの!?!」

「とりあえず落ち着くまで待つ。恋にねね。10日ぶりだね」

恋「…りゅうじ、おなか、すいた」

ねね「龍司、さっさと食べ物のある場所に案内するのですよ!!」

「ふふ、分かったよ。じゃあ皆行こうか」

龍司は月、詠、恋、ねね、朧と共に元居た、雪蓮達の居る場所に戻ることにした

勿論色々な話をしながらだが…

その際、何故か恋と朧から模擬戦をいずれしたいと言われ、半ば了承する羽目になった龍司…だが龍司はこの時まだ理解していなかったこの時、しっかりと断ればあのような事はなかったのだと…

雪蓮達の場所に戻ると…そこは既にカオスと化していた
酒を大量にとったせいで乱れに乱れた（少し暴走気味なだけ）桃香
と穂と蓮華

未だに飲み比べをしている鈴々、星、雪蓮、祭

飲み過ぎて許容範囲を越えてしまったのか…寝ている愛紗、冥琳、
朱里、雛里

少し離れたところでちびちびと酒を飲んでいる明命と思春

安全な場所で食事を楽しんでいる小蓮と百合と亞莎

一刀は何故かボロボロな姿で気絶していた

…何があった

そこに恋達も加わって更にカオス度UP

「…たまにはこういう平和な（？）日も良いな」

龍司は激流に身を任せることにした

まあ、激流は激流でも…

大津波並みだがな

宴にて（後書き）

とりあえず歌は自分の好きな曲選ばせてもらいました

一曲目はR i t aさんのL i t t l e B u s t e r s !

二曲目は東方神起のどうして君を好きになっちゃったんだろう？

とりあえず出来る限り外来語を使われていない好きな曲を探したら
こうなりました

でもこうやって歌詞とか乗せていいのかわからないからお試しとい
うことで

と言うか、歌詞書きとるのに2時間かかった：

L i t t l e B u s t e r sの方、聞きとるのムズイ

龍司 王を語る

大宴会が終わり、夜が明けた翌日：

雪蓮、祭、穩などを中心に宴会疲れが出てしまったのか：

それともただ仕事をしたくなかったのか：

それ以外にも大半の武官や文官が機能不可能な状態に陥っていた

そんな状態でも仕事をテキパキとこなす影が三つ、一つの部屋にあった

「(サツサツサ)：よし、冥琳。ここはこんな感じで良いかな？」

冥琳「(カランツ)ん：ふむ、問題ないだろう」

亞莎「り、龍司様。ここを確認してもらってもいいでしょうか」

「えっと：ん、良いと思うよ」

亞莎「あ、ありがとうございます」

「：ふう、とりあえず一息入れようよ」

冥琳「そうだな」

亞莎「あ、ではお茶を入れてきますね」

「ありがとう、亞莎」

亞莎「い、いえ：／／／」

お茶を淹れる為に一時部屋を退出する亞莎

その後、冥琳と龍司は深いため息をついた

「「ハア~~~~~：」」

冥琳「とりあえず、今動けない：というよりも動かない雪蓮と祭様、そして昨日飲まされ過ぎた穩は午後から仕事をしてもらうこととし

て…この後は、劉備との会談があつたな」

「ああ、確か今後の動きと同盟の継続の有無…それから、恋達の処遇についてだったな」

冥琳「とりあえず、それには龍司と蓮華様、後は…」

「いや、それだけで良い。冥琳はゆつくりと休んでくれ」

冥琳「いやしかし…」

「…俺が気付いてないと思ったのか？ 昨日、雪蓮と一緒に飲んだのだからまだ酒が残っているだろうし、疲れも取れてないだろう？」

冥琳「…だが」

「良いから休んでくれ。休める時に休むのも仕事のうちだ。もし仕事をしていたら、張穰に頼んで強制的に寝てもらうよ？」

冥琳「…ふっ、それは怖いな。眠り薬でも仕込まれたら困るな。そういうことなら午後はゆつくりと休ませてもらおう」

「ああ、それでいいよ。ゆつくりと休んでからまた仕事に取り掛かろう。その頃には会談も終わってるだろうしね」

冥琳は素直に龍司の提案を受け入れることにした

自身の体のことを理解してくれたようであり、だとはっとした龍司

だが…

それとなくだが、龍司は冥琳の様子がおかしいことに疑問を抱いていた

今度それとなく、聞いてみようと思つた

それから少しして、亞莎がお茶を持ってきた後三人でゆっくりとしながら話をして、再度仕事に取り掛かることにした
というか、国で一番偉い国主が酒のせいで寝てるって言うのはどう
よ…

それから少しして…

蓮華「本当に私と龍司だけで会談に参加するの？」

「仕方ないよ、本当なら冥琳と雪蓮で参加してもらおう予定だったはずだけど、雪蓮はまだ駄目だし、冥琳も少し体調が悪そうだったから今は休んでもらってるよ」

思春「…確かに、本日の冥琳様はいつもよりも顔色が悪かったような気がする」

今現在、桃香達のいる陣に向かう最中…

龍司は蓮華、思春（護衛役）と共に馬に乗り、兵300を引き連れていた

最初こそ、龍司は一人で十分だと思っていたのだが、蓮華は孫家の娘である為、示しが付かないということで冥琳の命令で思春を筆頭に連れていくこととなった
まあ…百合とまた一悶着あったことは言うまでもないのだが…

思春「……ふう」

「悪いな、思春。疲れてる時に護衛役を頼むことになって」

思春「気にするな。これが私の仕事だ」

「そ、そう？　だけど思春、昨日結構飲んでたでしょ？　大丈夫なの？」

思春「…ああ」

「無理しないでね？」

思春「貴様に言われずとも分かっている」

「なら良いけど…」

やはり未だに少し刺々しい話し方をして来る思春だった

龍司は思春と話し終えた後、蓮華の隣に戻り会談での打ち合わせをすることにした

そして、桃香の陣にて

朱里「で、ではこれより、劉備軍と呉軍の合同会議を始めたいと思いましゅ」

「じゃあまずは今後こちらがどう動くか、そして同盟を継続するかどうかをまず決めよう」

雛里「は、はひ。そ、そうでしゅね」

「…とりあえず朱里と雛里は落ち着こうか」

会議に参加するのは呉からは蓮華と龍司

劉備軍からは一刀、桃香、朱里、雛里

「さて…とりあえずそちらはどうする？」

龍司は朱里に尋ねると先程まではわわ軍師だった顔がしっかりとした軍師の顔に変わった

朱里「こちら側としては呉軍との同盟関係は継続したいところです。同じ天の御使いが居る呉と桃香様の軍が争うとなればそれ相応の混乱や反発が生まれる可能性も有りますし…何より今現在、私達は共通の警戒すべき敵が居ますから」

「華北の袁紹、そして今洛陽を取った曹操だな」

雛里「はい、ですから私たちが争っていてもそれは北の両軍を喜ばせることになるだけだと思います」

「…ふむ、一応聞くが公孫贇はどうなんだ？」

桃香「白蓮ちゃんは大丈夫だよ♪ 私達友達だし」

「……ハア」

そういう問題なの？ 本当に桃香って甘いよな

一刀「ま、まあそれはともかく…とりあえず白蓮の方は問題ないと

思う」

「…理由は？」

一刀「えっと…それは」

朱里「公孫賛軍の方は今、袁紹軍と対立状態にあります。下手に軍を動かせばそれは袁紹に国を取ってくれと言っているようなものです。ですから、こちらに来るという可能性はほとんどありません」

雛里「同じく西涼の馬騰や蜀の劉璋、漢中の張魯も問題ないでしょうから」

「そうか…なら雛里に朱里…俺や冥琳が次に攻めようと思ってる場所、予測がつくか？」

朱里「荊州…ですか？」

「正解」

雛里「恐らくですが…江陵、夏口辺りから攻める予定ですか？」

「それも正解かな」

朱里「ではこちらからもお聞きます。私達はどこを攻める予定かを」

「…劉表の領土なら攻める場所はどこでもあるのだろうが…桃香の性格を考えると同じ劉家の領土には攻め入りたくないと思えるだろうから…」

桃香「うっ…」

「多分、徐州の統一だろうね。小沛、下邳辺りからかな。あそこには優秀な人材もいるってくらいだし…まあ個人的に攻めるのならそっちは今は放置して荊州を取った後に荊州の4郡辺りから攻めるべきだと思うけどね」

雛里「…正解です」

「ふふ、流石は鳳雛に伏龍」

朱里「はわわ、あ、ありがとうございましゅ／＼／＼」

「さて…今の会話を聞いてどうするか決まったかな、蓮華」

蓮華「ふ、言わずとも分かっているのだろう？ 無論、同盟は継続させてもらおう。そちらの軍師殿を敵に回したくないということが良く分かったからな」

こうして同盟は継続されることとなった
龍司の智は孔明、鳳統に匹敵するものだと言えながら評価されるようになったきっかけでもあったのだが…

一刀「じ、じゃあ次は…」

「恋達の処遇についてだったな」

一刀「今俺が言おうとしたのに…OTZ」

「あ、すまん…」

一刀「良いよ…話を進めよう」

「あ、ああ…正直な話、恋は勿論のこと、ねねや朧はこちらにとっても欲しい人材だな」

朱里「そうですね…こちらも同意見です」

雛里「騎馬部隊…ですか」

「ああ、こちらは今騎馬部隊は俺が率いることになってるが…正直、もう一人補助してくれる人間が欲しい。というか、俺に弓、歩兵、騎馬、加えて水軍の訓練の担当させるの本気で止めて欲しい…確かに騎馬以外は補助が付いてくれるから其れほど大変じゃないけど…正直、やること多過ぎて頭痛い」

蓮華「…り、龍司…そんなに仕事があったのか」

「というか完全に人手が足りないからね、仕方ないと言えばそうなんだけど」

朱里「こちらは純粹に人手が欲しいということですね。こちらは兵数に将が足りていないというのが現状です」

「？ 情報だと、そちらは愛紗、鈴々、星以外にも有能な将が居ると聞いているが：例えば靡竺、靡芳や周倉、関平や冠封：」

朱里「す、凄いですね。それも張穰さんの？」

「いや、俺が調べたこと」

雛里「：情報網広いですね」

「ん、まあ国の情報はそれなりに入ってるからね」

朱里「：そのことでお話があるのですが：」

「何かな？」

朱里「この会談が終わった後、少し話せますか？」

「：蓮華？」

蓮華「いいわよ。多分、私達には話しづらいことなのだろうし：」

「了解、朱里、いいよ」

朱里「はわわ、あ、ありがとうございます」

「：さて、話を戻すか。とりあえずこのままだと水掛け論になりそうだし：こうなったら恋達自身に決めてもらわない？ 当人達も自分達のことを無視して従属するなんて嫌だろうしな」

朱里「そうですね：其れが良いかもしれません」

こうして、結局恋達の処遇は自身で決めてもらうことに決まった

桃香に恋達に来てもらうよう、伝令を出してもらうようにし、再び話し合いに戻ることにした

交流を深める為に物資交換をしたり、援軍を出すことについて、また万が一同盟を破棄する際には必ず連絡を入れることなど、必要な事をすらすらと話す朱里、雛里、龍司の三人

その話し合いについていけない顔をしている一刀と桃香
蓮華は必要なこと以外は龍司に任せているという顔をしていたが…
時折話に参加してたし…

程無くして恋達がやってきた

恋「…きた」

「あ、恋。おはよう」

恋「龍司…おはよう」

「んじゃあ単刀直入に言うわ。恋達にはこれから呉と桃香の軍、ど
っちに入りたいか決めてもらいたいんだよ」

ねね「な、なんですとー！ー！！　そ、そんな大事な事を我ら自身
で決めてもいいのですか！？」

朱里「はい、因みに私達はどちらも恋さん達のお力が必要だと思っ
ています。ですから、この事はゆっくりと考えてください」

朧「む、むう…そう言われてもな」

ねねはあり得ないことに驚き、朧は何か悩んでいるようだった
恋は…

恋「……………（じ〜〜〜〜）」

「???」

龍司をじっと見ていた

恋「…恋は、龍司のぐんにはいりたい」

「そうか」

恋「でも、月達をほうっておきたくない」

「…ふむ」

恋「どうすればいいか…わからない」

「どうして俺の居る、呉に来たいって思ったの？」

恋「…龍司、恋のこと…たすけてくれた」

「あゝ、もしかして虎牢関の時のこと？」

「…（コクッ）」

あゝ確かにあの時、貸し作ったみたいな感じになったかも…でもなあゝ

「恋、君は何のために武を振るうの？」

恋「？」

「答えてくれるかな？」

恋「恋は…恋のことをひろってたすけてくれた月をまもりたかったから…あと…セキトたちのごはんのため」

「そ、そうか…でもその守りたい月達は今桃香の部隊にいるんだ」

恋「（コクッ） だから…月達が龍司のぶたいにいけばいい」

「「「「「…はい？」」「」「」「」」

恋の突飛押しもない発言のその場の時が一瞬止まった

「え、えっと…今何と？」

恋「？ 龍司のいるところに…月や詠もいっしょにいけば…もんだいない」

「いやいやいや！！ 問題大有りだから！！ 何それ！？」

恋「…龍司は…いや？」

「…嫌ではないし、むしろ人手が多くなって助かるけど…それはつまり、一刀や桃香のところから人手を奪うということになるし…」
ねね「それなら全く問題はないと思うのです。詠たちと話をした際に、月殿たちは現在給仕として劉備軍に匿われているとのこと。給仕ならばそれ程の仕事はないはずなのです。それにもし事が露見してもそれを盾に攻めてくるのは反董卓連合に参加していた中でももう曹操か袁紹しかおりませぬ。加えて、曹操に至っては目指す道は霸道、故にそのことを口実に攻め入るなどということはしないでしよう。まあ、袁紹は馬鹿ですから攻めてくる可能性はありますけど」
「…むう、だが…」

朱里「…恋さんに再度問います。貴方が行きたい先は？」

「…月達と…龍司のところ」

雛里「…朱里ちゃん」

朱里「そうだね、雛里ちゃん。龍司さん、私達は恋ちゃんのことを尊重したいと思います」

「朱里…雛里まで。で、でも月ちゃんと詠の意見も聞かないと…」
一刀「じゃあちよっと聞いてくるよ」

そう言い残し一刀は走り去っていった

「（…こんな状況の中、俺一人置いていかないと欲しかったよ、一刀）」

男一人、こんな女性ばかり…しかも皆美人さんの中にはかなり…いや…

龍司にとっては超が付く位居心地が悪かった

女性に殆ど免疫がない男、城崎龍司なのであった

蓮華「龍司、先程からどうしてそれほどまで反対するような意見を出すのだ？」

「…蓮華は良いの？」

蓮華「別に構わないだろう。こちらに不利益な事などないのだからな」

「い、いや…実のことを言うと…今回、俺は恋がこちらの軍に来てくれるなんて思っていなかったんだよ。だけど一応形式の形として、言うべきことは言っておくべきなのだろうと思ってただけど…予想外でした」

蓮華「？ 何故そう思っていたのだ？」

「まあ第一に月ちゃん存在かな？ 恋は月ちゃんに拾われて武将として働いていたって言ってたよね？ だから月ちゃんには大きな恩があるし、何よりも恋って侵略とか破壊よりも守るという意味で力を使ってた。それを俺は虎牢関の戦いで理解した。そして第二に俺自身、恋にあそこまで信用されてるなんて思ってたから」
蓮華「何だその理由は…ハア、相も変わらずお前は自身のことに対しては鈍いな」
「??????」

鈍いと言われても…俺は結構鋭いと思うぞ？

殺気とか察知するし

そんなことを考えている最中、ようやく一刀が戻ってきた

一刀「龍司、月もそれが良いって言ってるぞ」

「…WHY？」

一刀「何故英語…まあいいや、あの時に受けた恩を返したいって」

「…だけどそうすると一刀のところから月ちゃん達を引き抜くことに」

一刀「うーん、じゃあこう考えるのはどうだ？ 俺達は月達を呉軍が独立するまで預かっていたって」

「……………」

一刀「どうしたんだ？」

「…ハア 一刀、それに桃香も…前々から少し言いたかったことがある（ちよっと釘をさしておかないと駄目だなこれは）」

先程までの情けない雰囲気から一転して、さっきまで出し始める龍司その雰囲気のにまれた周りはだまざるを得ずにいた

桃香「な、何かな？」

「桃香…それに一刀、お前らは何のために戦ってる？」

一刀「お、俺は桃香の目指す道を助ける為に…そして、俺自身が桃香の考えが正しいと思ってるから」

「…そうか、で 桃香の方はどうして軍を率いる決意をした？」

桃香「…龍司さんは今の世の中を…いえ、黄巾党の乱が始まる前からこの国をどう見ていましたか？」

「…荒廃し、力がすべてを支配する。弱きものは泣き、強き者は笑う世界…か？」

桃香「はい、だから私はそんな世界が嫌で…皆が平等に生きることの世界にしたい…弱い人が泣かずにいる国を作りたいと思ったから…鈴々ちゃんと愛紗ちゃんと一緒に旅をしていました。そして、ご

主人様と出会ってここまでこれたんです」

龍司は桃香の言うことを静かに聞き…そして…劉備軍の面々にとつて言って欲しくない言葉を発した

「桃香…それは大層素晴らしい夢物語だな」

桃香「夢…物語？」

一刀「おい…どういう意味だ…それは」

「簡単なことだ。そんな世界、どこにもありはしない。あるとすれば夢、もしくは物語の中だけだということだ」

一刀「ッ！！（バンッ）お前！！！」

「なら聞くが…一刀、お前は人間が皆平等に生きることが出来ると思ってるのか？」

一刀「そ、それは…」

「天の世界…俺達の世界はどうだった？ 俺達の住む日本、そこはすべての人間が平等に生きていたか？」

一刀「……」

「つまりはそういうことだ。幸せを掴める者がいればその裏側で不幸にも幸せを掴み損ねる人間もいる。世の中はそういう冷たい方程式で成り立っているということだ」

蓮華「お、おい龍司。少し言いすぎでは…」

「蓮華は少し黙っていてくれ」

蓮華「う…」

今までの龍司からは感じられなかった感覚が蓮華の口を封じることとなった

其れほどまでに今の龍司は静かに怒っていたのだ

「桃香、君がどんな夢を持とうと其れは君の自由だ。だがな、今の君のまま更に勢力を伸ばすということになれば、いずれ君は潰される。自分の夢の意味にな」

桃香「……………」

「国を持つということは民の命を背負うということと同義だ。だが、その際に自身はすべての民を救うことは出来ない、自分の手が届く範囲でしか助けることが出来ないということを自覚する必要があるということだ。王とは時に9を助けるために1を捨て、またある時には1を救うために9を捨てる決意を下さねばならない。確かに君の理想というのはかなり魅力的に聞こえてしまう。しかも君は本気でその理想を貫こうとしている、故に民も君を信じてきてくれる。それは君の人徳ゆえだろうと思う。だからこそ、俺は君に理解してほしい。夢と現実とは時として一緒にしては駄目だ。時に厳しい判断も下さないとならないということを」

桃香「…龍司さん、私は…どうすれば」

「ふむ…なら問題だ。君の目の前には10人の溺れそうな人間が居る。川に飛び込み、君が助けられるのは2人までだ。さて、君はどうする？」

桃香「え、えっと…私が二人、ご主人様が二人、鈴々ちゃんが二人、星ちゃんが二人、愛紗ちゃんが二人を助ければ…」

「それが君を殺すって言いたいんだよ」

桃香「え…」

「確かにそれだけ危うい人間が少ないのなら全員を救うことが出来るかもしれない。でも、国を持つ者なら民はそれだけじゃ済まない。何千何万という人々を…君は全員救うことが出来ると思うのかい？」

桃香「あ…」

「それからもうひとつ、桃香も一刀も甘過ぎるってことだな。今回は恋や月ちゃんのことを反映してるからそんなに強くは言えないけど…今後もこんなふうに甘い判断を下すのならいずれ誰かに喰われる。例えば…覇道を目指す曹操とかにな」

朱里「…」

雛里「…」

「朱里と雛里はもう理解してるだろう？」

朱里「…はい」

一刀「…どういことだ」

「曹操…いや、華琳とは一度軍を共にしたことがあってな。その際に、彼女の道を見たんだよ。で、そして華琳と桃香の二人を比べてみたら、完全に水と油の関係なんですね。いずれ彼女は桃香の道を否定する、だから確実に呉より先に攻めてくる」

桃香「どう…して…」

「…今の時代、この戦乱の時代に過剰な優しさは毒にしかない。華琳はそう思っているからだ。そして、彼女にとって桃香の優しさは唯の甘さで、力を否定している者だと感じ取れるからだろうな。その面、華琳は力を否定せず、この戦乱の世は絶対的な力のみが治めることが出来る、それが覇王たる道、そう考えてる。俺はそう感じた」

桃香「そんな…」

「だからこそ、俺は桃香に言いたかったんだよ。力を否定しないでくれ、人には守れる限界がある、そして…君は君の道を決して曲げるなってね」

桃香「え、でもさっきは…」

「ああ、確かに俺にとって桃香の道は甘すぎる感じがする。だけど…一刀や愛紗、稟稟たちは勿論のこと、朱里や雛里、星達は君の示す道を信じてここまで来たのだろう？」

一刀「勿論だ」

朱里「は、はい！！」

雛里「わ、私は桃香様を信じてましゅ！！」

「というわけだ。だからこそ、桃香。君は君の道を貫け。だけど、俺が言ったことは忘れないで欲しい。俺としても君には志半ばで潰

れて欲しくはないからな」

桃香「……………はい!!」

「…ふう、悪かったな。急にこんなこと言いだして…」

先程までの雰囲気が一気になくなり、最初の頃の龍司が戻ってきた
まるで何か憑きものが落ちたかのようにゆったりとした雰囲気だった

桃香「いえ…龍司さんは私の…いえ、私達のことを思って厳しく言
ってくれたんですよね？」

「はは、若輩者の俺が言えた義理ではないことだったんだけどさ…
誰かが言わないと手遅れになるかもしれないと思ったら口が止まら
なくてね…すまない。他国の将として出過ぎたまねをしてしまった。
処罰は覚悟している」

桃香「そ、そんな!! 気にしないでください!! 龍司さんの言
ったことは正しいんですから」

一刀「そうだな…俺も甘かったのかもしれない…その濁った眼を覚
まさせてくれたんだ。ありがとう、龍司」

「…ふ、ならそれはこれからお前らが示す道で証明してくれ」

一刀「言ったな？ 見てろよ、俺達は俺達の道を行き、絶対に多く
の人を笑顔にしてやるよ!!」

桃香「ご主人様の言うとおり、私は私なりのやり方で助けられる人
に手を差し伸べたい!! その為に私は力をつけます!!」

「ははは、期待しよう。っと、蓮華にも謝らないとな」

蓮華「…いや、私も少し平和ボケしていたのだろう。これは間違い
なく桃香達には必要なことだったのだろう、故に謝罪は必要ない」

「…ありがとう」

蓮華「れ、礼を言う必要などないだろう!!／／／」

「ふふ、何となく言いたかったただだよ」

結論として、月、詠、恋、ねね、朧はこのまま呉に行くことになった
それではあまりにこちらに利があると主張した蓮華が、十分な兵糧
と金を劉備に送ることを約束した

最初は断り続けていた桃香達だったが、龍司が対等対価を守るよう
に示唆したらあつという間に承諾した

まあ、桃香に至っては渋々と言った感じだったが：

そして、会談はそのまま終わりをづけ：

龍司は朱里と雛里の案内の元、二人の部屋に案内された

「それで：話とは？」

朱里「はい、龍司さんにお話ししたいのは、もし曹操軍が龍司さん
の言うとおりこちらに南下した場合のことです」

雛里「現状、こちらは約4万の兵しかいません。逆に25万の兵力
を持つ曹操軍が攻めてきた場合、どうすることも出来ません」

「：荊州の城を拠点とすることが出来ればどうとでもなるのだが：
徐州の城だとな：どうしても平地が多い為、野戦が主となり曹操軍
が有利になってしまうか」

朱里「はい、そうなってしまえば確実に私達に勝ちの目はありませ
ん」

「：とりあえず案は三つある。一つ、曹操が攻めてきたという情報
が入った際に徐州の城を捨て、益州の方に向かう。あそこは確かに
道のりは厳しいが、国を治めている劉璋は愚かな国主だ。税を絞り
とり、美女をはべらせ、国の政はやりたい放題だと聞く。恐らく、
そこに桃香が向かうとなれば、益州の民の大半は桃香を向かい入れ
てくれるだろうな」

雛里「確かにそれはありますね。ですが、それは国を捨てるという

ことですから…」

「ああ、当然軍から逃げる者も出てくるかもな。でもその可能性は説得次第だろう」

朱里「…そうですね、こちらの兵士さん達はご主人様や桃香様の人徳を信頼してくれてますから」

「ん…二つ目は同じように攻めてきた時に呉に逃げてくるということだ。でもこれは、桃香の理想を捨てるということと同義だ。それを覚悟してくるというのなら恐らく雪蓮達も国入りを認めてくれるだろうな。そして三つ目は無条件降伏を曹操軍にすること。だが、これは下策だろう。故に俺は一つ目の策を取ることを勧めるが」

雛里「…やはり龍司さんも私達と同意見でしたか」

「何だ、最初からこの策で行くつもりなら聞く必要なかっただろう」
朱里「いえ、先程のお話やそれ以前から聞いていた龍司さんの噂からは是非お話ししたいと思っていました」

「な、何か照れるな／＼　…っと、それから一つだけ忠告しておく。雛里、益州には落鳳巴と呼ばれる場所があるのは知ってるか？」
雛里「は、はい…確か、フ城へ向かう道の内の一つの道中にある場所の名ですね」

「そこには決して軍を進めてはならない。あそこは地図にはないが、人が隠れるには最適な場所がいくつもある。そこに軍を向かわせれば、その部隊は全滅する恐れがある」

朱里「はわわ…そ、そんなことまで…」

雛里「あ、で、では…蜀の主な優将のことは？」

「…とりあえず知っている限りだと、黄忠、嚴願、魏延、張任、呉懿、呉蘭、冷泡、孟達、李嚴辺りかな。文官だと楊儀、法正、張松、費緯辺りが名のある将だね。だが恐らくその中の一部の将兵たちは桃香が蜀に向かうと聞けば裏切りの手配を始めると思うがな。劉焉の頃も酷かったが、劉璋になってからは将兵の扱いは更に酷くなっていると聞くからな」

朱里「お、驚きです。そんなに詳しくなんて…」

「んゝ、まあ俺が訓練してる部隊に【闇】って名の特殊な部隊があって、その最終試験の際にこういったことを調べるようにしてるんですよ。一石二鳥ですからね」

雛里「い、いいんですか？ そんなこと話して」

「あぁいいの良いの。だってこの部隊、俺の直轄だから」

朱里「はわわ：やっぱり龍司さんは凄いです」

龍司が自腹を使って作りあげた特殊部隊【闇】

文章通り、この部隊は隠密部隊であり主に暗殺や危険な場所への調査を目的としている

闇に入るにはもう一つの部隊【光】に入団し、特殊訓練をやり遂げること

そして、定期的に行われる試験を通過することである

しかし、その試験はあまりに厳しく、現在メンバーは10人にも満たない（詳細不明）

実はその【闇】の上に立つのが張穰である

【光】の方は、雪蓮にも許可を貰い正式な物とされているが、【闇】の方は一部の物しか知らない：その存在そのものも不気味なほどに闇に包まれているのである

軍師の中で知っているのは冥琳のみである

その後、少しの間龍司は朱里、雛里と話し終えた後、蓮華と思春と共に呉に戻っていった

龍司 王を語る（後書き）

一部説明下手な部分があったと思いますが、大半が私の私的な見解なので大目に見てくださると有難いです
日本語難しい：

龍司の力の秘密

呉に戻った龍司と蓮華は軍のまとめを思春に任せ、二人で会談の結果を話に向かった

「…というのが結果で、とりあえずこちらには月、詠、恋、ねね、朧の5人が加わってくれることになった」

雪蓮「へえ♪ 随分と面白いことになったわね」

冥琳「…ふむ、確かに面白いな。しかし、彼女を…董卓がこのような可憐な少女だったとはな」

月「へう…」

「で、事前に連絡は入れて置いたけど…大丈夫だね？」

冥琳「ああ、むしろこちらに利が多いな。まず、お前だけに任せていた騎馬隊に呂布が加わり、歩兵部隊は華雄に、足りなかった文官には陳宮と賈馱が加わってくれるのだからな」

「月はどうする？」

穏「龍司様の付き人をしてもらってはいかがですか？」

「…俺は別にそういうのは必要ないんだけど」

百合「何言ってるんですか。むしろどうして今まで付き人をつけなかったのか疑問に思う位ですよ」

ねね「？ どういうことなのですか？」

明命「龍司様、自分で出来ることは何でもやってしまわれるんです。ですからその…食事の支度から掃除、洗濯、あろうことか湯の準備まで…」

詠「…馬鹿なの？ 話に聞いたけど…龍司って普通の文官よりも仕事あるんですよ？」

思春「文官どころか武官の仕事もやっているのだから」

月「へう、そんなにお仕事して体を壊さないんですか？」

「？　今まで体を壊したことはないな」

亞莎「でも明らかに過剰労働ですよ、冥琳様もそうですけど」

冥琳＆龍司「「そうかな？？」」

「「「「そうですよ（そうよ）」」」」

一同が口をそろえていった

それに対し、龍司と冥琳は苦笑するしかなかった

「いやな：俺と冥琳がこれ位仕事しないと：」

冥琳「全員今までよりかなり仕事が増えるぞ？」

「まあ俺としては冥琳は少し休みを取りながら療養した方がいいと思うがな」

冥琳「：何故だ？」

「：何となく」

冥琳「そうか：」

「ああ、そうだ。そういうばさつき入った情報で今建業に華陀が来てるそうだよ」

冥琳「華陀：あの有名な医師か」

「そうそう、で序に全員の健康診断を頼むことにしたんだよ」

雪蓮「健康診断？　何よそれは」

「簡単に言うとな、天の世界では病院って言う医療施設があつて。年に一定の料金を払うなどにより、治療を受ける際は殆どお金を払わなくても診察を受けることが出来るんだよ。で、人って案外簡単なことで体調を崩したりするし、発病するまで病氣だと気付かない場合もあるんだ。だから、それを事前に察知し、手遅れになる前に体の状態を調べることを健康診断って言うんだ」

蓮華「成程：序に聞くが：その効果は？」

「まず死者が減るということと自分の状態を知ることが出来るということだね。後はやっぱり病氣の早期発見という点が大きいかな？」

病気には色々な種類があつて、その中には早期に発見できれば死
ななくても済むものもあるんだよ」

祭「しかし：噂で聞く限りでは華陀は治療の腕のみが有名でそうい
った事前の病を見ることは出来るのかの？」

「それは聞いてみないと分かりません。でも、俺が書きとめておい
た簡易健康診断は受けてもらった方がいいでしょう」

穂「あれ？　もうこちらのお医者さんの方々に教え込んだのです
か？」

「ああ、とりあえず皆最初こそ驚いてたけど今はかなりの成果を上
げているよ」

雪蓮「なら私達は二日後には全員健康診断をしましょう♪」

「うん、そうしてくれると有難いよ。でも完全に仕事をしないとい
う訳に行かないから午前と午後に診察する組を分けよう。その方が
効率も良いしね」

冥琳「ふう：どうしても受けさせるようだな。仕方ない、では組み
合わせは私の方で決めておく。っと、話を戻そう。とりあえず：董
卓殿？」

月「あ、あの：今は月と呼んでください」

冥琳「ああ、すまない。では月、君はどうしたい？」

月「私は：龍司様のお力になりたいです」

雪蓮「決まりね♪　本日より、龍司の補助役に任命します。因みに
龍司には拒否権はないから」

「：ハア、分かった。これからよろしく頼むよ、月ちゃん」

月「はい、龍司様」

「ふう、なら詠には俺が文官の仕事をする際に補助してもらっても
良いかな？」

詠「え：」

「月ちゃんと仕事場は仕事場が近い方がいいでしょ？　それなら俺
の仕事を手伝ってもらった方が良いし」

詠「し、仕方ないわね。それで良いわよ」

冥琳「では呂布には龍司が騎馬部隊の訓練をする際に加わってもらい、基本的には警邏などを行ってもらおう。陳宮にはその補助。華雄には歩兵部隊を任せよう」

「加えて隴には美羽と一緒に勉強してもらおう」

隴「な、何故だ!？」

「…隴、？水関の戦いの際に負けた原因は分かるでしょ？」

隴「う…」

「これからの戦い、武力だけではどうしようもない場合もある。その時に使えるのは自分の力のみだ。智をつけるのは決して悪いことじゃない」

隴「し、しかし…」

「一応教えるのは俺と…そうだな、詠。お願いしても良いかな？」

詠「良いわよ」

隴「うう…結局勉強することは避けられないのか」

「まあまあそう言わずに。今後は猪とか言われたくないでしょ？」

隴「……………分かった」

やはりいくらかの葛藤はあったようだが何とか華雄は納得してくれたようだった

「ふう、これ位かな？」

冥琳「ああ、それから今後の動きだが…夏口と江陵、どちらから攻めるかだ」

「…夏口から江陵、その後は一度軍を纏める。その後に長沙、零陵、桂陽、武陵の4郡を攻めない？　ここらを押さえておけば、こちらもかなり楽になる」

穩「確かにそうですが…問題は時間ですね」

亞莎「西に対する備えは殆ど終わっています…北に対する備えは

未だ未完了ですから」

「だけど、とりあえず江陵と夏口さえ手に入れば抑えは出来るから」

ねね「後の問題は南なのです。情報によると呉の南には異民族の山越がこちらに攻め入る野心ありとあるのです。加えてこちらの意に背く輩もいるとか」

「南は殆ど問題はないよ。残っているのは僅かな反対勢力と極小の豪族がちらほらと残っている程度だから。その備えはもう終わってる。韓当、孫垣、諸葛瑾、凌統、陳武、朱然らを中心に守りを固めてもらってるよ。それに山越の方もこちらが守りを固めているという時点で無理に攻めてきたりはしないだろうね。念のため、遊軍として魯肅を大将に張昭と張鉞を軍師にし、徐盛、朱桓、全？、丁奉らに兵3万を預けてる」

雪蓮「流石♪ 手が早くて助かるわ」

「一応冥琳には許可を貰った後で派遣したんだけどね。って言うか本当なら許可を貰うべきは雪蓮のはずなのに肝心の雪蓮はその時、どこにいたのかなあ？」

雪蓮「（フィッ）ささ、仕事に戻らないとね」

目を反らしつつ、その場から退出する雪蓮

「「「「「（逃げたな）」」」」」」

雪蓮以外の心が一つになった瞬間だった

それから二日後：

龍司達は急がしいなか、健康診断を行うことになった

午前組は蓮華、小蓮、穂、亞莎、思春、朧、月、詠、
午後組は雪蓮、冥琳、百合、明命、祭、恋、ねね、龍司
という組み合わせになっている

「さて、今日はよろしく頼むね、華陀」

華陀「ああ、任せてくれ。それにしても病気を早期に発見するため
に身体の診断か：他国ではやっていないことだな」

「天の御遣い故の智という訳だよ。それにこれはまだ実際に普及さ
せるには医者数が足りないからね。もっと色々と詰めていかない
と：」

華陀「だが、少しでも多くの命を救おうとするその志！俺は立派だ
と思うぞ！！」

「ありがとう、でも心だけでは駄目だ。実行できなければ意味はな
い。だからこそ：俺は自分に出来ることをやる」

華陀「ふむ、やはり噂通りだな」

「噂？」

華陀「ああ、民の間では呉の天の御使いが来てからは生活が楽にな
ったとか、作物が良く育つようになったとか、子供が元気に生まれ
るようになったとか。とにかく民の間ではお前の高評価が絶えない
な」

「：あり、まあ褒めてくれてるのなら良いんだけどな」

華陀「ツと、それはそうと：あれは本当なのか？」

「ん、俺の知識が間違っていないのならな。冥琳：周公謹は病を患
ってるはずだ」

今回、龍司が急にこのような事をしたのは、冥琳に異常を感じた為である

そこで、龍司は忠志では周公謹は若くして病で倒れたというのを思い出した

最もその原因となった物は異なるようなのだが：

龍司の知る歴史だと、周瑜は南郡攻略の際に曹仁の策に掛かり、毒矢を受け、その矢じりが骨まで届いてしまっていた為、金そうの病に掛かったそうだ

龍司はここ最近冥琳の様子がおかしいことに気が付いていた

確かに龍司と冥琳は特に仕事が忙しいが、冥琳の方は時折咳をしていた

本人は風邪だと言っていたのだが：

その咳の頻度も具合も普通の風邪ではないような気がしたのだ

故に、龍司は偶然近くまで来ていた華陀を呉に招き、健康診断の実験を兼ねる上で、冥琳の体を見てもらうことにしたのだ

そして：

午前の組の診察が終わった

思春「：今のところ健康か。：だが」↑ふと自分の胸を見下ろす

蓮華「／／／か、胸囲や腰回りまで測るとは思ってなかったわ」

小蓮「ぶうゝ、お姉ちゃんのように胸おつきくならないかなゝ」

蓮華「じゃ、小蓮！！　そのような事を大声で！！」

小蓮「だって〜」

亞莎「うう：私、目がまた悪くなったみたいです」

詠「それにしても視覚検査って言うのは良いわね。どれだけ目が悪くなったのか分かり易いわ」

朧「：た、体重が増えてるOTZ」

月「だ、大丈夫ですよ！ 朧さんは武官なんですから！ 動いてい
るうちに体重は減りますよ！」

：結果を知って色々と思うところがあつた人が多数

そしていよいよ、午後組の診察が始まった

と言っても龍司は別室だが

まあ男だし：

雪蓮は面白そうだから一緒にやりましょう

なんて言ってたけどね：

龍司が力強い拒否&逃走したから

とりあえず龍司は健康診断を終え、華陀のいる部屋に向かうことに
した

冥琳は何かと理由をつけて体の状態を見るのを一番最後にしてもら
うように仕向けた為である

もう少しでその部屋につくであろうという時：

雪蓮「…龍司」

「雪蓮か、どうかしたの？」

雪蓮「教えて、どうしてこんなに急にこんなことをするって決めたのか」

「…：…何のことかな？ 俺はただ」

雪蓮「龍司？」

普段の雪蓮とは打って変わって真剣な声と顔
恐らくは自分の目的をも察知しているのだろう
龍司は相変わらず雪蓮の勘は怖いと感じた

「…：雪蓮、冥琳の体どう思う？」

雪蓮「…：やっぱりそのことだったのね」

「気付いてたんだ」

雪蓮「それは当然でしょ？ 何年一緒にいると思ってるのよ」

「…：俺の記憶に間違いがないのなら、冥琳は病気で死ぬ」

雪蓮「っ…」

「だから俺はそんな未来を変えたくて、こうして華陀を呼んだってわけだ」

雪蓮「…：冥琳は、治ると思うの？」

「治る」

雪蓮「…：もし、華陀の手に負えないものだったら？」

「治る方法を限界まで探す。あきらめたらそこで終わりだ。だけど諦めないのなら道は必ずある。例え、どんなに厳しい物で可能性な

ど殆どなくてもだ」

雪蓮「：そうね、何弱気になってたのかしら私は。：ねえ、龍司これから冥琳のところに行くんでしょ？」

「ああ」

雪蓮「私も行くわ」

「当然だ（ニツ）」

二人で冥琳と華陀のいる部屋に行くと、そこには深刻な顔をした華陀と、何か悟った様な顔をしている冥琳が居た

「どうだった、華陀」

華陀「：結論から言うと、かなり難しい。本当ならこんな状態なら歩くことすら厳しいだろうに。大人しく寝ていれば確実に助かったはずなのだが：長年の無茶が余計にこの病の進行を助長させたのだろうな」

雪蓮「：冥琳」

冥琳「雪蓮：そんな顔をするな。私はこの事を覚悟していたのだからな：悔いはないさ」

雪蓮「：冥琳はあとどれくらい生きられるの？」

華陀「そう長くはない：とだけ言っておこう」

雪蓮「……………」

皆が暗い面持ちの中一人だけ、全く別のことを考えている人物がその部屋に一人いた

「華陀、何か案はないのか？ 例えば可能性は低いが、助けられる方法とか」

華陀「…あるにはあるが」

「それは？」

華陀「…もし、周瑜を直そうというのなら俺は約半日、彼女の体に鍼を打ち続けなければならない。だが、それにはそれ相応の氣が必要となる。だが…俺が氣を込めた鍼を打ち続けられるのはその5割ほどの時間のみだ。残りの5割を終える前に俺は氣を失うだろう。そうなってしまえば術式は失敗に終わる」

「成程…じゃあその氣をどうにか増やせないか？」

華陀「氣というのはすぐに増やすことの出来る物じゃない。長年の経験と綿密な修行によって生まれる力だ。つまりは…俺はまだまだ半人前ということだ」

「華陀…」

華陀「つと話がずれたな。だが、その氣をどうにかする方法が一つだけある」

雪蓮「それは！？」

華陀「…他者からの氣を供給することだ。だがこれは簡単なものじゃない」

「？ どうしてだ」

華陀「氣はそれぞれ波長や特性を持つものだ。それこそ人の数だけな。故に、俺に氣を供給できるのは俺と同等の波長や特性を持つ氣のみということになる。だが…それを見つけるのにどれだけの時間がかかるか…加えて、もしその者が見つかったとしてもその人物が氣を使うということを知らなければ更に時間が掛かってしまう。そうなれば…」

冥琳「…私は助からないという訳か」

華陀「…スマン」

せっかく見つかった冥琳が助かる可能性

これ以外にないのだろうと踏んだ龍司はとある提案を試みることにした

「…ならこの城にいる氣を使える人たちを集めて氣の状態を見てみるって言うのは？ 俺のいた場所にはこういう諺がある。【下手な鉄砲数うちゃ当たる】用は動かないと何も始まらない、人は動いてこそ可能性を生み出せる生き物だ」

雪蓮「龍司…そうね、じゃあ私は明命、思春、祭、百合を呼んでくるわ。皆、氣を使うことに長けてるから」

「…華陀、一応俺のことも見てくれるか？ 俺は氣は分からないけど、一応」

華陀「ああ……Σ こ、これは…」

「？ どうした、華陀。俺の体に何か？」

華陀「…凄い。お前の氣は変幻自在と言ったところか…誰の氣にも適合する特質を持っているみたいだ。現に今、俺はお前の氣の中に俺と同じ氣質を感じている」

「は？」

華陀「俺の氣質とほぼ同等だと言ったんだ！！」

「…マジで？」

華陀「ああ！！ まさかこんなに近くにいたとは…」

雪蓮「へー、じゃあ龍司は冥琳を助けるための鍵ってわけね♪」

雪蓮が出ていく前に龍司の氣が判明したため、足を止め話を聞くことにしたようだ

だがこれでもまだ問題が残っていた

冥琳「だが……龍司は氣の使い方知らないのだろう？」

「あ…」

冥琳「氣はそれほど簡単に扱えない、だったな。それでは…」

ここまで分かって…自分に冥琳を助けることの出来る可能性があると
 ところまで来て…

歯痒かった

せつかく目の前にある可能性に手が届かぬ自分の未熟さに……
大切な場所に一緒に居たい大切な人の一人を助けられないことに……

龍司はその苛立ちを……

「くそおおお——！！！！！」
（バ
キャッ！）」

（ハ）

その部屋にあつた椅子にぶつけた

雪蓮「ちよ、ちよつと龍司！ 落ち着きなさい！！」

「ハア……ハア……クソツ……！」

華陀「…ちよつと待て、今、氣を使わなかつたか？」

雪蓮「え？でもそんな感じはしなかったけど…」

華陀「…頼む、もう一度力を込めてくれないか？」

「あ、ああ……」

龍司は言われたとおり、先程のように力を込めてみた

華陀「…駄目だ、先程のような力は感じない」

雪蓮「…もしかして、怒りが原因なんじゃない？」

華陀「Σ そうかもしれない」

雪蓮「龍司…さっきみたいに怒ってみてくれない？」

「いや、そんなことを急に言われても」

雪蓮「…お願い、華陀の言ったことが本当ならそれが糸口になるかもしれないの…」

「……やってみる」

龍司は言われたとおり、目を閉じ、先程のように怒りを感じてみることにした

例えば、雪蓮の仕事を押し付けられて一日中部屋に缶づめだった時のこと…

例えば、雪蓮に無理矢理酒を飲まされて冥琳の怒りを買い、仕事をその日は倍こなす羽目になったこと…

例えば、雪蓮の悪戯で下着姿の雪蓮が龍司のベットに入り込んでいる光景を蓮華と小蓮に目撃され、追い回されたこと…

ムカツ…

何だろう、俺って雪蓮にばかり苛々させられてるのか？

そう考える龍司：

華陀「んゝ、先程よりも力は弱いが…やっぱり少々力を感じる。多分、無意識に氣を体に覆わせているんだろうな」

雪蓮「そんなことが可能なの？」

華陀「普通なら無理だ、だが…現に彼はそれをやってる」

雪蓮「これを意識下で制御できるようになれば…」

華陀「ああ、成功は確実だろう」

雪蓮「ねえ龍司！聞いた？ 龍司の氣が上手く制御できれば冥琳も…」

未だに目を閉じていた龍司を呼び掛ける雪蓮だったが…

「…雪蓮」

雪蓮「え？」

「……何か今、怒りを覚える光景を思い出してたんだけどさ…それの大半の原因が雪蓮だったんだよね」（怒）」

雪蓮「あ、あはは…り、龍司？ め、目が怖いわよ？」

「…………雪蓮？」

雪蓮「ゴメンナサイ」

流石に今の状態の龍司が怖かったのか
即座に謝る雪蓮だった

精神的な面で雪蓮よりも大人な龍司はとりあえずそのことは後にしておいて今は目の前の問題に取り掛かることにした

「で、華陀。どうすれば俺はこの氣を制御できるようになるんだ？」

華陀「：それだけの質を持つ物なら本来、何年もの修業を必要とする。だが、お前はそれを無意識にとはいえほぼ完璧に使いこなしている。故に、お前に必要な物は自分の氣を知ることと意識下で氣を使うことになれる。そして最も大事なのは、自分の氣を他者に送ること。これが出来なければ、お前が自分の氣を自在に使うことが出来るようになったとしても意味がなくなる」

「：期間は？」

華陀「本当なら3月はやっておきたいところだが：時間がないだろう？　なら、十日でやれるか？　俺もこの後旅を続けなければならぬし、お前だって仕事やらなければならないことが山積みなのだろう？」

「：充分だ、それだけの時間があるのならやってみよう」

雪蓮「なら、祭、明命、思春、百合には龍司のその特訓の補助を担当してもらいましょう」

「：事情は？」

雪蓮「その4人には固く口止めしておく上で話しましょう」

「分かった、その辺は任せる。華陀、後何か必要なものはないか？」

華陀「いや、特にないな。では10日後にまた会おう。俺はそれまでに必要な物を準備しておく」

「了解だ、こちらも必ずやってみせる」

華陀「ああ」

華陀が退出した後、雪蓮と冥琳と龍司の間には少々重苦しい空氣が

漂っていた

冥琳「…龍司、無理する必要などない。お前にはまだまだやらなければならないことが…」

「それは全部後回し」

冥琳「なッ…すべて国の大事に関わることなんだぞ！ それを私などのために後回しにするなど…」

「言っておくが、俺はこの決断を曲げる気はないね。冥琳はこの呉にとっても…そして雪蓮達にとっても…俺にとってもいなくなつて欲しくない存在なんだよ」

冥琳「…龍司」

雪蓮「諦めなさい、冥琳♪ こうなつた龍司はもう止められないわよ」

冥琳「ハア…お前も止める気はないのだろう、雪蓮」

雪蓮「当たり前じゃないの」

「という訳で雪蓮達には俺と冥琳が居ない間、きっちり仕事をこなしてもらいましょう」

雪蓮「…へ？」

「俺は可能な限り氣の習得のために時間を使わないといけないし、冥琳は無理に体を動かすことは華陀に禁じられてる。つまりはこの10日間、雪蓮達は俺と冥琳抜きで仕事をこなしてもらうことになる」

雪蓮「うわゝ、本当に？」

「勿論、俺も可能な限り仕事のために時間は作るが、多分いつもの半分が限界だろうな」

雪蓮「…もう一声頑張れない？」

「無茶言わないでくれ。俺が死ぬ」

雪蓮「う、うううゝゝゝ…わ、分かった。頑張るわ…」

何だか信用ほぼ0だが、とりあえず雪蓮も10日のみ仕事を頑張ると約束してくれたようだ
：何処まで信用できるかわからんが

冥琳「ふふ…」

「？　どうかしたのか」

冥琳「いや、何でもない。ただ、あの雪蓮が仕事をすると約束するなんて今まであまり見たことがないのでな」

「あゝ、そういうことね」

確かにいつもの雪蓮は冥琳の催促があって初めて仕事を（しぶしぶ）やるって感じだからな

冥琳「：龍司、私を助けるために頑張ってくれるのはありがたいが：決して無茶はしないでくれ。お前は呉にとって必要な存在なのだからな」

「ふ、言われるまでもない」

龍司の力の秘密（後書き）

：一応、私自身の中では氣というものは科学的に証明できない魔法とは異なる力だと思っているので、この小説でも度々利用させてもらいます

まあ、主人公チート&都合主義な面が多いですが：

暗躍する影

↓???↓

「ふふふ、彼はついにここまで来ましたか。ここからどうなるのか非常に楽しみですね」

一人、丸い球を覗き込み一人で何かつぶやいている人物が一人…その丸い球に映し出されているのは…

先程まで華陀と話していた龍司の姿だった

「ふふ、彼をここに送ったのは正解だったようですね。これで今まで変化のなかったこの世界も少しは面白くなるでしょう」

そう、この人物は龍司を雪蓮達の上に転送させた張本人

「あはは♪ 楽しませて下さいね、城崎龍司さん」

バチバチバチ…

「おや、客人ですか？ この結界を越えてくる者と言えば…」

バンツ！！

???? 1 「き、貴様ぁー！！！！」

???? 2 「あの時は良くもやってくれましたね…」

???? 「おやおや、誰かと思えば雑魚ですか。何か用ですか？」

???? 1 「何か用ですかじゃねええ！！ 貴様が勝手にあの世界を
改変したんだろう！！」

???? 「ええ、ちなみに【上】からの許可は頂いてます。つまり、
もうあの世界を元に戻そうとすることはあなた方には出来ないとい
うことですよ。于吉、左慈」

于吉 「くっ、どうしてお前があの世界に手出しする！！」

???? 「簡単な理由ですよ、貴方方が管理し続ける世界など面白
くないからです」

左慈 「なッ、そ、そんな理由で…」

???? 「私にとっては十分過ぎる理由ですよ。という訳で♪」

その人物が一つ何かをつぶやくと…

左慈 「グッ…」

于吉 「かつ…」

突然、二人が苦しみ出し…

そして…

于吉「な、なんですかこれは…」

二人の体がどんどん消えていった
まるで世界から存在を消されるように…

???「どうせ貴方方のことだから余計な干渉をしようとするでしょうしね♪ 暫くの間、封印させてもらいましょう」

左慈「グウ…」

???「ではまた会いましょう♪」

于吉「こ、この…」

そして、于吉と左慈と呼ばれた二人は…

完全にその場から居なくなった

???「やれやれ、うるさい輩は嫌いなんですよ♪ さてさて、次の舞台が始まる頃ですね」

——— 精々私を楽しませて下さいね♪
ノウェルⅡ ガンランスさん
いえ、城崎龍司さん♪ もしくは…

暗躍する影（後書き）

とりあえず今回以降、于吉と左慈は出て来なくなります

氣の訓練…そして治癒

龍司は華陀の助言を得てから氣を習得する訓練を始めた
と言っても龍司自身がもう既に氣を無意識に使いこなしているそう
なので後は意識して使うようにするだけなのだから、普通よりは楽
らしい・・・

一日目：

祭「龍司、そうではない。こうだ」

「こ、こう？」

祭「ああ、そうやって自分の氣を感じろ」

一日目は仕事は警邏が終われば暇だという祭に手伝ってもらうこと
にした龍司

とりあえず祭に言われたとおり、自分の氣を感じるために祭の氣を
感じることから始め、龍司は直ぐに祭の氣を感じることは出来たの
だが：

肝心の自分の氣を感じるということは出来ていなかった

祭「ふむ…どうして龍司は自分の氣を感じられんのじゃろうか」

「そ、そんなこと言われてもなあ。俺が氣を使ってるってことを知
ったのは昨日のことだし…いきなり言われてびっくりしたんだしな
あ」

祭「…本来、氣というものは使い手の意思が関係してくる面が多い。
龍司が怒りを感じると氣を発動させるものと同じようにのう。じゃ
が…このような氣の使い方は正直今まで見たことがない。お主、ど

この誰にこれを教わったのじゃ？」

「うゝゝん：とりあえず、氣を使うなんてことを教わってはいないけど、俺が所属してた部隊で【鬼の副長】て言う二つ名を持つ人が凄く厳しく俺のことを訓練してくれて：多分、その際に覚えたんだと思う：確証は持てないけど」

祭「ふむう：それならその時の訓練のことを思い出してみるというのは？」

「勘弁して下さい！！！」

祭「ど、どうしたのじゃ？」

突然、龍司が大声を出したと思ったら見るからに震えだしていたそれはもう、震源地龍司、マグニチュード7と言ってもいい位に：

「ああ：副長、チョッ、マッ！？　ムリムリムリムリデスカラ

！！！！　何それ、何でコブラとクロコダイル用意してるんですか！

？　それって副長のペットですよね！？　え、何：訓練に参加させる！？

離脱したら餌決定？！　ちょ、ふざけ：ってぎゃああああ

あああああー！！！！！　かすった！？　今かすった

よ！？　冗談抜きで今鰐の牙が俺の腕かすったからあー！！！！

！！　マジ無理！！！！　俺こんなところで死にたくないですから！

！！　だから副長！！　お願いだからこの二匹どうにかしてください

いー！！！！！　：え、生意氣言ったから虎も追加？　ちょ

っ！！！！！　副長、俺が猫嫌いなもの知ってますよね

！！！！　なのにここで虎加えるってあんた鬼畜か――！！！！

って、うぎゃあああああー！！！！！　何で俺だけ標

的になってるんですかー！！！！！　ほ、他にもいるでしょ

う！？　ターゲットはまだいるでしょう！！！？　何で俺だけ集中

砲火なんですかあー！！！！！　って、副長：その手にある

のは何でしょうか？ 俺には弓にしか見えないんですけ（ヒュンッ）
 ってうおおおおおー！！？

あ、あああああああんた俺の顔狙ったでしょ!? 今頼か
りましたよ!?! つてきたああああああ……!!? い
やああああああ……!!!」

祭「り、龍司……!? 悪かった、儂が悪かったから目を覚ますのじや!」

「あああああああああああああああ…」

当時の光景が蘇り、脳内にフラッシュバックしたため、完全に混乱状態になってしまった龍司……

彼が再び正氣に戻ったのはそれから2時間後だったとか……

「……」

祭「いや、本当にすまなかった。まさか、あんなに過剰に反応するとは思わなんだ」

「…いえ、俺も話してませんでしたから」

「そ、それほど厳しかったのか？」

「厳しかった？　ハッ、そんな言葉で済めばいい位ですよ……！！！！」

あの人の訓練（という名の地獄）はそんなものじゃありませんから！！！！

あの人は魔性のどSなんですよ！！

人が苦しんで訓練受ける様を見るのが大好きな魔王様なんですよ！！！！

正直言っただけの人の訓練受ける位なら恋と雪蓮と思春と明命と朧と祭さんと百合を同時に相手にした方が数100倍ましですから！！！！」

祭「そ、それほどののか？」

「…副長曰く、「大丈夫♪ 人間、そう簡単に壊れないから♪ 身体の方は一定を越えなければ、治るしね。あ、でも心の方は自己責任でお願いね」と言いながら、人間の許容範囲を明らかに越えた訓練させますから。しかも途中離脱は絶対に許してくれませんでしたし」

祭「そ、そうなのか？　じゃがいくら何でも策殿たちを一斉に相手にした方がましというのは…少々言い過ぎなのでは？」

「…なら祭さんも体験してみる？　俺はあの訓練の詳細まで覚えてるから実行可能だよ？」

祭「…いや、やめておこう」

龍司からあふれ出ている負のオーラを感じ取ったのか、祭はすぐさまその話を打ち切ることにしたようだ

祭「さて、話を戻すかの。龍司は、正直言って氣の量も質も十分過ぎるほど所有しているにも拘らずそれを自らの意思で使用することは出来ないでいる。それはその副長とやらの過剰なまでの訓練が原因とみてもいいんじゃない？」

「ああ…あの時は生き残るのに必死だったから…多分、その訓練の中に氣を使うという項目があったんだと思う…」

訓練で生き残るのが前提って…どんなんよ

祭「ふむ…ならば他の者の氣を感じ取り、氣の違いを理解するというのはどうじゃろう？」

「あ、それはいいかも。そもそも俺は氣の知識は全くないし…思春とか明命達の時間がある時までの時間は氣についての書を読んでおいた方がいいかもしれないな」

祭「ふむ、ちょうど書庫には穩がいるはずじゃ。穩にそういう類いの書があるかどうか聞くとよいじゃろう」

「ありがとう、祭さん」

祭「何、冥琳を助けようとしてくれてる龍司を支えるのも仕事のうちじゃしな。それに…儂とて冥琳が助かるのならどんなことでもやりたくなるんじゃないよ」

「…祭さん、絶対に冥琳は助けます」

祭「うむ、信じておるぞ」

龍司は祭と別れ、穩のいる書庫に行くことにしたが、龍司は何となく嫌な予感を感じ取っていた。だがその時、龍司の頭の中はいち早く氣に関する書を読まなくてはという考えで一杯だったため、以前冥琳に忠告されたことをすっかり忘れていた

冥琳「穩に本を読ませたり、もし万が一読んでいる時に近づいてはならない。その理由は…」

書庫にて……

穩「あふう~~~~…良いですねえ~~~~♪ ああ~~~~ん」

「……………」

何だろう、雅とは程遠く…本来静かであるべき書庫から妖美な声が聞こえるのだが…

「…これって穩の声だね？何をやってるんだ……………」Σ　そ、そういえば、冥琳が言ってたっけ。読書する際の穩は発情してるって…」

うわぁ…何だろう、今の俺の気分は虎の口の中に飛び込みそうな兎なんだけど…

なんてことを思っている龍司だったが…

兎に角ここに入って氣に関する書を手に入れないといけない為、氣を引き締めて書庫に入ることにした

穩「ハアハアハア…」

「うわぁ…」

龍司はその光景に引かざるを得なかった

本をぺらぺらと捲る様は絵になる位に穩は可愛らしいのだが…
顔が…蕩けてる

と言うか盛りのついた犬かと思ってしまう位に息を荒げていた
こんな穩に話しかけたら自分はもうなってしまうのだろうなどとい

るかぁー！！！！！！」

穩「嫌ですね、そんなこと女の子に言わせないでくださいよ」

「よし、いったん落ち着こう！　まずは落ち着こう！　だから俺を解放してくれ！！！」

穩「駄目です」　介抱した途端に逃げられてしまうと思いますから」

くっ……どうする、このままだとなし崩れで【アーーーーーッ！】なことになってしまうのは明白だ！

問題だ

この状態でどうやってこの場から逃げ出す？

1. ハードボイルド（嘘）な俺は突如、穩との体制を入れ替え、且つ恩を氣絶させ脱走する
2. 誰かが来て助けてくれる
3. 逃げられない、現実是非情である

「（お、俺的に2を選びたいところだが、この時間大抵の人たちは仕事でこの書庫には寄ってこない。正直言って絶望的だ……なら！！）」

龍司は何とか隙を見て穩の体をどかし、自分が優位に立てる体制に持ってこようとした

だが…

穩「（キラーン♪）甘いですよ♪ 龍司さんがこの場をどうにかしたい為に私の体をどかして逃げようとしているのは計算の内です」
「な、何!？」

ガシッ

龍司は更に体を固められ身動きが取れなくなった
普段の龍司ならこの位の拘束など難なく解き、逃げる事が出来る
のだがこの時の御それが出来ずにいた
その理由は2つ

1つは穩が女性であること

龍司は副長の教えのせいで女性には乱暴してはいけない、女性は大
切な存在と教え込まれたせいで比較的拳を振るえないのだ（勿論、
例外はあるのだが…）

二つ目は龍司の目の前でブルンブルン震えているけしからん物体が
2つ

これでも龍司は健全な男

しかも思春期真っただ中の青年である

故に、こういったことに全く興味が無いとは言えないのだが…

何分、免疫がなさすぎるためこういったことには弱いのだ

以前、雪蓮に襲われた時もやられ放題だったし…

故に体に力が入らないのである

「穏、お願いだから止めて!! こういったことしたいのならもつと別の時間、別の場所でやるのが筋でしょ!？」

穏「そうですね、ですが…もう体が熱くて我慢できないんですよ♪」

「や、やめ…だ、誰か助け…」

穏「ふふふふふ♪」

「(も、もう駄目だー！ー！ー！)」「↑思わず目を閉じる

もう終わりだと思ったその時…

トンッ

穏「ふぁ？」

ドサッ…

「…………あれ？」

中々穏が何もしようとしないことを不思議に思い、恐る恐る目を開けていくと

思春「全く、何をやっている」

思春が目の前に居た

龍司は少しずつ落ち着いていき、状況を把握することが出来た

「し、思春！？ 何でここに…」

思春「何って…忘れたのか？」

「…あれ？ もしかして氣の使い方を教えてもらう時間？ でも少し早い様な気がするんだけど…」

思春「訓練が少し早く終わったから早めに来てやっただけだ。それなのに肝心のお前が居なかったから探してやったら…」

「…し、思春…！！！！（ギュッ）」

思春「！？ な、なななな！？」

龍司は何となく思春に抱きついた理由は…

やはり先程の穩が余程怖かったのだろう

あのまま喰われていたら…恐らくヤバイ状態になっていたことだろう

そう思うと龍司は思春に感謝しざるを得なかった

「ありがとう！！！！ 本当にありがとう！！！！」

思春「な、ななななな…」

「し、思春が来てくれなかったら今頃凄く大変な目にあってた！！！！ 絶対に！！！！」

思春「あ、ああ。わ、分かった…分かったからお、落ち着け／／／」

「え…あ、わ、悪い！！！！ ちょ、ちよつとその…混乱と感謝の氣持ちがごっちゃになって…」

思春「…穩様の癖は知らなかったのか？」

「…忘れてた。その…祭さんにこの書庫に氣に関する書物があるからそれを参考にした方がいいって言う助言貰ったから、それを探す

ことを脳が優先してたみたいで…」

思春「ハア：その本なら私も読んだことがあるから何処にあるくらいは知っている」

「あ、そうなんだ。じゃあ、教えてくれないかな？」

思春「ああ、こっちだ。だが：何故お前はここまで熱心に」

「当たり前だろ？ 俺はこの世界に来て、雪蓮達に助けられた。だからその恩に報いるために俺は俺の最善を尽くす。ただそれだけだ。そして、今冥琳は俺の氣の訓練の成果次第で今後生きられるかどうかが掛ってるんだ。必死になるのも当然だ」

思春「ふ、そうか」

「あゝ、それからもう一度謝っておくね。思春、さっきは抱きついてごめん」

思春「……………き、気にするな」

何か間が凄く長かったけど、そんなに怒ってないようだったので龍司は一息つくことが出来た

これから氣の使い方を教わるというのに、思春の機嫌が悪い状態だと色々と良くないと思ったためである

龍司は思春と共に本を探し、それを手に入れた後何事もなかったかのように書庫から立ち去って行った

氣絶した穂が目を覚ましたのはそれから2刻後のことだったということは余談だが：

その後、龍司は思春の指導を受けながら必要な事は携帯していたメモ帳にメモを取り、思春が仕事に戻った後は先程手に入れた氣につ

いての本を読みながら氣に関する知識を洗い直し、頭に叩き込むことにした

夕暮れが近付いてきたことを知ると龍司は再び仕事に戻り、自分のやるべきことを終えた後に再び本を読む

それを繰り返し繰り返し行った

二日目：

明命と百合が教えに来てくれた

少しだけ自分の氣が理解出来たような氣がした
一歩前進

三日目：

蓮華が皆の様子がおかしいことを相談しに来た
無理もないだろう

冥琳の件を知っているのは現在、龍司、雪蓮、祭、思春、明命、百合、華陀のみなのだから

今は大事な時期ということで皆の指揮を下げない為に内密に行おうという意見が出たため、誰にも口にしないようにしているのだ

とりあえず龍司は氣のせいだと蓮華に告げ、誤魔化すことにした

その日は思春と祭が氣についての訓練に付き合ってくれた

四日目：

ようやく自分の氣の存在をはっきりと理解出来るようになった
華陀に確かめてもらった所、意識的に氣を使いこなせるようになった
たと太鼓判を貰った位だ

龍司はもう天才としか言いようのない位、習得が早かったようだ

五日目：

今日から自分の氣を他人に送る訓練を始めることになった
時間の関係上、仕事の時間以外は華陀と共に過ごし、華陀に氣を送る練習をした

本当ならそれはかなり危険な行為らしい
慣れてもない間に氣を他者に送るために自分の氣を変換させると
いうことはかなりの技量と長年の経験がいるのだ
だが、幸いと言うべきなのだろうか：

龍司は誰にでも他者より楽に氣を変換しやすい質を持った氣の持ち主のため、技量の方はさほど必要なかった
それよりも今はまず経験という訳で華陀が自分から名乗り出たのだ
った

最初は本当に酷かった

人が爆発するなんて想像もしなかったから

「…スマン」

華陀「ゴホッ！！　ゴホッ！！　き、気にするな。まあ少し変換量が多過ぎたが故に拒絶反応を起こしたんだろう…ここまで派手なのは初めてだな」

「う…」

華陀「まあ良い、それよりも一定量を絶えず供給し続ける練習を続けよう」

「ああ、分かった」

その日、幾度なく爆発はしたもののその成果のお陰で龍司は華陀に送るべき一定の氣量を知ることが出来た

六日目：

再び、氣を送る練習

途中で明命や思春が果物を届けてくれたりした

百合は疲れただろうと龍司の体を労り、筋肉の疲れを癒す為に肩をもんだりしてくれた

祭の方は…何故か酒瓶を持ってきた
勿論、龍司は低調にお断りしたけど…

七日目：

今日は華陀と一緒に必要な材料を買いに行くことにした

何でも今回使う葉は一般の市場でも手に入る物が多く必要だそうでその際に雪蓮とあったけど…

何だか雪蓮は元気がなさけだった
心配になって声をかけたのだが…

雪蓮「あ…龍司」

何だか気分が凄く悪いようだった
心配してどうかしたのかと聞いた龍司だったが…

雪蓮「うう…冥琳と龍司が抜けると…ここまで仕事が大変だなんて
…お酒飲んでる暇がないわ…」

…心配して損した
そんなことを思った龍司だった

「ハア…先日、色々新しい人を取り上げただろ？　かなり優秀な人
たちが入ってきたし、さほど雪蓮の仕事の量は変わってないと思う
けど？」

雪蓮「…そうなんだけどね」

「だったら頑張ってね。あと少しで俺も冥琳も本格的に仕事に戻る
から」

雪蓮「ふふ、まだ成功していないのに余裕があるのね♪」

「勿論、失敗する気なんてないからね」

雪蓮「頼りにしてるわ」

再び、訓練と仕事の両立の再開：

八日目：

この日、ようやく4刻続けて氣を送ることに成功
ここまで来ると、もうほとんど成功したも同然と言ってもいいらしい
残りは当日の集中力と体調の善し悪しが作用するらしい
故に残った明日は一日丸々休みを取ることになった

ちょうど良いと思い、龍司は冥琳を誘うことにした

冥琳はこの8日間、部屋でゆっくりと養生し、仕事には一切関われない様になっていた

こうでもしないと仕事をしてしまうだろうという祭と雪蓮の意見があった為である

まあもうだいぶ長い間休むことが出来たようなので明日くらいは外に出ても良いだろうという華陀の許可も下りたためというのもあるし、ずっと部屋に籠りっぱなしというのも体に良くない為、龍司は冥琳を誘ったのだ

最初は少し迷っていたものの、冥琳は承諾した

九日目：

「冥琳はどこに行きたい？」

冥琳「そうだな…少し本を見ていきたいな」

「ん、じゃあ書店に行こうか」

当日、特にプランを作っていなかった龍司

というのでも冥琳のことを考えると無理に考える必要ないのではと思

ったからである

「ふむ…この建業は都から離れているが故に本の仕入れが悪かったが…今はすっかり変わったな」

冥琳「それはお前の案が関係してるのだろう。天の世界の智というのは我らの智の遙か上にあるようなものだしな」

「それは言い過ぎだと思うけど…俺の意見だけじゃなく、雪蓮の名も関係してるでしょ？ 善政をし、悪事は許さず。…まああの本人は色々アレだけど…」

冥琳「ふふ…ああ、だがこういうのも悪くないと思えてしまうのだから不思議だな」

「あはは、確かにね。でもそれは皆が居る呉だから…そう思えるんだ。だからこそ、一人でも欠けることは大変なことなんだ」

冥琳「…龍司」

「だから絶対に死なせない」

冥琳「ああ…信じさせてもらうよ」

「ふ、任せろ。なんたって俺は天の御遣い、城崎龍司なんだからな。こんなときくらい、奇跡の一つや二つ、起してやるよ」

…色々が無茶苦茶な上に根拠のない自信なのだが…

今までの龍司が龍司なので不思議と信じられる強い意志を感じ取ることが出来た冥琳だった

十日目…

今日はいよいよ冥琳の治療の日だ

華陀「用意はいいか、龍司」

「ああ、任せてくれ華陀」

龍司は自分の仕事が始まるであろう時間までゆっくりとリラックスしていた

仕事は今日限り、月と詠に代わってもらい、そのサポートとして亞莎に手伝ってもらえるようにしたのだ

因みにこの部屋に入ってからようやく華陀に名を許すと言えた
なかなか色々と行き詰っていたため、機会を失っていたので遅くな
ってしまったのだが：

術式は当に始めていて、既に4時間を過ぎていた

それだけの時間、氣を込めながら鍼を打ち続けている華陀の額には
既に大量の汗が流れていた

それを雪蓮が事情を話し、協力してくれることとなった女医の人が
拭いていく

そして、途中お腹がすいたりしたら、侍女が食べさせたり水を飲ま
せてくれたりしているなど華陀の補助は徹底されていた

龍司「：これだけの采配、普段からやって欲しいね」

大半の者に秘密にしながらこれだけの手配をやってくれた雪蓮に感
謝しつつ、龍司は最終確認として自分の氣の状態を確認することに
した

集中し、自身の氣の溜まり場の位置を把握

そして、氣量と質の再確認と氣流の状態などを確認しておいた

「……問題なし、華陀。こっちは氣の状態は万全だ」

華陀「ふ、そうか：こちらも今のところ問題はない。そろそろ氣の供給を始めてもらえるか？」

龍司は華陀の肩に手を置き、氣の供給を開始した
変換しながら氣の供給：

言うだけなら簡単に聞こえてしまうのだが、実際はかなり難しいため、余程の玄人出ない限りしようしない方法なのである

何故なら、氣というのはいわば人間の生命力を形に成したものと同義であるため、氣を与え過ぎると自身が死んでしまったり、間違った氣質の物を他者に送ってしまうと先の例のように爆発したり、氣脈が変動してしまったりするためである

龍司の場合、練習の際は氣量がかなり少なかったため、爆発は小さかったため大事にはならなかったのだが：

だが、今龍司が華陀に送る氣量は失敗すれば確実に両者に痛いしつぺ返しがくるものだ

尚且つ：

これが短時間であるのなら、さほど問題はないのだが：

2時間後：

「グッ…」

華陀「ふう…ふう…」

華陀の方は慣れがあるのか龍司よりは聊か顔色はまだまだ大丈夫であつたが、龍司の方はもう既に疲れが見え始めていた

4時間後…

「ぎっ…がっ…ハッ…」

華陀「ハア…ハア…だ、大丈夫か？」

「だ、だいじょう…ぶ…ま、まだ…やれる」

あともう少しなのだが、既に二人とも疲労困憊と言つた所だつた
華陀の方も顔色がもう既に悪く、龍司に至っては意識を保っている
ギリギリの状態だと言えるほどの状態になっていた

そんな状態でも龍司は決して集中力を乱すことはしなかった

この時、自分の今の体のことよりも冥琳の命のことを一番に思つて
いたからである

精神が肉体の限界を超えた瞬間であつた

だがその精神も少しずつ疲労や心の弱さが少しずつむしばみ始めて
いた

「くっ…」

《もう十分じゃないのか？》

「……ちっ…」

《お前はもうやれるところまでやったよ。これが今のお前の限界だ

よ

「…………い」

《冥琳だって最初は諦めていたじゃないか。そんな命をお前がそこまでして救う必要などないだろう》

「……さい」

《そもそも確かにお前は冥琳に恩があると言っていたが、そんな小さなことで危険を冒すなど愚の骨頂だろうに…そんなこと、分からぬお前ではないだろう?》

「…るさい」

《そもそもお前は…》

「五月蠅い!!!!!!」

華陀「どわぁ!?!」

くそっ!! 辛いからって心の弱さなんか呑まれてたまるか!!

「俺は俺自身のために冥琳を救いたいんだよ!! 俺にとってこの呉は第二の故郷であり、絶対に失いたくない大切な人たちが沢山いる大切な場所なんだ!!!! それが壊されるなんて冗談じゃない!!!! 俺に出来ることが目の前にあって俺には冥琳を助けるための力がある!!!! だからどんなに可能性が低くても、どれだけ危険でも俺はやってやる!!!! それが俺の示す道であり、俺が俺である為に必要な事だ!!!!」

華陀「龍司…ふ、そこまでの覚悟。ならば俺も最後まで付き合うぞ!!!!!!」

「おお、華陀！！ やってやろうじゃないか！！！！」

暑苦しいとしか言えないのだが、この時二人の精神は完全に同調し…
不思議なことが起こり始めていた

華陀「む…先程まであれほど体に感じていた疲労が…」

「殆ど感じられない…これなら」

華陀「ああ、これならば後は全身全霊を込めて最後の鍼を病魔の元に打てば…終わりだ」

「よし、なら頼んだぞ。華陀！！」

華陀「ああ！ 行くぞ、うおおおおおおお！ 全力全開！ 必
察必治癒！ 五斗米道おおおおお！！！！ 元気になれえええ
えええ！！！」

華陀の残った氣を込めた鍼が冥琳の体に打ちこまれ…
それは強大な光となり、その光は柱となって呉のあらゆる場所に降
り注いだ

数秒後にはその光は次第に治まっていき、それと同時に龍司と華陀
は床に倒れこんでしまった

孫文台と新たな管理者

「…ん…んうう…」

体が凄く重々しく感じられる…

まるで全身に重しをつけているような感じ…

そして、なんだか凄く眠い

??? 「……………」

?

目の前に誰かが俺の顔を覗き込んでいるようだ

だけど眠たくてとてもじゃないが瞼を開ける気力さえもない

??? 「この子があの外史の運命を変えるか…あいつの言うことが
本当なら、私はそれを信じたいわね」

…何を言っているんだ？
外史？

運命を変える？

それを信じるって？

あいつとは？

そもそも…この目の前にいる人は誰なんだろう…

眠くても軍師の中で仕事をしてきた龍司は頭の中で疑問に思ったことを整理していた

??? 「…♪ えい！」
バキッ！！

「ぶるあっ!?!」

いきなり顔を思い切り殴られた龍司
その衝撃で先程までの強烈な眠気が頭からさっぱりとなくなっていた

「な、い、いきなり何を……………え」

龍司は眼を開けた瞬間、言葉を失ってしまった
自分は確か冥琳の体の治療のために華陀と共に雪蓮に手配されていた一室の中にいたはずだ
だが今龍司が居る場所は少なくとも今まで見たことも来たこともない場所だった

「ここは一体…」
??? 「…ここは簡単にいえば外史から終わりを告げられた物が辿り着く場所…言わばあの世と同義の場所と言って良いのかしら？」
「…何故に疑問形」

「???」「し、仕方ないでしょ!! 私だってそこまで詳しいわけじゃないんだから」

「というかあなた誰ですか? 何だか俺の知ってる人に凄く似てるんですけど…」

「???」「んふふ♪誰だと思う?」

この話し方…髪や肌の色…気まぐれな猫という皮を被った虎みたいな感じ…
もしかして…

「???」「…今何かすごく失礼なこと考えなかった?」

「いいえ、気のせいですよ。…もしかして、孫文台さん?」

孫堅「正解♪ 流石ね、天の御遣いさん」

「…雪蓮がもう一人いる感じがしたのでまさかとは思ったのですが」

孫堅「ふふ、流石雪蓮達のお気に入り君ね」

「…なんですかそれは」

孫堅「特に雪蓮はもう君を抱いたからねえ」

「ブッ!？」

普通は抱かれた…ではなく、抱いたと言われるべきなのだろうが
龍司ですから…

孫堅「あら、どうしたの?」

「……何で知ってるんですか」

孫堅「表舞台から姿を消してからそういった情報が入ってくるようになったのよ。あの人がこの外史を司るようになってからね」

「?」
あの人…というか外史ってどういうことですか?」

孫堅「…私からあまり詳しいことは言えないんだけどね。でもあなたは知る必要がある。あの世界の秘密を…」

孫堅の口から語られたことは龍司に強い衝撃を与えた

繰り返される歴史…それを管理している【管理者】の存在、そして歴史通りにシナリオが成り立たなくなると管理者によってその外史はリセットされる

それが決まりであり、破られることは今まではないことだった

その中でも本郷一刀という存在はイレギュラー中のイレギュラーと言える存在

何故なら、本来組み込まれることのない存在である彼は幾度なくこの外史に組み込まれていたからである

故に管理者は幾度なく、一刀を排除しようとしていた

その中で、一刀は幾度も死んだり殺されもしたし、管理者達によって自分の世界に戻ったり、管理者達を出し抜き、自分達だけの世界を作り上げたりしたらしい

だが、ここで新たなイレギュラーが誕生した

それが城崎龍司

それに伴い、龍司がこの世界に招かれる少し前、この外史の管理者が変わったそうだ

「…その新しい管理者が俺をこの外史に呼んだということなのか？」
孫堅「それは分からないわ。でも…貴方は選ばれてここに来た。それは間違いないわね」

「…その管理者の名前は？」

孫堅「御免なさい。私も知らないの…何しろ良く分からない覆面を被っていたから」

「…なら今までの管理者の名前は？」

孫堅「確か…あいつは左慈と于吉と呼んでいたわ」

「なッ!？」

左慈と于吉

忠志では兩人、仙人と謳われた人物

左慈は昔、曹操に仙人にならないかと誘い、断られた上に殺されそうになった所、仙術であらゆる殺傷を避けたと言われる人物

于吉は昔、孫策が殺してしまった人物で、それ以後孫策は何かに取り憑かれたようになってしまい死亡したという記録が残っている

「…この世界ではこの二人は表舞台では姿を見せないのか…?」

やあ、雪蓮は…どうやって」

孫堅「…今までの歴史通りなら雪蓮は曹操軍との戦いの際、許貢の兵士達の独断行動によって毒矢を受け、死んだわ」

「え…ちよ、ちよっと待ってくれ。許貢?…また俺の知ってることと少し食い違ってる」

許貢は龍司の世界の記録だと呉郡の太守で曹操の策によって、孫策に滅ぼされ、その際に逃げ出した許貢の元で世話になっていた食客達により報復を受け、孫策は狩りの日に毒矢を受け、死にかけたところを華陀に救って貰った

だがその後、于吉のことでその古傷が開き死に至った

これが龍司の知る歴史である

「…うーん、何だか色々混乱してきた」

孫堅「そんなに難しく考えることはないわ。でもこれだけは知っておいて。貴方は今いる外史を変えうる存在なの」

「え…一刀じゃなくて俺が？」

孫堅「ええ、実際に貴方は本来赤壁後に死ぬはずだった冥琳の命を救った」

「ッ…め、冥琳！！ そうだ、冥琳は…」

孫堅「安心して、冥琳はもう峠を越えたわ」

「そ、そう…ですか。よかった…」

孫堅「…っともう時間がないわね。ねえ、龍司、娘達を…これからも呉を頼めるかしら」

「……」

龍司は孫堅の真剣な瞳を黙って暫く見つめた後…決意を固めた顔をして宣言した

「我が名、城崎龍司の名の元に誓おう。我が生尽きるまで我呉に尽くすものなり」

孫堅「ふふ、ありがとう。私の真名は紅蓮^{ぐれん}よ。ああ、そうそう一つだけ忠告させてもらうわ」

「？」

紅蓮「今のまま、【城崎龍司】のままだとこの外史に最後まで残ることは出来ないわ」

「え…それって」

紅蓮「言ったでしょ？ 異端者は弾かれる、それが外史の決まりな

のよ。だから本郷一刀と貴方はある程度歴史が進んでしまうもしくは役割を終えた時、外史から姿を消す。それが決まりなの…例えば、管理者が手を下さなくてもね」

「…どうすれば残ることが出来るんだ？」

紅蓮「それは貴方が考えて♪」

「む、無責任すぎない!？」

紅蓮「五月蠅いわね! 私は考えるのが嫌いなよ!!」

「うわー、雪蓮と同レベルな感じ…」

紅蓮「そ、そんなことはないわ! わ、私は雪蓮と違って自分の仕事はしっかりとこなしていたもの!!」

「……」↑疑いの眼で見ている

紅蓮「そ、そんなことよりも!!」

「(あ、誤魔化した)」

紅蓮「貴方のこと、大切に思ってる人たちが沢山いるんだから…泣かせちゃ駄目よ?」

「…分かってる、副長曰く、女性を泣かせていいのは伽の時だけだと…それ以外で泣かせたら…自分で自分の息子切れ…だそうだから肝に銘じさせてもらう」

紅蓮「うんうん♪ あ、そろそろ貴方が目覚めるわ。頑張ってるね、龍司」

「生きている者として精一杯足掻いていくよ、紅蓮」

そう言い残した後、龍司はその場から姿を消し、元居た外史に戻っていった

紅蓮「さて、と…」

紅蓮は先程まで醸し出していた雰囲気を一変させ、殺気をとある場所に向け始めた

??? 「おやおや、お話が終わった途端に私に其れほどの殺気向けますか」

紅蓮「当たり前でしょ？ あなたは確かに私に世界の真実を教えてください。だけど…」

??? 「私も管理者だから、ですか？」

紅蓮「ええ、そうね。私達は今までも…そしてこれからも貴方達の手のひらの上で踊らされ続けるのかと思うとね。反吐が出るのよ」
??? 「ふふ、流石江東の虎ですね。おお、怖い怖い」

紅蓮「…馬鹿にしてるのかしら？」

??? 「いいいえ、事実を言ったまでですよ。それより、先程はご苦労様です」

紅蓮「…一体どういうつもりなの？ 異端である彼に世界の真実を教える」

??? 「特に意味はありませんよ、ただ私は于吉や左慈のように歴史通り事を進めるなんてつまらないことはしたくないだけです」

紅蓮「……」

??? 「くっくく…さて、これで彼は手札を増やすことが出来ました。これから彼がどう歴史を変化させていくのか…非常に楽しみです」

紅蓮「ち、この快樂主義者が」

??? 「いいえ、違います。私は…」

———ただどSなだけです？

紅蓮「……」

???「それにしても…未だにあの教えを覚えていたとはね（ボソッ）」

紅蓮「？ 何か言ったか？」

???「いえいえ、何でもありませんよ」

紅蓮「…まあ良い、お前が歴史の改変を許したおかげで冥琳が死なずに済んだのだからな」

???「だから言ったでしょうに、この件は貴女にとって悪いことではないのだと」

紅蓮「ふん、どうだかな」

???「やれやれ、信用ないですねえ」

紅蓮「ならば名くらいは教えろ」

???「そうですね…良いでしょう、私の名は…」

——性を司馬

——名を炎といいます

孫文台と新たな管理者（後書き）

司馬炎は結構有名だと思うのですが…名前の通り司馬懿関連の人です
まあこの人は魏が職を滅ぼした後、魏を牛耳った後、呉を滅ぼして
晋という国を立てた人みたいです
まあそんなわけで何となく管理者的な立場になれるんじゃないかな
とって使うことにしました

城崎龍司、改名す。 新たな名は…

目を覚ますと龍司は自室の寢床に居た

目覚めてから色々と確認し直さなければならぬことも多々あったのだがまずは冥琳のことを確認しに行こうといざ立ち上がろうとしたのだが…

体が思うように動かなかった

まるで錆びたブリキ人形の如く、関節は動かすたびに痛み、筋肉は所々がかなりやばい状態というのが良く分かった
仕方なく龍司はゆっくりと首を窓の方に向けてみた

朝日は既に上っており、皆仕事に取り掛かっている時間はもうとうに過ぎていると言っても良い時間のようだった

「ま、拙いな…もしかして寝坊したのか？」

あちゃあ、氣を使い過ぎて気絶したところまでは何とか覚えてるけど…

それから俺はどうなったんだろう…

紅蓮さんは冥琳は無事だと言っていたけど…

「だけど体が動かないって…ハア、どうしょ」

体が動かないことにはどうすることも出来ないと思った龍司はとりあえず先程の紅蓮の話を整理することにした

「…この世界での歴史の流れと俺の知る三国志の歴史の流れは多々食い違っていた。例えば、恋のこと。月のこと。冥琳のこと。そして俺自身と一刀。様々な場所と時が異なる。ハア、段々と俺の知識が役に立たなくなってくるな。…もう少し色々と思い出してみるか…体が動かないからメモ出来ない…オーマイガー…」

OTZのポーズすら出来ない為、おちおち落ち込むことすらかなわない龍司であった

ガランッ！！ ガシャン！！！！

「ん？」

何やら何かが落ちる音と割れる音がした
どうやら龍司の部屋のドアの方から聞こえたため、龍司は再び首を何とか動かしその方を見てみると、そこには何故か（○△○）こんな顔してる蓮華と思春が立っていた

どうやら蓮華が水の入った桶を思春が陶器に薬湯を持ってきていたようだ

床の方を見ると壊れた陶器の方が水ではなく何やら濁った液体が入っていたのが見えた…

「お、蓮華に思春。おはよう…って言うには遅いか」
蓮華「り、龍司？」

「んお？ 何」

蓮華「龍司っ！……！」

「んおわ！？ な、何、どうしたの蓮華！？」

蓮華「どうしたなどではない……！　すべて話は姉さまから聞かせてもらった……！」

「うわちゃ、思春。本当に？」

思春「……ああ」

「で、どうして蓮華はそんなに怒ってるの？」

蓮華「（ピクツ）どうして、だと？ 分からないのか、龍司……」

「ん、まあ今起きたばかりだから……色々分からないことがあるから教えてもらいたいんだけど」

蓮華「それよりもまず私の話を聞いてもらおうか……」

何やら蓮華から凄い濃厚な怒気を感じるのだが……

俺は何かやらかしたのだろうか……

だが身に覚えがないのだが……などと考えている龍司だった

蓮華「龍司、あの強烈な光のことは覚えているか？」

「光？……ああ！　あの、俺と華陀が最後に氣を込めて冥琳に鍼を刺した時に出た」

蓮華「ああ、その光は町中に広がったということは知っているか？」

「え、そうなの？……あの、もしかしてその光、何かに影響をもたらしたとか？」

思春「その通りだ、流石に鋭いな」

「……何か聞きたくないけど、悪い結果になった？」

思春「……いや、不思議な話なのだが……その光を浴びた者全員体の調子が良くなり、疲労や病が一瞬のうちに消え失せたという話だ。また街中で喧嘩騒ぎをしていた者達もその光を浴びた後急に何事もな

かったかのように仲違いを止めたそうだ」

「…何それ？」

蓮華「私達もよく分かっている。だが、華陀によると原因は不明だが恐らく天の御遣い故の奇跡の光ではないかということにした方が良さだろうということだ」

「つまりは華陀にも良く分かっているってことか。それなら原因不明というよりも聞く側としては良いだろうね」

あの光は結局何だったのだろうか…

龍司が決意を口にし、華陀と心から共に冥琳を救いたいという気持ちが強くなった瞬間、急に体の疲れが取れて…そして最後の鍼を打った瞬間に出た光…

機会があれば少し調べてみよう

蓮華「さて、話を戻そう」

「え、まだあるの？」

蓮華「ああ、その光を見たのは城に居た者全員だ。勿論私もな。故に何があったのか聞こうとしたら思春はその時、どこにもいないし…明命、祭、百合の三人はちょうどその頃調練があったから、声をかけに行くわけにもいかなかったの。で、そんなとき偶然姉様に会ったのよ。しかも何やら急いでいるようすだね。きになったから後をつけてみたら姉様が向かっていたのは先程強烈な光が出ていた方だったの。そして一室に入っただのを確認して私も入ったら…龍司と華陀と冥琳が倒れてるのを見つけて…」

あゝなんとなく想像が付く

倒れてる三人を見つけて混乱する蓮華とそれを治めながらもチラ見しながら心配してくれる雪蓮の構図が：

蓮華「一応、私は姉様のお陰で落ち着いて：その後、思春がその部屋に思春が来てくれて」

思春「：私はそろそろ終わったかと思い、水を持っていこうと思っただけ」

「：そうなんだ、でその後は？」

蓮華「ハア：その後が一番大変だったんだぞ？ 華陀は唯の氣の使い過ぎということで大事には至らず2・3日休めばどうということはなく、冥琳の方も体を蝕んでいた病魔はすっかりと消え去り、今は念のため3日ほど休養を取ってもらっていた。だが：龍司は」

「？ 俺がどうかしたのか」

思春「ハア：お前は5日、ずっと眠り続けていたのだぞ？」
「……え？」

5日間、眠り続けていた???

俺が？

Mjd?

蓮華「：皆、お前のことを本気で心配していた。冥琳も目覚めてから龍司の見舞いに度々来ていたし、この城にいるすべての者は少なくとも一度は龍司の部屋に来ていた」

思春「百合や明命、小蓮様や亞莎はかなりの頻度でこの部屋に来ていたな」

「そうか：皆にはいらぬ心配かけさせたみたいだね。謝らないとな」

蓮華「いらぬ心配であるわけがないだろ！！ お前は華陀と共に危険を承知で冥琳を救ってくれたのだろう！？ ならば私達はお前に感謝せねばならない立場だろう」

「いや、感謝されてもちよっと困るんだけど」
思春「？ 何故だ」

「：俺は俺が冥琳を助けたい、そう思ったから行動した。ただそれだけのことだからだ。もし、あの時冥琳がそれを望まなくとも俺は動いた。単に今回の件は俺の我儘だってことだ」

蓮華「それでもだ。私とて冥琳には死んでほしくなどなかったからな。だから、ありがとう龍司」
「ふ、ああ」

ガチャ：

再び扉が開く音が聞こえたため三人はその方を向いた
今度は小蓮、明命、百合、祭、穂の5人が来ていた

「どうも、おはよう」

手が動かないのでとりあえず朝の挨拶くらいはしておこう
なのだが：

小蓮「り、龍司~~~~！！」

まさかのルパンダイブ
ドゴッ！！！！

「ぐはッ！！」

腹に強力な衝撃を受けた龍司
一瞬、気を失いそうになったが我慢することが出来た

蓮華「しゃ、シャオ！？ 何をやっているのだ！！」

小蓮「龍司！ もう本当に心配したんだからね！！」

「あゝ、悪い。でもとりあえず俺の上からどいていただけませんか
？ 正直、今身体中痛いんで正直今も気を失いそうなんですけど…」
小蓮「あ、ごめんね」

何とか説得に成功し、小蓮は龍司の上からどいてくれた

祭「体が動かぬのか？」

「ええ、どうにも気脈の方もボロボロみたいなので…多分、動ける
ようになるまではあと2、3日休まないと思う」とどうにもならないと思う
明命「だ、大丈夫ですか？」

「ん、心配してくれてありがとう。でも休みを取れば治るから大丈夫
夫だよ、明命」

本気で心配してくれている明命の顔を見て頭を撫でてあげて安心させてあげたいと思った龍司だったが、如何せん体が動かない…

穩「それにしても、まさか冥琳さんの病気を華陀さんと協力して治してしまわれるなんて凄いですね」

百合「龍司様、仕事を減らしてもらいその時間の間はずっと鍛錬に励んでいましたから」

蓮華「でも皆酷いわ。私や小蓮には話してくれなかったなんて」

小蓮「そうよそうよ。ねえ、何で私達に秘密にしたの？」

思春「はっ。それは…」

「今は呉にとって大事な時期だし、冥琳が病気で助かる可能性が限りなく低い状態だなんて知ったら、皆困惑するだろうし…そんな情報が他国に流れてしまったらどうなっていたと思う？」

蓮華「あ…」

「そういうこと。だから、皆で相談してこの事は必要最低限の者のみが共有する秘密としておこうってことになったんだ」

国の大黒柱の一つともいえる周公謹が病気に蝕まれているなど知れ渡れば、恐らく今一番こちらを警戒している荊州軍が仕掛けてくる可能性があった

まだこちらとしては荊州と真っ向から対峙する用意は完全に整っていない為それは避けたかったのだ

まあ、国主の劉表は優柔不断な性格と有名のため、問題はないのだが…

配下にいる蔡帽は違う

彼の妹は劉表の妻であり、蔡帽は裏で荊州軍を動かせるのだ故に、こういったこちらが不利になるであろう情報は漏らさない方が得策なのだ

蓮華「すまない龍司：私が浅さかだったな」

「いや、そんなことはないと思うんだけど…あ、そうだ。誰でもいいから月を呼んできてくれないかな？」

小蓮「月を？ どうして？」

「ん、体が動かない間侍女の彼女に俺の身の回りの世話をして貰いたいからね。後は…月だけだと俺の体を起こしたり出来ないだろうから…」

朧辺りにでも頼もうかな…

などと考えた矢先…

「「「「「なら私（儂）が！！」「」「」「」」

その場にいた全員が一斉に声を上げた

龍司、思わず（○△○）っていう顔になってしまった

蓮華「シャオ？ 貴女は穏や亞莎と一緒に勉強しなければならない

ことがあるでしょう？」

小蓮「ぶうー、お姉ちゃんだってやらなきゃならない仕事まだたくさん残ってるでしょ？」

百合「…どういう心境の変化ですか思春殿？」

思春「…と、特に意味はない。だ、だが…龍司は冥琳様の命を救った。その後遺症で体が動かぬのなら世話くらいはしてやるべきだと思っただけだ」

百合「ああ、そうですか。ですが、私は自分の意思で龍司様のお世話をしたと思います故」

思春「…」

な、何かこちらの4人からは尋常でない位の氣というか…殺氣の様なものを感じるのだが…

正直言っ…怖いです、安西先生

穩「はうー、祭様はどうして龍司さんのお世話を？」

祭「何、今の龍司は病人と同じであろう？　ならば精の付く物を食さねばならん。そういった物は儂は作り慣れておるからのう。それならば儂は適任だと思っただけじゃが？」

明命「で、ですがその方面は恐らく月さんがいらっしやいますから不必要だと思えます！！　寧ろ龍司様はお猫様と共に心からの安らぎを」

祭「くっくく、明命よ。龍司は猫が苦手であるということを忘れたわけではあるまい？」

明命「あっ…はうー、そ、そうでした…」

祭「それに穏よ。お主と今動けぬ龍司を一緒にさせるといふのは色々危険だと僕は思うのじゃよ」

穏「どうしてですか？」

祭「主は本を読むと発情するじゃろうが。今動けぬ龍司の隣で本でも読まれたら抵抗する手段のない龍司殿は大変な目にあるじゃろうて」

穏「むう……」

こっちはこっちで冷静に分析してますよ…

とりあえず、早く月を呼んできて欲しいのだけど…

それから月が龍司の部屋に来てくれたのは全員が討論を終えるまでにかかった

因みに結論は持ち越しということになった

何故ならその場に居ない人員も龍司の世話係を立候補するであろうと蓮華と祭が発言したためである

それを決めるべく、龍司の部屋から出ていった蓮華たちだった

部屋にポツンと残されたのは部屋の主である龍司と侍女の月であった

月「大丈夫ですか、龍司さん」

「ん…とりあえず体が動かないだけだからね」

月「どれくらい動かさないんですか？」

「腕上げるの勿論、起き上がることもすら無理みたい」

月「そうですか…なら私以外にもう何人か必要みたいですね」

「…それなら何か自動的に決まりそうな気配だったけどね」

月「クスッ、皆さん龍司様がお好きなんですね」

好きでいてくれるのは別にいいのだが…もう少しソフトに接してくれると有難いと心の中で思う龍司

月「龍司様、何かして欲しいことはありますか？」

「ん、とりあえず風呂に入りたいって思うんだけど…この体だとそれは無理だからせめて体くらい拭きたいかな」

月「えっと…私一人だと龍司様の体を起こすのは無理ですね」

「ああ、だから月。誰かが来るまで少し話相手になってくれないかな？ それか…引き出しの中に入っている遊戯の相手になってくれないかな？」

月「あ、では直ぐに用意しますね」

引き出しの中に入っていたのは龍司がこの世界ではやらせたゲーム
トランプ、UNO、人生ゲームなどなど…

中国に因んで麻雀も流行らせてみました♪

本当なら麻雀の起源って宋の時代から何だけどね…

時代を先走ってみた

因みに言うと…呉では大流行してます

雪蓮も麻雀にハマっているし…

何より意外なのは軍師達が最もゲームにハマっているということ

龍司がこういったことは頭の回転にも良いかもしれない

なんて軽口言ったのが切っ掛けだったというのは裏話である

とりあえず月と龍司は軍将棋をすることにした
理由は簡単

月が龍司作の遊戯の規則を知らない為である

流石と言うべきなのか

龍司は月に圧勝した

まあ駒は動かせない為月に動かしてもらったのだが：

詠「へえ、あんなかなか強いのね」

「ん、まあ時間が空いた時に冥琳や穩に相手になってもらってたからね……って詠？　いつから居たの」

詠「ついさっきよ。仕事が良いところできりが付いたからあんなの様子を見に行こうと思ったのよ」

「ん、ありがとう」

詠「ふ、ふん。か、勘違いしないでよね！　私はあんなに何かあれば月が悲しむと思ったから心配して来てやっただけなんだからね！」

「それでもありがとうだ。俺のことを心配してくれたというだけでありがたいよ」

詠「……っ！」

「????？」

何やらみよんな顔してる詠を不思議そうな顔で見ろしか出来ない龍司であった

そんな詠を諫め、状況と状態を説明してくれる冷静な月
そんな光景を見つめ、「あ、やっぱり対照的な性格の人って仲良く

なり易いんだね」や「逆に同族嫌悪で言葉がある位だから似た性格だと仲良くなり難いんだろうね」
なんて考えている龍司だった

こっちの状況を理解した詠は落ち着いたのか龍司の軍将棋の相手をしてくれることになった

詠「…なら右翼を無力化させるわ」

「その隙に本陣を叩かせてもらう」

詠「させると思う？」

「ううん、それを囿に右翼に力を取り戻させ、左翼と共に挟撃を掛ける」

詠「隙だらけよ」

「うぐっ…それすら囿か」

3手先を読まれ、龍司の負けとなった

「くそ、負けた」

詠「いや、でも強いわね。あの馬鹿ち○ことは大きな違いだわ」

「…あの、詠さん？ その馬鹿○んこつてもしかして…一刀のこと？」

詠「それ以外誰が居るのよ」

「いや、幾らなんでもその言い方はないと思うよ？ っていうか年頃の女の子がち○こつて…下品だから止めた方がいいと思う」
月「え、詠ちゃん。一応はお世話になっていた人なんだし…」

詠「知らないわよ。だってあいつ、昼間から桃香といちゃついたり、鈴々とあんなことしたり、星としっぽりしてたりする節操なしなんだから。あいつの脳みそ、下半身にあるんじゃないかしら」

これ以上ない位にぼろくそに言われまくってる一刀君：

でも何故だろう：あまりフォローに回ってやる気にならないでいる龍司であった

「え、えっと：お、男としてはそういったことに目が行ってしまうのは当然なのでは？」

詠「それは理解してるつもりよ。ただあいつはあんたと違って見境がないって言いたいのだよ！！ 後、せめて周りを気にして欲しかったわ」

：あゝ、月と詠にメイド服着せて侍女させてる一刀君だから何となく分かるわゝ

龍司の一刀に対する評価が更に下がった

今度から変態という名の一刀とでも呼ぼうかなと思った日であった

一刀「は、は、はくしょん！：！！」

朱里「はわわ！ ご、ご主人さま？」

桃香「どうしたのご主人様。風邪？」

一刀「ぐすっ…いや、多分誰かが噂してるんだと思う」

雛里「そ、そうなんですか？」

一刀「うん…多分詠辺りが俺の悪口でも言ってるんじゃないかな？」

桃香「あはは…でも、月ちゃん達元気かな？」

一刀「大丈夫だと思うよ、龍司もいるんだしね」

徐州ではこんなやりとりがありました

「ま、まあそんなことは置いておいて…詠、雪蓮達は今何をしてるのか分かる？」

詠「良く分からないわ、ただ恋達も集めて何か話し合ってるみたいだったわ」

「あゝ、恐らくけど…俺の世話誰がやるかでも決めてるんだろう」
詠「…成程ね、あんた今体が動かないから」

「最初は月と朧辺りに頼もうかと思ったんだよ。それを言おうとしたらその時部屋にいた全員が何故か立候補したと思ったら…」

詠「まあ、そこまで言われれば何となく予想はつくわ」

「ハァ、誰でもいいから早く来て欲しいんだけど」

詠「ん、どうしてよ」

「5日間寝たままだったらしいから体がいい加減匂うだろ？　だか

ら体を拭いて着替えたいと思ったんだよ」

詠「そう、分かったわ。とりあえず誰か武官を呼んでくるわ」

詠は龍司と月を部屋に残して先程雪蓮達が話をしていたという部屋

に向かうことにした

詠が出てから暫く経って部屋に華陀と冥琳がやってきた

華陀「調子はどうだ？」

「ん、とりあえず体が動かないこと以外は問題ないよ。華陀の方は？」

華陀「俺の方は氣を使い過ぎたことによる氣絶のみだ。それにしても…あの光は何だったんだろうな」

「分からん、何か冥琳を絶対に助けたいって気持ちが強くなった瞬間に出てきたみたいだけど…」

華陀「俺に問題がないということは…あの光の元を創りだしたのは龍司ということになるな」

冥琳「もう話には聞いているとは思うが…あの光は天の御使いの奇跡の光とさせてもらっている。流石に正体が分からぬ以上、民に不安を与えたくはないのでな」

「ああ、それは構わないけど…冥琳」

冥琳「ふ、心配しなくても良い。もう体の方には異常はないそうだ」
「…華陀？」

華陀「周瑜の言うとおり、体を蝕んでいた病はもう消え去っている。後はゆっくりと養生して無理をしなければ大丈夫だろう」

「そうか…良かった。あ、なら華陀。またあとで相談したいことがあるんだけど、良いかな？」

華陀「ああ、別に構わないが…？」

「そう…ならさ、ちよつと冥琳と二人きりにしてくれないかな？あ、それから月」

月「はい、なんですか？」

「悪いんだけど…雪蓮と蓮華と小蓮だけにこの部屋に来るように言ってくれない？ 大事な話があるからって」
月「？ はい」

月は龍司に言われたとおり、三人を呼びに行き、華陀はもう用事はなくなったため部屋を退出し宛がわれた部屋に戻っていった

冥琳「それで…話とは？」

「それは雪蓮達が来てから話すよ。冥琳、俺が寝ていた間に何か変わったことはあった？」

冥琳「そうだな…とりあえず河北の袁紹と公孫賛が戦い始めた。だが、袁紹の方は通告をせずに一方的に攻め入ったらしい」

「…うわぁ、相変わらず自分勝手且つ礼儀知らずだな。流石名家（笑）…今成長中の美羽とは偉い違いだね…」

冥琳「ふふふ、ああそうだな。美羽の方の勉強は龍司が目覚めるまで穏と亞莎がきちんとしてくれていたそうだ。最初は龍司のことが心配だから龍司が目覚めるまで勉強せずに面倒をみると言っていたらしいぞ？」

「あ…美羽にも心配かけさせたのか」

冥琳「ああ、皆龍司が目覚めるまで酷い顔をしていたぞ」

「…そこまで無茶したつもりはなかったんだけどね。後でもう一回謝っておこ。っと、話がずれたな。冥琳、後は？」

冥琳「そうだな…曹操の方は着々と勢力を整えつつあるそうだ。龍司が育成してくれた【光】の部隊、かなりの練度ゆえに持ってきてくれる情報の質が高い。兵力は10万を越え、新たに徐晃や孫礼などといった将を得たそうだ。近々、河北を攻める用意をしているらしい」

「…華琳のことだから…恐らく公孫賛と袁紹の戦いが終わった後に

攻め入るだろうな。一番その決戦の舞台に適してるのは：官渡か？」

冥琳「だろうな。次だが、吉報として入ってきた応報なのだが：荊州の劉表が病に伏しているそうだ」

「へえ：なら次に起こり得る問題は後継者か」

冥琳「そういうことだ。長男である劉琦は病弱故にいつ死ぬか分からぬ身且つ現劉夫人の実子ではない。そして二男の劉？は未だ幼く政が出来るほどの物ではないが劉夫人の実子。龍司の言った通り、今荊州は二つに割れているそうだ」

「：俺は少々警戒すべきだと思う点がいくつかある」

冥琳「：聞かせてもらえるか？」

龍司が挙げたのは自分の世界の荊州の跡継ぎ問題の際に起こったこと

1. 劉表は跡継ぎに劉琦を選び、その後見人として劉備を選んだ
2. 国を支配されてしまうと思った蔡瑁は劉表の死後、劉琦を荊州から追い出した
3. 劉？が後を継いで直ぐに荊州の実権を曹操に明け渡した

冥琳「：成程、確かにそれなりに頭のまわる蔡瑁ならそれくらいのこととはしそうだな」

「だから俺は今のうちに桃香と共に荊州を攻めるべきだと思う。割合としては：荊州、襄陽、樊城は劉備軍に：長沙、零陵、桂陽、武陵はこちらがというの？」

冥琳「悪くないが：それだと劉備軍は真っ先に曹操軍と対立することになるぞ？ 何せ荊州は曹操も手に入れた土地だろうからな」

「だけどその分、利の方が大きいと思うよ？ 荊州には優秀な人材が多くいるし、何より兵士も多く集まり易い地でもある。後のことを考えると大変だけど：桃香はそんなことを言ってる場合じゃない

からね」

例えば馬良とか馬謖とかね

荊州って他にも有能な人材って結構いるんだよね
色々と忠志と食い違いあるけど…

例えば、魏延とか黄忠とか…

冥琳「ふむ…では早速使者を出しておこう」

「お願いします」

ガチャツ・・

話を終えた時、ちょうど雪蓮達が部屋に来たのだが…

冥琳「ああ、雪蓮……………何だその格好は」

龍司も冥琳も咂然とせざるを得なかった
特に龍司は…

無理もないだろう

何故なら雪蓮と蓮華が来ている服が…

看護服だったのだから
所謂ナースの服です

雪蓮「えへ♪どう龍司？ 似合う？」

蓮華「し、下が短すぎる…／＼／＼」

そう、今蓮華と雪蓮が来ている服は太腿丸出しで下着が今にも見え
てしまいそうな位なのだ
おお、卑猥卑猥

小蓮「ぶうくく、お姉ちゃん達だけズルイ」

雪蓮「しょうがないじゃない。くじでの公平な結果だし…それにシ
ヤオにこの服は大き過ぎるわよ」

小蓮「うう…」

色々と突っ込みどころは満載なのだが…まず聞くべきなのは…

「…お二人とも、その服は？」

雪蓮「えっと、少し前に皆で服を見に行った時に見つけたのよ。何
でも徐州の天の御遣いが見立てて作りあげた逸品だとかで」

あ・の・へ・ん・た・い・が！！！！

メイド服だけじゃ飽き足らずナース服まで作る考案までしたのか！！！！

…この様子だと他にも色々と作ってそうだな
今度機会があればOHANASHIしよう

そうしよう

是非しよう

詠じゃないけど…
ち○こもげろ

↓徐州↓

一刀「(ぞくっ) な、なんだ？ 今とてつもない寒気が…」

呉服屋「御遣い様、それで新しい服の考案は？」

一刀「あ、ああ。こんなのなんてどうだろう？」

そこに書かれているのはゴスロリ、体操服、バニーガールの服など
もうマニアックとしか言いようのないものばかりがこれぞとばかり
に書き留められていた

一刀「…どうだろう？」

呉服屋「ふふふふ、相変わらず御遣い様の服に対する案は私が今までに見たことのない斬新な物ばかりです。これは腕が鳴りますね」

一刀「じゃあ頼めるかな？」
呉服屋「へい！ 一月後には必ずすべて仕上げて見せますぜ」
一刀「よろしく頼むよ」

自身に危機が迫っているとも知らずに新しい服を作成してもらうことに精を出している一刀であった

↓徐州 Side Out↓

「：／／／／／」

ま、拙い

ちょ、直視できない

もう一回見たら俺は死ぬ：

特に蓮華

着たのならそんなに照れないで欲しい

照れてる顔が余計にきつい

あと雪蓮、そんなギリギリの恰好で俺に寄らないで：

色々と葛藤と戦ってるんだから：心の中で

雪蓮「お店の人が言うにはこの服は天の国では看護する人が着る服だそうよ」

「：間違っではないけど：それは本職の人が着る物であって雪蓮や蓮華が着るべきものではないので早く着替えてもらいたいのだけど：

雪蓮「えゝゝゝ」

「ハア：まあとりあえず4人に話しておくべきことがあるからそれ話し終えたら直ぐに着替えてね」

蓮華「あ、そういえば月が私達を呼んだ理由を聞かせてもらっていなかったな」

「ああ、実は俺が寝ている間のことなんだけど…」

龍司は語った

自分が眠っている5日の間、龍司の意思はこの世界から外れたところに飛んで孫堅と出会っていたこと

冥琳の件で礼を言われたこと

【城崎龍司】のままだとこの世界に居られないことが分かったこと

因みにこの外史が幾度なく繰り返されることや雪蓮の命が危ないことなどは今は伏せることにした

必ず紅蓮の言っていたことが起こり得るとは限らなくなっている可能性があると龍司が推測したためである

雪蓮「：俄かには信じられないけど」

冥琳「だが信じるに値するだろう。何しろ私達が誰も教えていなかった紅蓮さまの真名を知っているのだからな」

蓮華「それに母様の特徴も一つ残らず合ってるし：龍司、母様はどうだった？」

「：雪蓮にそっくりだったというか：雪蓮が大人になった姿がそのまま出てきた感じだった」

雪蓮「失礼ね、私は母様みたいにあそこまで破天荒じゃないわよ」

「「「……………」」」

誰も否定できなかった

冥琳「コホンツ…話を戻そう。それで龍司、【城崎龍司】のままだと呉には居られないというのは？」

「呉というよりもこの世界にすることが出来ないと言った方が正しいと思う。この世界は天の御遣い、つまり俺や一刀のような本来の歴史の流れに関与しない人間が居ると自動的にその人物を取り除くようになっていゝらしい。つまり…」

雪蓮「龍司は…天の国に帰ってしまうってこと？」

「それならまだいいかもしれないが…最悪、存在そのものが消されてしまう可能性もあるかもしれない」

蓮華「そんな…」

小蓮「何とか出来ないの？」

「…とりあえず、紅蓮様は俺にその問題を解決するための鍵を一つくれた。それが先程言った【城崎龍司】である限りは駄目だということ。これがどういう意味なのか、それが分かればどうにかなるかもしれない…」

5人は可能性のあることを発言しては討論してはみたのだが、どれもこれも答えにならず結局は考え損になりかけていた時…

雪蓮「……………」　　そういえば」

冥琳「雪蓮、何か思いついたのか？」

雪蓮「ええ、龍司。確か龍司って偽名を名乗っていたわよね？それ

はどうしてかしら？」

「どうしてって…それは……」　　Σ　　そういうことか。成程、その可能性は否定できないかもしれない」

冥琳「偽名……ふっ、成程、そういうことか。確かにそれはあり得るかもしれない。お得意の勘か、雪蓮」

雪蓮「ええ、それにしてもそのことが真っ先に浮かびそうだったのに…」

「多分、その偽名はずっと名乗っていなかったからだと思う。俺自身、忘れかけていたからな」

納得顔で話を進めていく3人に対し、蓮華と小蓮は話についていけないでいた

蓮華「姉様、どういうことですか？」

小蓮「ぶうぶう、三人で話を進めてないで私たちにも教えてよーー
ー！！！」

冥琳「そうですね、ではお二人とも。偽名を名乗る理由を考えてみてください」

蓮華「えっと…正体がばれない様にするため、よね？」

雪蓮「それはどうしてかしら？」

小蓮「え、えっと…」

蓮華「……あ！！！」

「はは、蓮華は分かったみたいだね」

蓮華「そういうことなの。確かにそれなら可能性はあると思うわ」

小蓮「ねえねえ！　　そういうことなの！？」

冥琳「分からないのですか、小蓮様」

小蓮「ぶうぶう、だからそう言ってるじゃないの！！」

冥琳「ハア、日々しっかりと勉強していないから分からないんです

よ」

小蓮「う…」

雪蓮「良い、シャオ？ 偽名を使うということは自分という存在を別の存在と他者に認識させる効果があるのよ。そして本当の自分を隠すという効果もある。だから龍司は天の世界で偽名を名乗っていたのよね？」

「ああ、俺は色々と拙い立場にいた時があったからね。だからこそ、本当の名は使えない時があったから偽名を貰ったんだよ」

小蓮「貰ったって…誰から？」

「……………副長」

雪蓮「副長って…祭が話してたあの？」

「…祭さんから話を聞いてたのなら話は早いかな。そう、俺の心に数多の傷を負わせ、猫嫌いを助長させ、体がぼろぼろになるまで鍛えられ、拳句の果てに沢山からない学問学ばせたり、呪術何かを覚えさせようとしてくれた俺にとっての悪の権化だよ」

蓮華「そ、そこまでいうの？」

「…蓮華も俺が体験してきたことを一つでも経験すれば副長がどれだけ外道か分かるよ？」

蓮華「…遠慮させてもらおうわ」

冥琳「それにしても…お前はその副長のことを名前で呼んだことがないな…名は何と言うのだ？」

「実は…俺も知らないんだよ」

雪蓮「へ？」

「偶然ちよつとした旅行の最中に会って、いきなり「お前の素質を見て興味が湧いた。これからお前を鍛え上げてやる。因みに反論は聞かん」っていった後、拉致られて気が付けば見知らぬ森の中で調練を受けてた」

「「……………（啞然）」」」

四人は開いた口が塞がらなかった上にこれ以上ない位考えたことがシンクロした

——それは誘拐でしょ!!

「で、訓練が終わった後俺はレジスタントに入るように指示されたってわけ」

冥琳「な、成程な」

雪蓮「と、とりあえずもうその副長の話はやめにしましょう」

これ以上は何やら危険なおいを感じ取ったのか、雪蓮は直ぐに話題を切り替えることにした

「まあ結論としては：俺が欲しいのはこの世界での名ということになるか」

冥琳「ふむ：それで効果が本当にあるのかどうかは分からぬが、試す価値はあるな」

「だから4人で俺の名前を考えてくれないかな？」

雪蓮「そうね：じゃあ龍司、とりあえず【龍司】は真名のままでいいとして、性は何が良いと思う？」

「：可能なら【孫】、それが無理なら【周】：それ以外なら候補はないな」

雪蓮「ふむ：なら龍司は冥琳を救ったその褒美として性を孫とすることを許しましょう」

冥琳「良いのか、雪蓮」

雪蓮「ええ、むしろこちらにも利があるわ。天の血が孫家に入ったという証にもなるでしょうしね」

「…性は孫、名は……そうだな、翊というのはどうだろう？」

冥琳「孫翊…悪くないと思うわ。後は字ね」

雪蓮「なら叔弼っていうのはどうかしら？ 今何となく頭に浮かんだんだけど」

小蓮「孫叔弼…うん、シャオは良いと思うわ」

「…なら、今日からは俺は性を孫、名を翊、字を叔弼、真名を龍司と名乗らせてもらう。雪蓮、俺の力と智これからも使ってくれ」
雪蓮「ええ、頼りにさせてもらうわ龍司♪」

こうして龍司は新たな名を手に入れることが出来た

孫翊叔弼

果たしてこれは効果があるのかどうか…

それが分かるのは今管理者である司馬炎とそのそばに居る孫堅以外
いない…

城崎龍司、改名す。 新たな名は…（後書き）

孫翊叔弼
そんよくしゅくひつ

孫策と孫権があまりにも有名なため影は薄いですが一応、忠志では
孫家の中でも優秀な武将で孫策と孫権の弟でも有った人

気將の荒い性格の持ち主で部下を大事にしないことから反発をよく
買っていたそうです

最後は暗殺された人だとか

緊急報告

本日を持ってこの小説

真・恋姫？無双〜二人の天の御遣い〜は半永久凍結となります

理由は色々ありますが第一として完結がやはりゲームとほとんど同じで面白みがなくなってしまう可能性が大き過ぎたことと若干書きづらくなってきたことの二点が大きいですね

ですが、後日この小説に代わる恋姫の小説は書きますので
というかもう書いてます

恋姫好きなんですよ

書きたくてたまらないので…

今まで応援して下さい下さった方々には大変申し訳ないのですが、ご理解
いただけると有難いです

これで2作目ですね

半永久凍結作品…

他の3作品はその可能性はゼロなんですけどね
今のところ…

今後も頑張っていくのでよろしければ応援のほどよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6282k/>

真・恋姫?無双 ～二人の天の御遣い～

2010年10月8日12時12分発行